

原遺跡第1次調査ほか

—岩沼西部・北部地区圃場整備に伴う埋蔵文化財調査報告書—

例言

- 1 本書は宮城県岩沼市南長谷字上原（原遺跡）・字南玉崎（南玉崎遺跡）・字樋（樋遺跡）・字蛭（蛭遺跡）・字京（長谷古館跡）・字田中（台遺跡・烟堤上貝塚）、三色吉字梅（熊野遺跡）・字松（杉の内遺跡）・字龜（長塚遺跡）、長岡字西富得（上根崎遺跡）・字上根崎（長塚北遺跡）・八橋地内（上小潤遺跡）に所在する12遺跡の調査報告書である。
- 2 本調査は、宮城県が計画する農村復興基盤整備事業に先立ち、記録保存を目的として実施されたものである。
- 3 現地調査は、仙台地方振興事務所からの委託を受けて、岩沼市教育委員会生涯学習課が2016（平成28）年10月11日～2018（平成30）年10月3日にかけて断続的に実施した。調査は岩沼市教育委員会生涯学習課が担当した。
- 4 出土品整理及び報告書作成については、2018（平成30）年12月25日～2021（令和3）年3月18日まで、岩沼市文化財整理室にて行った。
- 5 本書の執筆・編集は、生涯学習課内の協議の上、川又隆央・武田裕光が担当した。執筆担当については以下の通りである。
第Ⅰ章・第Ⅲ・Ⅳ章：川又 第Ⅱ章：武田
- 6 原遺跡出土土器の年代については、宮城県教育委員会 村田 晃一氏に御協力・御教示を賜った。
- 7 発掘調査及び整理に際し、次の諸氏・諸機関より御協力・御教示を賜った。記して感謝申し上げます。
(五十音順・敬称略)
生田 和宏、及川 健作、太田 昭夫、大橋 泰夫、押木 弘己、小野 章太郎、尾野 善裕、利部 修、熊谷 滉、後藤 健一、齋木 秀雄、斎野 裕彦、酒井 清治、佐藤 敏幸、白鳥 良一、神野 恵、鈴木 隆、鈴木 拓郎、鈴木 敏則、須田 良平、閑根 章義、高橋 透、玉田 芳英、千葉 宗久、傳田 恵隆、豊村 幸宏、永田 英明、初鹿野 博之、早川 麗司、平川 南、廣谷 和也、藤木 海、古田 和誠、堀 裕、三好 秀樹、村上 祐次、村田 晃一、吉井 宏、吉野 武、渡辺 博人
宮城県教育庁文化財課・多賀城跡調査研究所・名取土地改良区・株式会社バスコ
- 8 本報告書における遺構・遺構挿図等の指示は次の通りである。
 - (1) 遺構の用語及び略称については、文化庁文化財部記念物課『発掘調査のてびき』に準拠した。
 - (2) 遺構実測図の水系高は海拔を示す。
 - (3) 縮尺は図に示す通りである。
 - (4) 土層及び土器の色調は「新版標準土色帳」(小川・竹原: 1973)による。
- 9 遺跡の調査成果については、これまでに第43回古代城柵官衙遺跡検討会、第44回城柵官衙遺跡検討会、平成29年宮城県遺跡調査成果発表会などで内容の一部を報告しているが、これと本書の内容が異なる場合は本書が優先する。
- 10 発掘調査の記録類、出土遺物は岩沼市教育委員会が保管している。

調査要項

調査担当 川又 隆央、永井 三郎、太田 昭夫

【岩沼西部地区】

原遺跡

所在地 岩沼市南長谷字上原 地内

調査期間 平成 28 年 10 月 14 日～11 月 19 日、平成 29 年 1 月 5 日～2 月 28 日

調査面積 515 m²

調査担当 川又 隆央、熊谷 篤

南玉崎遺跡

所在地 岩沼市南長谷字南玉崎 地内

調査期間 平成 28 年 10 月 11 日～12 日

調査面積 142 m²

調査担当 川又 隆央

樋遺跡

所在地 岩沼市南長谷字樋 地内

調査期間 平成 28 年 11 月 22 日～12 月 9 日

調査面積 170 m²

調査担当 川又 隆央

長谷古館跡

所在地 岩沼市南長谷字蛭・京 地内

調査期間 第 1 次：平成 28 年 12 月 24 日～平成 29 年 1 月 19 日

第 2 次：平成 29 年 10 月 11 日～26 日

調査面積 第 1 次：132 m² 第 2 次：23 m²

調査担当 第 1 次：川又 隆央、熊谷 篤 第 2 次：川又 隆央、永井 三郎、太田 昭夫

台遺跡

所在地 岩沼市南長谷字田中 地内

調査期間 平成 29 年 10 月 11 日・25 日

調査面積 24 m²

調査担当 川又 隆央、永井 三郎、太田 昭夫

堤堤上貝塚

所在地 岩沼市南長谷字田中 地内

調査期間 平成 29 年 10 月 11 日～18 日

調査面積 62 m²

【岩沼西部地区】

熊野遺跡

所在地 岩沼市三色吉字悔 地内

調査期間 平成 29 年 1 月 5 日～平成 29 年 1 月 6 日

調査面積 51 m²

調査担当 川又 隆央、熊谷 篤

杉の内遺跡

所在地 岩沼市三色吉字松 地内

調査期間 平成 28 年 12 月 13 日～平成 28 年 12 月 16 日

調査面積 190 m²

調査担当 川又 隆央、熊谷 篤

長塚遺跡

所在地 岩沼市三色吉字松 地内

調査期間 平成 28 年 12 月 14 日～平成 28 年 12 月 16 日

調査面積 6 m²

調査担当 川又 隆央、熊谷 篤

長塚北遺跡

所在地 岩沼市長岡字八橋 地内

調査期間 平成 28 年 12 月 10 日～平成 28 年 12 月 14 日

調査面積 72 m²

調査担当 川又 隆央、熊谷 篤

上小瀬遺跡

所在地 岩沼市北原字八橋 地内

調査期間 平成 28 年 12 月 16 日～12 月 22 日

調査面積 73 m²

調査担当 川又 隆央、熊谷 篤

上根崎遺跡

所在地 岩沼市長岡字西富得 地内

調査期間 平成 30 年 10 月 2 日～10 月 3 日

調査面積 80 m²

調査担当 川又 隆央、太田 昭夫

目 次

例 言

調査要項

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過	1
1. 岩沼西部地区的調査に至る経緯	1
2. 岩沼西部地区的調査経過	1
3. 岩沼北部地区的調査に至る経緯	1
4. 岩沼北部地区的調査経過	2
第Ⅱ章 遺跡の概観	3
1. 位置と地理的環境	3
2. 岩沼市の遺跡と歴史的環境	4
第Ⅲ章 岩沼西部地区的調査	7
1. 原遺跡第1次調査（第7地点）	7
a. 遺跡の位置と環境	7
b. 調査の経過	7
c. 基本土層	10
d. 発見された遺構と遺物	12
①北側調査区	12
②南側調査区	40
e. 考察	76
①遺物について	76
②遺構について	80
③遺跡の性格	85
f. 総括	91
引用・参考文献	92
写真図版	94
2. 極遺跡	110
a. 遺跡の位置と環境	110
b. 調査の経過	110
c. 調査成果	110
d. まとめ	129
3. 南玉崎遺跡	133
a. 遺跡の位置と環境	133
b. 調査の経過	133
c. 調査成果	133
d. まとめ	136

4. 長谷古館跡	138
a. 遺跡の位置と環境	138
b. 調査の経過	138
c. 調査成果	138
d. まとめ	142
5. 台遺跡	143
a. 遺跡の位置と環境	143
b. 調査の経過	143
c. 調査成果	143
d. まとめ	145
6. 煙堤上貝塚	146
a. 遺跡の位置と環境	146
b. 調査の経過	146
c. 調査成果	146
d. まとめ	149
第Ⅳ章 岩沼北部地区的調査	152
1. 熊野遺跡	152
a. 遺跡の位置と環境	152
b. 調査の経過	152
c. 調査成果	152
d. まとめ	154
2. 杉の内遺跡	156
a. 遺跡の位置と環境	156
b. 調査の経過	156
c. 調査成果	156
d. まとめ	158
3. 上小別遺跡	160
a. 遺跡の位置と環境	160
b. 調査の経過	160
c. 調査成果	160
d. まとめ	160
4. 長塚北遺跡	162
a. 遺跡の位置と環境	163
b. 調査の経過	163
c. 調査成果	164
d. まとめ	165
5. 上根崎遺跡	166
a. 遺跡の位置と環境	166

b . 調査の経過	166	第 55 図 SI17 出土遺物 (2)	56	第 93 図 SX01・02	125
c . 調査成果	166	第 56 図 SI18 出土遺物	56	第 94 図 性格不明遺構出土遺物	126
d . まとめ	170	第 57 図 SI20・21・22	57	第 95 図 遺構外出土遺物	127
6. 長塚遺跡		第 58 図 SI22 出土遺物	58	第 96 図 遺構外出土遺物2	128
a . 遺跡の位置と環境	172	第 59 図 SI23	59	第 97 図 棚遺跡合成図	129
b . 調査の経過	172	第 60 図 SI23 出土遺物	59	第 98 図 南玉崎遺跡位置図	133
c . 調査成果	172	第 61 図 SI24・25	60	第 99 図 南玉崎遺跡トレチ配置図	134
d . まとめ	173	第 62 図 SI25 出土遺物	61	第 100 図 1トレチ平面図・土層断面図	134
引用・参考文献	174	第 63 図 南側地区的溝跡・土坑	63	第 101 国 南玉崎遺跡出土遺物	135
抄録		第 64 国 南側地区溝跡土層断面図	65	第 102 国 長谷古館跡位置図	138
		第 65 国 南側地区溝跡出土遺物	66	第 103 国 長谷古館跡トレチ配置図	139
		第 66 国 南側地区土坑土層断面図	69	第 104 国 1トレチ・2トレチ土層断面図	140
		第 67 国 南側地区土坑出土遺物	70	第 105 国 長谷古館跡出土遺物	140
		第 68 国 南側地区柱穴出土遺物	72	第 106 国 北側トレチ土層断面図	141
		第 69 国 南側調査区その他の出土遺物 (1)	73	第 107 国 台遺跡位置図	143
		第 70 国 南側調査区その他の出土遺物 (2)	74	第 108 国 台遺跡トレチ配置図	144
		第 71 国 南側調査区その他の出土遺物 (3)	75	第 109 国 台遺跡断面図	144
		第 72 国 時期別にみた出土遺物	77	第 110 国 煙堤上貝塚位置図	146
		第 73 国 SI23 出土面観と部位名称	79	第 111 国 煙堤上貝塚トレチ配置図	147
		第 74 国 第1次調査 主要な遺構の重複関係図	81	第 112 国 煙堤上貝塚土層断面図	148
		第 75 国 第1次調査 遺構変遷図	82	第 113 国 熊野遺跡位置図	152
		第 76 国 原遺跡第1・3・5次調査で発見された		第 114 国 熊野遺跡トレチ配置図	153
		II期主要な遺構配置図	83	第 115 国 熊野遺跡土層断面図	153
		第 77 国 原遺跡第1・3・5次調査で発見された		第 116 国 熊野遺跡出土遺物	154
		区画遺構配置図	84	第 117 国 杉の内遺跡位置図	156
		第 78 国 東山道・海道と玉前駅・刻	86	第 118 国 杉の内遺跡トレチ配置図	157
		第 79 国 陸奥国内古代道の変遷	87	第 119 国 6トレチ配置図	157
		第 80 国 棚遺跡位置図	110	第 120 国 SD01 溝跡	157
		第 81 国 棚遺跡トレチ配置図	111	第 121 国 SD01 出土遺物	158
		第 82 国 棚遺跡トレチ平面図	112	第 122 国 上小瀬遺跡位置図	160
		第 83 国 SB01・SB02	113	第 123 国 上小瀬遺跡トレチ配置図	161
		第 84 国 SB03～07	114	第 124 国 土層断面	161
		第 85 国 SB05～07 土層断面図	115	第 125 国 上小瀬遺跡出土遺物	162
		第 86 国 SB08	117	第 126 国 長塚北遺跡位置図	163
		第 87 国 SB09～11	118	第 127 国 長塚北遺跡トレチ配置図	163
		第 88 国 SD01～03	120	第 128 国 土層断面図	164
		第 89 国 SK04・05、SD05～07	121	第 129 国 上根崎遺跡位置図	166
		第 90 国 溝跡出土遺物	122	第 130 国 上根崎遺跡トレチ配置図	167
		第 91 国 SD08	123	第 131 国 I～3トレチ土層断面図	167
		第 92 国 SK01～03	124	第 132 国 4～8トレチ土層断面図	168

挿図目次

第1図 岩沼市の地形分類	3	第 28 国 北側地区溝跡土層断面図	31
第2図 岩沼市遺跡地図	5	第 29 国 北側調査区溝跡出土遺物	32
第3図 原遺跡地図	7	第 30 国 北側地区土坑土層断面図	33
第4図 原遺跡トレチ配置図	8	第 31 国 北側調査区土坑出土遺物	33
第5図 原遺跡第1次調査区全体図	9	第 32 国 SX01	35
第6図 基本土層模式図	10	第 33 国 SX01 出土遺物	36
第7図 北側調査区全体図	11	第 34 国 北側調査区柱穴出土遺物	37
第8図 SB01	13	第 35 国 北側調査区その他の出土遺物 (1)	38
第9図 SB01 出土遺物	13	第 36 国 北側調査区その他の出土遺物 (2)	39
第10図 SI01	14	第 37 国 南側調査区全体図	41
第11図 SI01 出土遺物	15	第 38 国 SB02・03	42
第12図 SI02	16	第 39 国 SB02 土層断面図	43
第13図 SI02 出土遺物	16	第 40 国 SB02 出土遺物	43
第14図 SI03	17	第 41 国 SB03	44
第15図 SI03 出土遺物	18	第 42 国 SB03 出土遺物	44
第16図 SI04	19	第 43 国 SI10	45
第17図 SI04 出土遺物	20	第 44 国 SI10 出土遺物	46
第18図 SI05・06	21	第 45 国 SI11	47
第19図 SI05 出土遺物	22	第 46 国 SI11 出土遺物	48
第20図 SI06 出土遺物	22	第 47 国 SI12	49
第21図 SI07	23	第 48 国 SI12 出土遺物	50
第22図 SI07 出土遺物	24	第 49 国 SI13 出土遺物	51
第23図 SI08	25	第 50 国 SI15・16	51
第24図 SI08 出土遺物	26	第 51 国 SI15 出土遺物	52
第25図 SI09	27	第 52 国 SI16 出土遺物	53
第26図 SI09 出土遺物	28	第 53 国 SI17・18	54
第27図 北側調査区の溝跡・土坑	30	第 54 国 SI17 出土遺物 (1)	55

- 第133図 9・10トレチ土層断面図169 第135図 長塚遺跡トレチ配置図172
 第134図 長塚遺跡位置図172

表 目 次

- 表1 岩沼市域の遺跡一覧表5 表6 南側調査区堅穴建物跡属性表62
 表2 北側調査区掘立柱建物跡属性表14 表7 南側調査区溝跡・材木跡属性表67
 表3 北側調査区堅穴建物跡属性表29 表8 種遺跡掘立柱建物跡属性表119
 表4 北側調査区溝跡属性表32 表9 極遺跡溝跡属性表123
 表5 南側調査区掘立柱建物跡属性表44 表10 極遺跡土坑・性格不明遺構属性表126

写 真 図 版 目 次

- 写真図版1**
- 1 第1次調査空撮（南西から）
 - 2 第1次調査空撮（北西から）
- 写真図版2**
- 1 北側調査区空撮（西から）
 - 2 南側調査区空撮（北西から）
- 写真図版3**
- 1 北側調査区全景（南東から）
 - 2 SB01（北東から）
 - 3 SB01 P2（西から）
 - 4 SI01（南から）
 - 5 SI01 遺物出土状況（南から）
- 写真図版4**
- 1 SI02（南から）
 - 2 SI03（南から）
 - 3 SI03 カマド支脚（南東から）
 - 4 SI06（南から）
 - 5 SI07（南から）
- 写真図版5**
- 1 SI08（南から）
 - 2 SI08 カマド（南から）
 - 3 SI09（東から）
 - 4 SI09 新カマド煙道部（東から）
 - 5 SX01・SI04（南東から）
 - 6 SD03（西から）
 - 7 北側調査区全景（北から）
- 写真図版6**
- 1 南側調査区全景（北から）
 - 2 SB03（北西から）
 - 3 SB02 P4・SB03 P2（西から）
 - 4 SB03 P4（東から）
- 写真図版7**
- 1 SI12（東から）
 - 2 SI12 遺物出土状況（南から）
 - 3 SI15（南西から）
 - 4 SI17・18 遺物出土状況（南から）
 - 5 SI17 遺物出土状況（東から）
 - 6 SI20（南から）
 - 7 SI22・23（南西から）
 - 8 SI23 須恵器円面硯出土状況（北から）
- 写真図版8**
- 1 SD10（西から）
 - 2 SD12・SK38 土層断面（西から）
 - 3 SD12 遺物出土状況（西から）
 - 4 SD12・13（北西から）
 - 5 SD13 土層断面（南西から）
- 写真図版9**
- 1 土師器・高坏（第11図1）
 - 2 土師器・高坏（第11図2）
 - 3 土師器・甕（第11図3）
 - 4 土師器・坏（第13図4）
- 写真図版10**
- 1 土製品・土玉（第17図4）
 - 2 土製品・土玉（第17図5）
 - 3 土師器・坏（第19図3）
 - 4 土師器・甕（第20図1）
 - 5 土師器・甕の蒸気孔（第20図1）
 - 6 土師器・甕（第22図5）
 - 7 土師器・甕（第22図4）
 - 8 須恵器・長頸瓶（第22図6）
 - 9 土師器・甕（第24図1）
- 写真図版11**
- 1 土師器・甕（第24図5）
 - 2 土師器・甕（第26図2）
 - 3 土師器・甕（第26図5）
 - 4 土師器・坏（第44図1）
 - 5 土師器・甕（第44図3）
 - 6 土師器・甕（第44図4）
 - 7 須恵器・坏（第46図3）
 - 8 土師器・高坏（第48図2）
- 写真図版12**
- 1 土師器・甕（第48図5）
 - 2 土師器・甕（第48図6）
 - 3 土師器・甕（第48図7）
 - 4 須恵器・高台坏（第51図1）
 - 5 土師器・坏（第54図1）
 - 6 土師器・甕（第54図2）
 - 7 土師器・甕（第54図4）
 - 8 土師器・甕（第54図6）
- 写真図版13**
- 1 土師器・甕（第54図7）
 - 2 須恵器・甕（第56図2）
 - 3 須恵器・円面硯（第60図1）
 - 4 円面硯硯部の様子（第60図1）
 - 5 円面硯硯部の内側に残る当具痕（第60図1）
- 写真図版14**
- 1 土師器・坏（第34図1）
 - 2 須恵器・鉢（第34図10）
 - 3 土師器・高坏（第35図3）
 - 4 須恵器・高台坏（第35図5）
 - 5 須恵器・甕（第35図11）
 - 6 須恵器・鉢（第36図12）
 - 7 須恵器・甕（第36図14）
 - 8 石製品・石庖丁（第36図16）
- 写真図版15**
- 1 土師器・高坏（第40図1）
 - 2 土師器・高坏（第42図1）
 - 3 須恵器・坏（第66図1）
 - 4 土師器・坏（第66図3）
 - 5 須恵器・甕（第66図8）
- 写真図版16**
- 1 赤焼土器・器台？（第68図3）
 - 2 土製品・紡錘車（第68図4）
 - 3 土師器・高台坏（第69図4）
 - 4 須恵器・坏（第69図9）
 - 5 須恵器・円面硯（第69図13）
 - 6 土師器・坏（第70図3）
 - 7 土師器・甕（第71図14）
 - 8 須恵器・フラスコ形瓶（第72図22）

【調査参加者】

平成 28 年度

原遺跡

塩谷 信幸、大友 和男、草薙 敏宏、小林 国子、齋藤 新彌、佐藤 悅子、佐藤 トシ子、佐藤 光善、

高橋 紀美子、南城 美代子、蓮沼 秀子、渡辺 純子、渡辺 幹雄

樋遺跡

塩谷 信幸、大友 和男、草薙 敏宏、齋藤 新彌、佐藤 トシ子、佐藤 光善、南城 美代子

南玉崎遺跡

塩谷 信幸、大友 和男、草薙 敏宏、齋藤 新彌、佐藤 トシ子、佐藤 光善、南城 美代子
長谷古館跡

塩谷 信幸、大友 和男、草薙 敏宏、齋藤 新彌、佐藤 光善

熊野遺跡

塩谷 信幸、大友 和男、草薙 敏宏、小林 国子、齋藤 新彌、佐藤 悅子、佐藤 トシ子、佐藤 光善、
高橋 紀美子、南城 美代子、蓮沼 秀子、渡辺 純子

杉の内遺跡

塩谷 信幸、大友 和男、草薙 敏宏、齋藤 新彌、佐藤 トシ子、佐藤 光善、南城 美代子
長塚北遺跡

塩谷 信幸、大友 和男、草薙 敏宏、齋藤 新彌、佐藤 トシ子、佐藤 光善、南城 美代子
上小瀬遺跡

塩谷 信幸、大友 和男、草薙 敏宏、齋藤 新彌、佐藤 トシ子、佐藤 光善、南城 美代子
長塚遺跡

塩谷 信幸、大友 和男、草薙 敏宏、齋藤 新彌、佐藤 トシ子、佐藤 光善、南城 美代子

平成 29 年度

煙堤上貝塚

塩谷 信幸、齋藤 新彌、渡辺 幹雄

台遺跡

塩谷 信幸、齋藤 新彌、渡辺 幹雄

長谷古館跡

塩谷 信幸、齋藤 新彌、渡辺 幹雄

平成 30 年度

上根崎遺跡

塩谷 信幸、齋藤 新彌、渡辺 幹雄

【資料整理参加者】

太田 昭夫、川島 秀義、川又 隆央、熊谷 篤、武田 裕光、永井 三郎

塩谷 信幸、大友 和男、草薙 敏宏、小林 国子、齋藤 新彌、佐藤 悅子、佐藤 トシ子、佐藤 光善、

高橋 紀美子、南城 美代子、蓮沼 秀子、原田 とみ子、三浦 美穂子、渡辺 純子

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

1. 岩沼西部地区の調査に至る経緯

平成 25 年 11 月に新規農業農村整備事業についての照会が仙台地方振興事務所から寄せられた。岩沼市教育委員会では県史跡であるかめ塚古墳をはじめとして 13 遺跡地が対象範囲内に位置、あるいは隣接する旨を回答した。平成 26 年 3 月に宮城県教育府文化財保護課と仙台地方振興事務所、岩沼市農政課、そして岩沼市教育委員会の 4 者による現地協議が行われ、事業対象地が遺跡を多く含んでいることから事前に確認調査を実施して、遺構・遺物の有無、遺構密度、および遺構分布範囲などを把握する必要性があるとの指示を宮城県教育府文化財保護課より受けた。その後、仙台地方振興事務所より平成 28 年 2 月 2 日付けで「農村地域復興基盤総合整備事業（岩沼西部地区）と埋蔵文化財のかかわりについて」の協議書が提出された。

ついで平成 28 年 3 月 23 日付けで発掘通知が提出されたのち、仙台地方振興事務所から岩沼市へ埋蔵文化財確認調査についての依頼が寄せられ、平成 28 年 6 月 22 日付で「岩沼西部地区埋蔵文化財発掘調査委託契約」が仙台地方振興事務所と岩沼市によって締結されたことから、10 月 1 日より調査準備に着手した。

引き続き平成 29 年 9 月 19 日付で「岩沼西部地区埋蔵文化財発掘調査委託契約」が仙台地方振興事務所と岩沼市によって締結され、平成 29 年 10 月に残りの 3 遺跡を調査した。

2. 岩沼西部地区の調査経過

平成 28 年度の現地調査は 10 月 11 日の南玉崎遺跡の調査を皮切りに、原遺跡、樋遺跡、長谷古館跡の順で行った。各遺跡とも排水路敷設部分に幅は 2 m、長さは 5 ~ 10 m のトレーナーを設定して調査を実施した。ただし、長谷古館跡では今回の排水路敷設によって、城跡の南辺を巡る堀跡の規模等を把握する機会が将来にわたって失われることから一部で田面の掘削を行い、規模・構造等の把握に努めた。

確認調査を実施する中で、原遺跡では多数の遺物が掘削中に発見され、また遺構面の精査でも堅穴住居跡や大型の柱穴掘方を持つ掘立柱建物跡が発見されたことから、工事によって失われる部分においては本発掘調査を実施し、記録保存に努めている。同様に樋遺跡でも多数の柱穴や溝跡が発見されたことから、本発掘調査を実施している。

平成 29 年度の現地調査は平成 29 年 10 月 11 日に煙堤上貝塚、台遺跡、長谷古館跡の 3 遺跡において機械掘削を実施し、翌 12 日から 25 日にかけて記録作成などを行った。調査は各遺跡のバイブルайн、および排水路敷設予定部分に幅 2 m、長さ 3 ~ 5 m のトレーナーを設定し、重機で掘削して工事が及ぶ深度における遺構・遺物の有無を確認した。

3. 岩沼西部地区の調査に至る経緯

平成 25 年 11 月に新規農業農村整備事業についての照会が仙台地方振興事務所から寄せられた。岩沼市教育委員会では県史跡であるかめ塚古墳をはじめとして 13 遺跡地が対象範囲内に位置、あるいは隣接する旨を回答した。平成 26 年 3 月に宮城県教育府文化財保護課と仙台地方振興事務所、岩沼

市農政課、そして岩沼市教育委員会の4者による現地協議が行われ、事業対象地が遺跡を多く含んでいることから事前に確認調査を実施して、遺構・遺物の有無、遺構密度、および遺構分布範囲などを把握する必要性があるとの指示を宮城県教育庁文化財保護課より受けた。その後、仙台地方振興事務所より平成28年2月2日付けで「農村地域復興基盤総合整備事業（岩沼北部地区）と埋蔵文化財のかかわりについて」の協議書が提出された。

ついで平成28年3月23日付けで発掘通知が提出されたのち、仙台地方振興事務所から岩沼市へ埋蔵文化財確認調査についての依頼が寄せられ、平成28年6月22日付で「岩沼北部地区埋蔵文化財発掘調査委託契約」が仙台地方振興事務所と岩沼市によって締結されたことから、岩沼西部地区の確認調査が一定量終了した12月10日より調査準備に着手した。

4 岩沼北部地区的調査経過

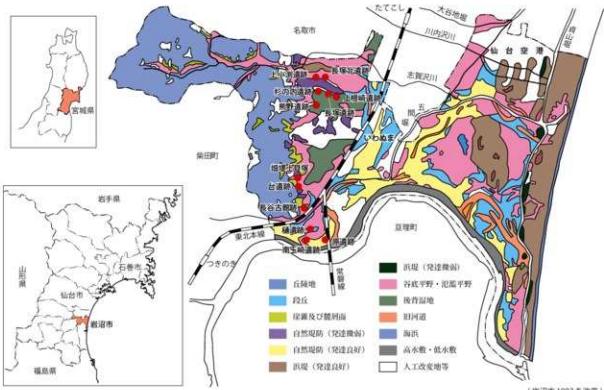
現地調査は12月10日の長塚北遺跡の調査を皮切りに、杉の内遺跡、長塚遺跡、北原遺跡、熊野遺跡の順で行った。各遺跡とも排水路敷設部分に幅は2m、長さは5～10mのトレーナーを設定して調査を実施した。ただし、谷地が存在している可能性が高い遺跡地内では下層の泥炭層が軟弱なために重機が沈降する危険があり、また同様の箇所では人々の生活痕跡が遺されている可能性が極めて低いことから、事前に5m間隔で小規模な坪掘りを行い、調査対象範囲の縮小に努めた。その結果、長塚遺跡では全体的に谷地地形であることが確認されたことから、重機によるトレーナー掘削は未実施とした。その他の4遺跡では、丘陵部の基盤層であるローム質が確認された範囲を中心としてトレーナー掘削を行い、遺構・遺物の有無についての把握を努めた。

第Ⅱ章 遺跡の概観

1. 位置と地理的環境（第1図）

岩沼市は宮城県南東部に位置し、東は太平洋を臨み、北は名取市、南は阿武隈川を隔てて亘理町、西は奥羽山脈から派生した陸前丘陵に含まれる高館丘陵で村田町・柴田町と市域を接する。市域の南端を東流する阿武隈川は、福島県と栃木県の境に位置する旭岳に端を発し、福島県内を北流して宮城県へと至る大河川であり、その全長は国内6位の239km、流域面積は5,400 km²を測る。本市は、この阿武隈川が太平洋に注ぐ河口部北岸に位置している。また本市は古代では東山道と、東海道から延びる連絡路が合する地点であったが、現在でも国道4号と同6号、JR東北本線と同常磐線の合流地点となっており、交通要衝の地として知られている。

市域を地質的に大別すると、西側の山地と東側の広大な沖積地に分けられる。山地は南北に延びる岩沼西部丘陵（標高100～300m）と高館丘陵（標高200～300m）、これらの丘陵から東へ舌状に張り出する標高10～30mほどの長岡丘陵、二木・朝日丘陵と呼称している小規模な段丘面から成る。山地の東側に展開する広大な沖積地は仙台平野南部域に相当する。岩沼西部丘陵の東縁から太平洋まで7～8kmの幅をもち、3列の浜堤列が発達している。この沖積平野は阿武隈川のほか、中小河川の堆積作用によって形成され、沿岸では自然堤防の発達が顕著である。



第1図 岩沼市の地形分類

2. 岩沼市の遺跡と歴史的環境（第2図、第1表）

岩沼市域では、これまでに縄文時代から近代にかけての遺跡が64箇所で確認されている。近年、東日本大震災の復興事業に伴う発掘調査や、岩沼市史編纂事業に伴う学術調査により、地域の歴史を解明するための新たな成果が報告されている。以下に各時代の概略を記す。

縄文時代

縄文時代の遺跡は、市域西側の丘陵部に点在し、晩期の遺物が多量に発見された下塩ノ入遺跡【14】など、特に志賀沢川流域の志賀・小川地区にまとめて分布している。また、沖積地を臨む丘陵上に立地する山塙南貝塚【9】や桜堤上貝塚【36】では、汽水域に生息するヤマトシジミを中心とした貝層の形成もみられる。北原遺跡【7】では、中期後葉の土坑が50基近く検出され、磨消縄文を特徴とする土器のほか、石錐や石棒などが発見された。鶴ヶ崎城跡【23】では、第4地点の発掘調査において、鶴ヶ島台式や梨木畠式に比定される早期末の土器群が見つかっている（岩沼市教育委員会 2005b、岩沼市史編纂委員会 2015）。

弥生時代

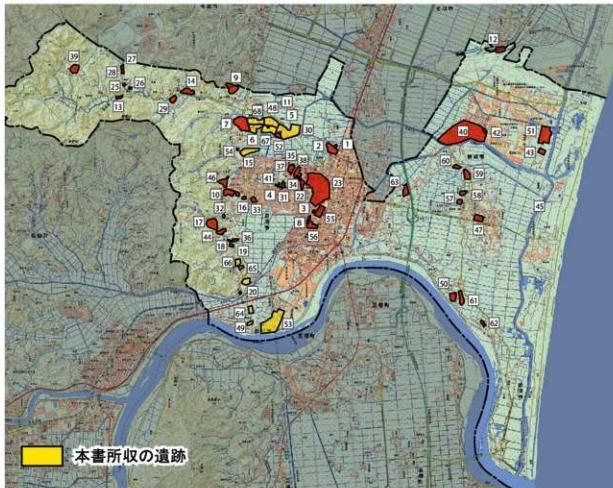
弥生時代の遺跡は縄文時代と同様、市域西側の丘陵部に多く分布している。しかしながら上根崎遺跡【30】や朝日古墳群【37】、平野部に位置するかめ塙西遺跡【2】でも土器の散布が認められ、人間の営みが太平洋側へ拡大する様子をうかがい知ることができる。鶴ヶ崎城跡【23】では、中期後葉と考えられる堅穴建物跡や十三塼式に比定される土器および石包丁などの石器が発見されている。北原遺跡【7】では、北闇門を中心に分布する十王台式に並行するものとみられる、後期後半と推量される土器が見つかっている。また、杉の内遺跡【6】では粗底のある土器も採集されている。（岩沼市教育委員会 2005b、岩沼市史編纂委員会 2015）。

古墳時代

古墳時代の遺跡は高塚古墳、横穴墓、集落跡などが市内各所にみられる。高塚古墳のうち、県指定史跡のかめ塙古墳【1】では、古墳周溝の発掘調査において土師器や須恵器のほか、底面から一本二又鋸が出土した。また、地表に顯する全長約39mの墳丘は、周囲が後世に削られたものであり、本来は全長約48mを測る前方後円墳であったことが推定されている。造成時期はこれで中期と考えられてきたが、遺物の年代や古墳の立地条件、墳丘の形態などの点から前期にさかのばる可能性が示されている（岩沼市史編纂委員会 2015）。

横穴墓は岩沼西部丘陵から派生する低位丘陵の斜面で多く造られ、これまでに10箇所の横穴墓群が確認されている（消滅した横穴墓群を含む）。このうち、長谷寺【10】、丸山【3】、二木【8】、土ヶ崎【22】、引込【31】、平等山【16】などの横穴墓群の発掘調査では、7世紀前半頃から造営が開始され、8世紀前半頃まで機能していたと考えられている（岩沼市史編纂委員会 2015、岩沼市教育委員会 2019c）。

集落遺跡では北原遺跡【7】をはじめとする長岡丘陵遺跡群が前期の集落跡として知られるが、そこから南へ約500mの位置に所在する熊野遺跡【15】でも、同時期の堅穴建物跡群が発見された。また、孫兵衛谷地遺跡【12】では前期の塩釜式に位置付けられる土師器を含む遺物包含層の存在が明らかとなった。中期以後の様相については遺物の発見が少なく判然としないが、下野郷跡【40】では南泉式の土師器が出土し、第II浜堤上でも将来、古墳時代の集落遺跡の発見が期待される（岩沼市教育委員会 2018b・2019c、岩沼市史編纂委員会 2015）。



第2図 岩沼市遺跡地図

表1 岩沼市域の遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	小砂原古墳	古墳	25	八森山遺跡	縄文	47	新井東遺跡	古墳・中世・近世
2	小砂原西遺跡	弥生・古墳・古墳	26	八幡山遺跡	縄文	48	長原北遺跡	縄文・古墳・古代
3	丸山横穴墓群	古墳	27	御山山遺跡	縄文	49	南山崎遺跡	縄文・古代
4	日向横穴墓群	古墳	28	御山山遺跡	縄文・古墳	50	西山遺跡	古墳・中世・近世
5	日向横穴墓群	古墳	29	御山山遺跡	古墳	51	御山山遺跡	古墳・中世・近世
6	林の内遺跡	弥生・古墳・古代	30	上田原遺跡	縄文	52	貝田寺山遺跡	古墳
7	免山遺跡	縄文・弥生・古墳・古墳・古坟	31	小川横穴墓群	縄文・弥生・古墳・古墳	53	原山遺跡	古墳・古代
8	大根穴古墳	古墳	32	五郎山遺跡	古墳	54	山田古墳	古墳
9	山田山貝塚	縄文・古代	33	伊丹山遺跡	弥生・古墳	55	丸山遺跡	古墳・古代
10	花谷寺横穴墓群	古墳	34	石川山横穴墓群	古墳	56	竹動神社内遺跡	中世・古代
11	長谷古墳	古墳	35	蟹崎横穴墓群	古墳	57	新井上遺跡	古代
12	孫兵衛谷地遺跡	古墳・古代	36	御山山貝塚	縄文・古墳・古代	58	南山遺跡	古代
13	大久遺跡	縄文	37	朝日山遺跡	弥生・古墳・中世・近世	59	西土手遺跡	中世
14	下野八人遺跡	縄文	38	朝日山遺跡	古墳・中世・中世	60	南山道跡	古代
15	熊野遺跡	古墳・古代	39	宮坂山遺跡	縄文・古代・中世	61	河原道跡	古代
16	平井山横穴墓群	古墳	40	下野櫛山遺跡	古墳・中世・前後	62	北山道跡	中世
17	新井跡	中世	41	白山坪	近世?	63	上野佐野新	古代・中世
18	御山山横穴墓群	古墳	42	脇野山遺跡	古代	64	越路遺跡	古代・中世
19	根井山遺跡	弥生・古墳	43	二心山遺跡	古墳・古代	65	御山跡	古墳・古代
20	真合山遺跡	古墳	44	新御山遺跡	縄文・古代	66	百鬼跡	縄文・古代
22	上・中根穴墓群	古墳	45	青井山(木免塚)	古墳	67	赤坂遺跡	縄文・古墳
23	朝日古墳	縄文・弥生・古墳・古墳	46	竹音山遺跡	古墳・古墳	68	上・下御山遺跡	弥生・古墳・古代

古代

岩藏寺遺跡【39】が所在する岩藏寺には、平安時代後期に製作されたと考えられる木造如来像が現存する。発掘調査では、小石を塚状に集積した遺構の底面で火を焚いた痕跡と須恵器土器の坏が発見されており、平安時代から何らかの祭祀行為を行っていた可能性が考えられている（岩沼市史編纂委員会 2018）。北原遺跡【7】や熊野遺跡【15】では、7世紀末から10世紀前半にかけての堅穴建物跡が発見されている（岩沼市教育委員会 2019b）。原遺跡【53】では、桁行10間、梁行3間で、主軸方位が真北方向をとる大型掘立柱建物跡をはじめ、堅穴建物跡や材木解跡、幅3mを超える大溝などが検出され、円面鏡や墨書き土器、刀の口金具が出土した（岩沼市教育委員会 2018a・2019a・2020a・2020b・2021）。近接する南玉崎遺跡【49】や樋遺跡【64】では、土師器・須恵器などが出土しており、このうち樋遺跡では7世紀末～8世紀初頭頃に位置付けられる須恵器の高台坏などが出土している（岩沼市史編纂委員会 2015）。対岸（阿武隈川南岸）には、平安時代の陸奥国日理郡衙跡と考えられている三十三間堂官衙遺跡（直理町）が位置し、中世には逢隈湊と呼ばれる湊の存在が『吾妻鏡』に記されている。

中世

中世の遺跡は、過去に朝日古墳群【37】、朝日遺跡【38】、鶴ヶ崎城跡【23】、丸山遺跡【55】、竹駒神社境内遺跡【56】、下野郷館跡【40】、西須賀原遺跡【50】、中ノ原遺跡【54】、岩藏寺遺跡【39】、刈原遺跡【61】、上根崎遺跡【30】などで発掘調査が行われている。平成27年（2015）の熊野遺跡【15】の発掘調査において長軸3.9m、短軸2.4mを測る方形堅穴遺構が確認された。これは倉庫的な性格を持つ遺構と推定されるが、底面からは龍泉窯系の鐘蓮弁文青磁碗片が出土していることから当該地周辺の中ノ原遺跡【54】で発見された、板碑を伴う蔵骨器に納められた被葬者と関わりを持つ在地富裕層などが存在した可能性がある（岩沼市史編纂委員会 2015・2018、岩沼市教育委員会 2019c）。

近世

本市は近世において城下町、宿場町として発展し、竹駒神社の門前町としても賑わいを見せたといわれ、調査実績もほかの時代に比べて多い傾向にある。丸山遺跡【55】、竹駒神社境内遺跡【56】、下野郷館跡【40】、西須賀原遺跡【50】、西土手遺跡【59】、新筒下遺跡【57】、刈原遺跡【61】、高原遺跡【62】などで発掘調査が行われ、仙台藩政期の社会を研究する上で貴重な成果が得られている。鶴ヶ崎城跡【23】第1地点の調査では、溝跡や石積み遺構、碗埋納遺構などが検出され、第4地点では土壘の補修痕跡が確認された。遺物では、15世紀前半頃の龍泉窯系青磁盤や天目釉を施した瀬戸産小壺などが出土した（岩沼市教育委員会 2005b、岩沼市史編纂委員会 2015）。下野郷館跡【40】では中世の屋敷跡などが発見されているが、近世初期からは佐藤氏・奥山氏の領地となり、その時期の屋敷地も発見されている。特に2016年の調査では、掘立柱建物跡・井戸跡・区画溝など屋敷跡を形成する遺構群とともに、船着場とみられる護岸施設も発見されている。18世紀以降は仙台藩直属の矢ノ目足軽が組織され、調査でもこの時期の遺構・遺物が数多く発見されている。長徳寺前遺跡【52】では2基の礎石経塼が発見され、26,000点を超える一字一石経ととともに木簡が発見されている。礎石経は付近に立つ経碑から妙法蓮華經を書写したものと考えられ、近世における庶民の信仰の篤さを物語る資料として貴重である（岩沼市教委 2004a・2005a・2005b・2018b、東北福祉大学 2011）。

第Ⅲ章 岩沼西部地区的調査

1. 原遺跡第1次調査（第7地点）

a. 遺跡の位置と環境

原遺跡はJR岩沼駅の南方約3.2kmに位置する。自然地形としては、阿武隈川左岸に形成された標高5m前後の自然堤防上に広がる（斎野裕彦 2015）。遺跡が立地する自然堤防は西側ではほぼ直線的に東西方向に延びるが、遺跡の中央付近で阿武隈川の旧河道の影響を受け、北側へと大きく方向を変えて弧状を呈する。

岩沼市域に関する古代文字資料は少ないが、10世紀頃に成立したと考えられている『延喜式』（巻二十八 兵部省 諸国駆馬伝）の東山道陸奥国に設置された駅家を見ると、「玉前」という地名が認められる。また多賀城跡より出土した9世紀代と推定されている木簡でも「玉前刻」という名称が記載されている（多賀城跡調査研究会 1985）。これらの資料の存在から、吉田東伍をはじめとする幾多の研究者によって明治時代以降から「玉前」の地は岩沼市南長谷字玉崎周辺とされてきたが、考古学的な調査成果からの裏付けはなされていなかった（白鳥 2015）。

このような状況の中、平成17年に地区内の下水道管敷設の際に須恵器・土師器の採集や柱穴跡の発見から本遺跡を埋蔵文化財包蔵地として登録し、以後は集合住宅建築などの開発行為に先立ち、主にJR常磐線の東側において調査が進められ、少量はあるが土師器坏などが発見されている。

b. 調査の経過

原遺跡での調査は、排水路が予定されている箇所において平成28年10月14日から開始した。当初は新たに排水路が敷設される範囲内に長さ5m、幅2mのトレンチを11箇所設定し、重機を用いて表土の掘削を行う予定であったが、4トレンチから北側のトレンチではいずれも遺構・遺物が多数発見されたことから、本格的な調査を実施することになった。しかしながら仙台地方振興事務所との協議の結果、他の圃場整備地内の調査を優先することになり、11月19日に一旦調査を中断した。調査の再開は長谷古跡跡の調査が終了した平成29年1月5日であるが、作付前に排水路の設置が終了しなければならないことから調査期間は2月末日までとなつたため、降雪や暴風などの荒天でも調査を敢行せざるを得なかつた。

現地調査は重機を用いて基本土層Ⅲ層まで掘削した後、人力によって遺構確認面であるにぶい黄褐色砂質砂質シルト層（基本土層IV層）上面での遺構精査と掘り下げを行った。また作業状況に合わせ遺構セクション図の作成や平面実測、写真撮影を行っているが、2月22日にはドローンを用いた空中写真撮影を株式会社仙南測量事務所へ委託して実施した。なお、出土資料の整理時には株式会社



第3図 原遺跡地図

1. 原道路第1次調査（第7地点）



第4図 原道路トレーンチ配置図(1/2000)



第5図 原道路第1次調査区全体図

1. 原遺跡第1次調査（第7地点）

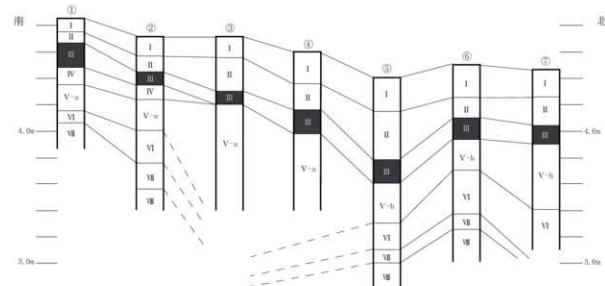
パスコ文化財事業部へ遺物実測を委託した。

調査時には宮城県教育委員会文化財課、多賀城跡調査研究所、岩沼市史編集専門部会の考古部会から多大な助言や協力をいただいた。なお、注目に値する調査成果が得られたことから、平成28年12月2日に報道発表を行っている。

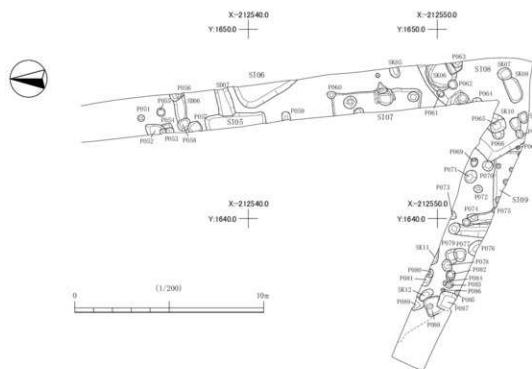
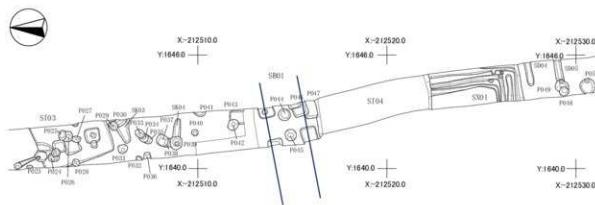
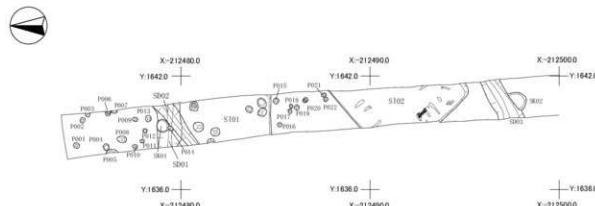
c. 基本上層（第6図）

今回の調査地点は水田として利用されており、I・II層は水田耕作に伴う土層である。III層の黒褐色シルトは層位の乱れが少なく、調査区全体で認められるもので、厚みも10～15cmほどと安定しており、付近での調査の掘削に際しては遺構確認面までの指標となる。IV層は暗褐色砂質シルトで、厚みは15cmである。その分布は南側のみに限られている。今回の調査で遺構確認面としたV層は、aがにぶい黄褐色砂質シルト、bがにぶい黄褐色シルトであり、調査区全域でみられる。しかしながら、遺構堆積土はV層と極めて近似しているものが多く、遺構精査時に平面的な確認を行うことは極めて困難である。なお、X:-212600からX:-212580付近にかけての範囲ではV層以下の層序がみとめられないことから谷地形が存在している可能性が考慮される。この谷地形は第3次・第4次調査の結果から南西→北東方向にかけて傾斜していることが確認されている。VI層は黒色粘質シルト、VII層は暗褐色粘質土であるが、これらは上記の谷地形範囲ではみられず、また北側へ向かって大きく傾斜している。IX層は褐色粘土であり、調査区内では厚さ40cm以上となることを確認した。VI～VII層はいずれもしまりが強く、粘性に富むものである。

なお、本調査の対象外とした1～3トレチでは、I・II層の下位では灰黃褐色砂層が厚く堆積していることを確認している。1トレチに設定したサブトレチでは、砂層の厚さは1.5mほどであり、その下位ではグライ化したV層が確認されている。古代遺物を包含するIII・IV層、及びV～VII層が欠落していることから、南側調査区の南方は古代以降の洪水、あるいは河道の移動によってこれらの層序が失われ、運搬された土砂が堆積したと考えられる。



1. 原遺跡第1次調査（第7地点）



1. 原遺跡第1次調査（第7地点）

d. 発見された遺構と遺物

調査対象地には、かつてJR常磐線の線路を行通するために盛土された高まりが存在しており、この高まりを挟んだ南北の2箇所に調査区を設定した。ここでは高まりの北側を「北側調査区」、南側を「南側調査区」と呼称し、それぞれの調査区で発見された主な遺構・遺物について詳述していく。なお、調査原因が排水路敷設であることから、調査区の幅は僅か2mと狭く、したがって大部分の遺構の規模・形状については不明であることを予めお断りしておく。

①北側調査区（第7図）

北側調査区は、排水路の計画にあわせて幅2m、長さ100mとして設定した。確認できた遺構は掘立柱建物跡1棟、竪穴建物跡9棟、溝跡7条、土坑、性格不明遺構、柱穴などである。

・掘立柱建物跡

【SB01】（第8図）

調査区のほぼ中央部に位置する。東西1間以上、南北1間以上の東西棟であると考えられる。柱穴は4口確認し、うち2口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行1.9m以上、梁行1.8m以上である。建物の主軸は北列で計測すると74°東へ傾く。柱穴はいずれも調査区外へ広がるために全容が判明しているものは無いが、一边が78~84cmほどの方形、あるいは長方形と考えられる。柱痕跡は直径20cmほどの円形である。

遺物は非クロア形の土師器壺・甕、須恵器壺・蓋・短頸壺（第9図1）が柱掘方より出土している。土師器壺では底面が平底気味のものが見受けられることから、7世紀末葉から8世紀初頭頃の遺構に位置付けられる。

・竪穴建物跡

【S101】（第10図）

調査区北部に位置する。SD01・02と重複し、これより古い。遺構の東西は調査区外へ広がるため全体の形状規模は不明であるが、南北の一辺は4.6mを測る。建物の主軸方位は南辺を見る限り真北に近いと考えられる。床面は褐色シルトを含む貼床であり、主柱穴を2口確認している。このうちP2からは第11図1・2に示した土師器の高杯が2個体出土した。なお、カマドや炉跡は確認されておらず、周溝もみとめられなかった。

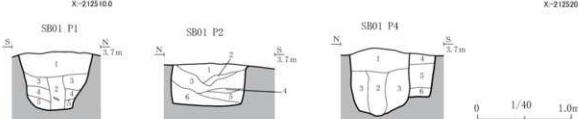
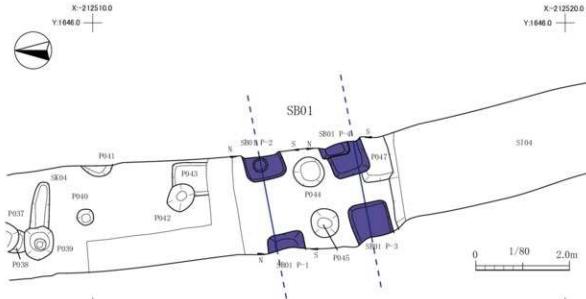
遺物は前述の高杯のほか、非クロア形の土師器鉢・甕（第11図3）、須恵器壺・甕が出土している。図示した遺物の特徴から、6世紀後半頃に位置づけられる。

【S102】（第12図）

調査区北部に位置する。遺構の大部分は調査区外へ広がるが、北辺の一部と南西隅が確認されており、南北の一辺は6.0mを測る。建物の主軸方位は西辺で見た場合、46°西へ傾く。床面は褐色粘土ブロックを用いた貼床であり、床面上には大量の焼土と炭化した部材が認められた。炭化材は北壁、及び西壁に直交するように存在していたことから、火災によって屋根材などが焼け落ちたものと考えられる。また炭化材の直下からは第13図1・2に示した土師器壺が出土している。なお、カマドや炉跡は確認されておらず、周溝もみとめられなかった。

1. 原遺跡第1次調査（第7地点）

d. 発見された遺構と遺物



SB01 PT 上層付記		
層番	土色	土質
1	褐色色	シルト
2	褐色色	シルト
3	褐色色	シルト
4	褐色色	シルト
5	褐色色	シルト
6	褐色色	シルト

SB01 PT 中層付記		
層番	土色	土質
1	褐色色	シルト
2	褐色色	シルト
3	褐色色	シルト
4	褐色色	シルト
5	褐色色	シルト
6	褐色色	シルト

SB01 PT 下層付記		
層番	土色	土質
1	褐色色	シルト
2	褐色色	シルト
3	褐色色	シルト
4	褐色色	シルト
5	褐色色	シルト
6	灰黃褐色	シルト



第8図 SB01

SB01 PT 土質観察表

番号	遺構・細部	種別	器種	調整		法量(cm)	写真番号
				外面	内面		
1	SB01 P3	須恵器	短頸甕	ロコナデ	ロコナデ	15.0	(4.6)

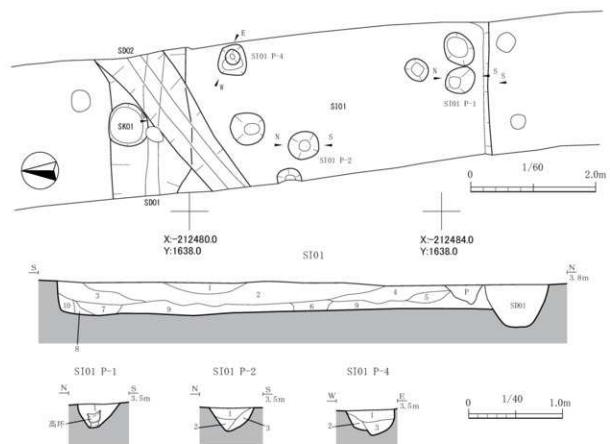
第9図 SB01 出土遺物

1. 原跡地第1次調査（第7地点）

1. 原跡地第1次調査（第7地点）

表2 北側調査区掘立柱建物跡属性表

建物名	間数	被方向	柱行 縦長 (m)	柱間寸法 柱列	測定 縦長 (柱)	柱間寸法 (m)	測定 方向	柱底 基盤 (cm)	柱穴 規格 (cm)	平面形	備考
SD01	1×1以上	南北か 以上	1.3 以上	1.3	西列	1.1 以上	1.1	南列	8~24~E	9	30~42 楕円形



S101 土層注記

層番	土色	土質	備考
1	黒褐色	10YR2/2	シルト 褐色シルト・ブロックを少量含む。
2	暗褐色	10YR2/3	シルト 褐色シルト・ブロックをや多く含む。黒色シルト・ブロックを微量含む。
3	褐色	10YR3/3	二つの褐色シルト・ブロックを多く含む。
4	褐色	10YR3/3	褐色シルト・ブロックを微量、分化物、堆土を少量含む。
5	にふく黄褐色	10YR4/3	シルト 褐色シルト・ブロックを微量、堆土を微量含む。
6	褐色	10YR3/3	シルト 褐色を多く含む。土質が白色で、しまりやや強い。
7	にふく黄褐色	10YR4/3	シルト 褐色シルト・ブロックを多く含む。しまりやや強い。
8	黒褐色	10YR2/2	シルト 褐色シルト・ブロックを少量含む。
9	灰黄褐色	10YR4/2	シルト 褐色シルト・ブロックを微量含む。しまりやや強い。
10	黒褐色	10YR2/2	シルト 褐色シルト・ブロックを多量含む。

S101P1 土層注記

層番	土色	土質	備考
1	黒褐色	10YR3/2	シルト 褐色シルト・ブロックを少量。堆土を微量含む。しまりやや強い。

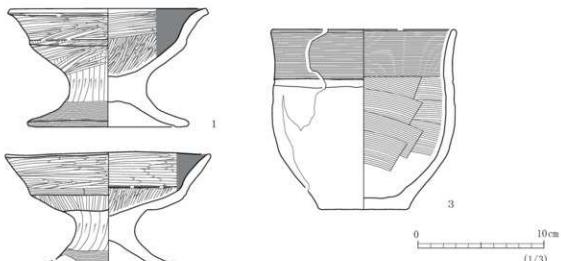
S101P2 土層注記

層番	土色	土質	備考
1	黒褐色	10YR3/2	シルト 褐色シルト・ブロックを多量。分化物を微量含む。
2	褐色	10YR4/4	シルト 褐色シルト・ブロックを微量。堆土を微量含む。しまりやや強い。
3	黒褐色	10YR6/2	シルト 褐色シルト・ブロックを微量含む。しまりやや強い。

S101P4 土層注記

層番	土色	土質	備考
1	黒褐色	10YR3/2	シルト ローム小・ブロックを少量含む。しまりやや強い。粘質やや弱い。
2	褐色	10YR4/4	粘質・シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。
3	黒褐色	10YR3/2	シルトのブロックをや多く含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。

第10図 S101



S101出土遺物観察表

番号	遺構・細部	種別	器種	調査			法長 (cm)	法幅 (cm)
				外観	内面	底盤		
1	S101 P1	土師器	高坪	ケズリ・ミガキ・ヨコナゲ	ミガキ・黒色処理	15.5	12.6	9.4
2	S101 P1	土師器	高坪	ケズリ・ミガキ・ヨコナゲ	ミガキ・黒色処理	16.2	10.2	9.5
3	S101 堆積土	土師器	便	ヨコナゲ	ヘラナゲ・ヨコナゲ	14.4	7.0	14.3

第11図 S101出土遺物

遺物は前述の壺や非クロコ成形の高坪・甕のほか、繩文土器、弥生土器や石施丁も出土している。図示した遺物の特徴から、6世紀後半頃に位置づけられる。

【S103】(第14図)

調査区中央部北寄りに位置する。遺構の東側は調査区外へ広がるため全体の形状規模は不明であるが、南北の一辻は3.9mを測る。建物の主軸方位は南東で見た場合、22°西へ傾く。カマドは北壁寄せに存在し、左袖は失われていたが右袖は暗褐色粘質シルトを用いてつくられていた。燃焼部は幅60cm 奥行き92cmで、建物の北壁を掘り窪めてつくられており、支脚として用いられたとみられる第15図に示した土師器甕が逆位の状態で出土している。煙道部は長さ122cmであり、燃焼部側から先端部へ緩やかに傾斜している。なお、煙道部先端には煙出ビットが存在する。床面は褐色粘質プロックを用いた貼床であり、主柱穴を2口確認した。なお、周溝はみとめられなかった。

遺物は前述の甕のほか、非クロコ成形の土師器甕・須恵器・甕・弥生土器が出土している。図示した遺物の特徴から、8世紀中頃から後半頃に位置づけられる。

【S104】(第16図)

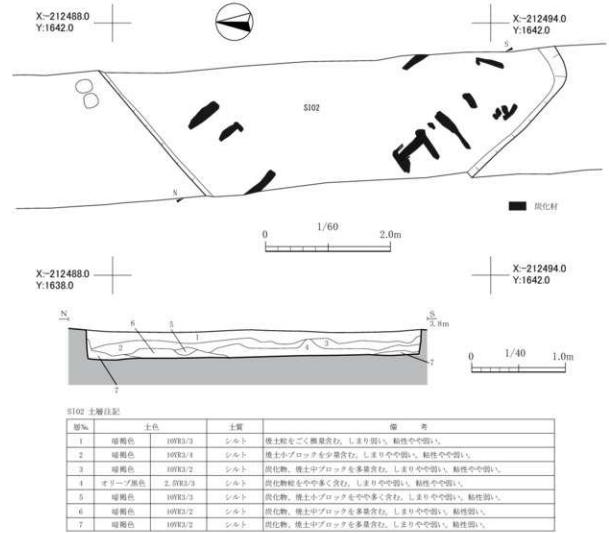
調査区中央部に位置する。SX01と重複し、これより新しい。遺構の東西は調査区外へ広がるため全体の形状規模は不明であるが、南北の一辻は6.1mを測る。建物の主軸方位は南辺で見た場合、81°東へ傾く。床面は褐色シルトを含む貼床であるが、主柱穴や周溝はみとめられなかった。またカマド・炉跡も確認できなかった。

遺物は非クロコ成形とクロコ成形の土師器甕・須恵器・高台・甕が出土している。第17図に図示した遺物の特徴から、8世紀末葉から9世紀初頭頃に位置づけられる。

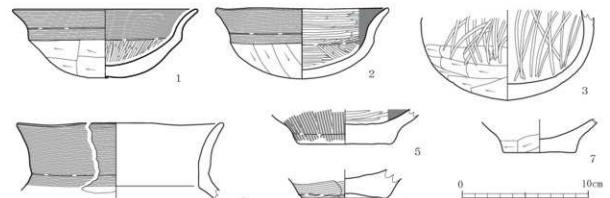
【S105】(第18図)

調査区南部に位置する。SD07と重複し、これより古い。遺構の西側は調査区外へ広がるため全体

1. 原遺跡第1次調査(第7地点)

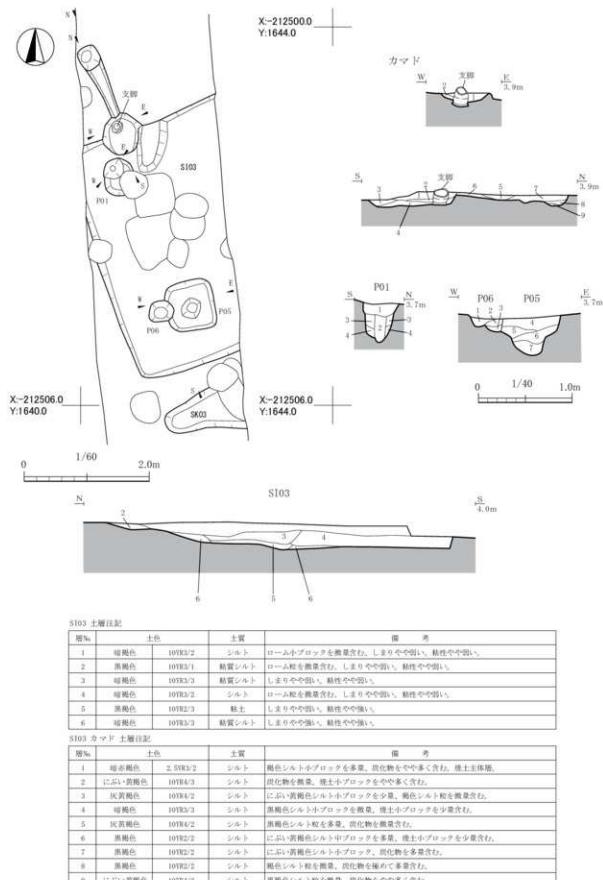


第12図 S102



番号	構造・部品	種別	器種	調整			寸法 (cm)	
				外面	内面	口径		
1	S102 底面	土師器	壺	ケズリ・ヨコナデ	ヘタキ・ヨコナデ	14.5	—	5.5 9.4
2	S102 底面	土師器	壺	ケズリ・ヨコナデ	ヘタキ・黒色処理	13.6	—	5.6 9.5
3	S102 堆積土	土師器	壺	ヘタキガキ・ヘラケズリ	ヘタキガキ	—	—	(7.2) 9.6
4	S102 堆積土	土師器	甌	ヨコナデ	—	—	—	(3.6)
5	S102 底面	土師器	甌	ヘラナダ	ヘラナダ	—	—	7.5 (2.8)
6	S102 底面	土師器	甌	ヘラナダ	ヘラナダか	—	—	6.8 (2.3)
7	S102 堆積土	土師器	甌	ヘラケズリ	ヘラナダか	—	—	5.8 (2.7)

第13図 S102出土遺物

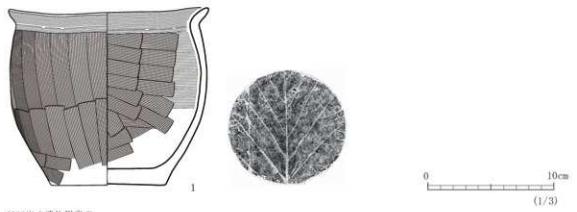


第14図 S103

1. 原遺跡第1次調査（第7地点）

S103 P1 土層注記			
層No.	土色	土質	備考
1 黒褐色	10YR2/1	シルト	褐色シルト粘土を少許含む。しまりやや弱い。
2 黒褐色	10YR2/2	シルト	褐色シルト粘土を微量含む。しまりやや弱い。
3 黒褐色	10YR2/1	シルト	褐色シルト粘土ブロックをやや多く含む。しまりやや弱い。
4 黒褐色	10YR2/2	シルト	にほく黄褐色シルト中ブロックを多量含む。しまりやや強い。

S103 P5・P6 土層注記			
層No.	土色	土質	備考
1 黒褐色	10YR2/2	シルト	褐色シルト粘土ブロックを微量含む。
2 黒褐色	10YR2/2	シルト	褐色シルト粘土を少量、燒土ごと微量含む。
3 黒褐色	10YR2/1	シルト	褐色シルト粘土ブロックを微量含む。
4 黒褐色	10YR2/3	シルト	褐色シルト粘土ブロックを少々含む。焼土物、燒土をやや多く含む。
5 褐褐色	10YR2/2	シルト	褐色シルト粘土、焼土跡物を少々含む。
6 黒褐色	10YR2/1	シルト	褐色シルト粘土を微量含む。
7 黑褐色	10YR2/2	シルト	褐色シルト粘土を微量含む。しまりやや弱い。



第15図 S103出土遺物

の形状規模は不明であるが、東辺の一辺は3.1mを測る。建物の主軸方位は東辺で見た場合、5°西へ傾く。床面は基本土層V層である黒色粘質シルト層を用いたようで、貼床はみられない。またカマド・炉跡や柱穴、周溝もみとめられなかった。

遺物は非クロコ成形の土師器壺・甕、須恵器壺・甕が出土している。第19図に図示した遺物の特徴から、8世紀半ば頃に位置づけられる。

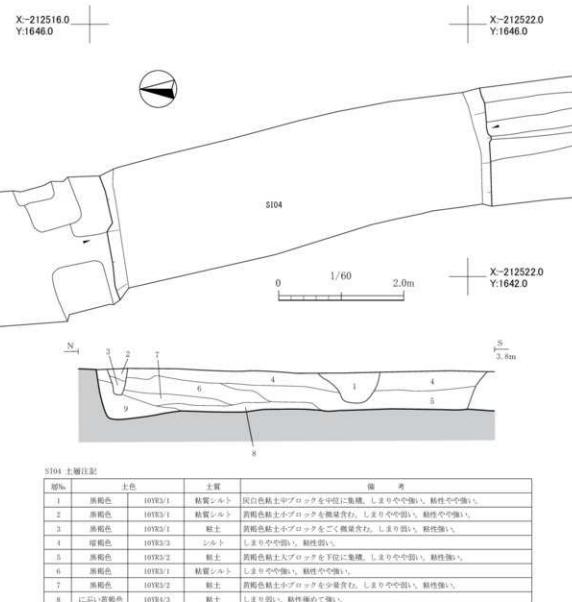
【S106】(第18図)

調査区南部に位置する。北西隅のみの検出のため、全体の形状規模は不明である。建物の主軸方位は西辺で見た場合、32°西へ傾く。床面は基本土層V層である黒色粘質シルト層を用いたようで、貼床はみられない。またカマド・炉跡や柱穴、周溝もみとめられなかった。

遺物は非クロコ成形の土師器壺・甕、須恵器壺・高台杯・鉢・瓶・甕のほか、弥生土器が出土している。第20図に図示した非クロコ土師器甕の特徴から、8世紀前半頃に位置づけられる。なお、第20図1の瓶には、開口している蒸氣孔に径1.5cmほどの土器と同様の胎土の棒を取り付けるものである。

【S107】(第21図)

調査区南部に位置する。遺構の西側は調査区外へ広がるため全体の形状規模は不明であるが、東



第16図 S104

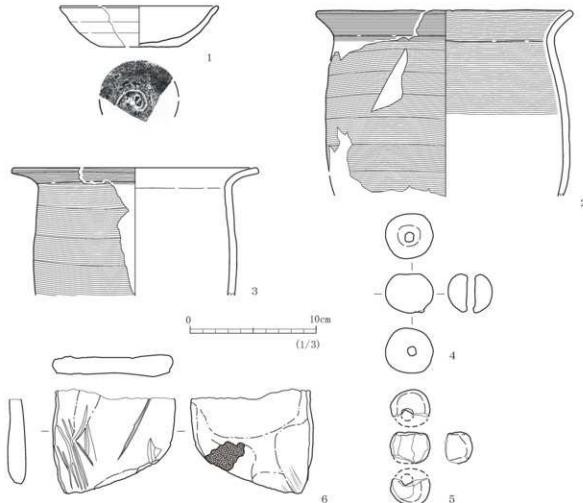
辺の一辺は4.7mを測る。建物の主軸方位は東辺で見た場合、5°西へ傾く。カマドは東壁中央からやや南寄りに存在し、両袖ともにぶい黄褐色粘質シルトを用いてつくられていた。燃焼部は幅76cm、奥行92cmで、建物の北壁から82cm離れた箇所に煙出ピットが存在することから、本来の煙道部の底面は平坦、あるいは緩やかに上っていくものと思われる。床面は基本土層V層である黒色粘質シルト層を用いたようで、貼床はみられない。なお、床面では周溝はみられなかつたが、主柱穴を2口確認した。

遺物は非クロコ成形の土師器壺・甕、ロクロ成形の土師器壺・甕、須恵器壺・瓶・甕が出土している。第22図に図示した遺物の特徴から、8世紀後半から9世紀前半頃に位置づけられる。

【S108】(第23図)

調査区南部に位置する。S109やSK06～10などと重複関係にあり、S109より新しく、SK06～10より古い。遺構の南側と東側、そして北側の一部は調査区外へ広がるため全体の形状規模は不明であるが、東西5.5m以上、南北4.1m以上を測る。建物の主軸方位は東辺で見た場合、5°西へ傾く。

1. 原遺跡第1次調査(第7地点)



S104出土遺物観察表

番号	遺構・細部	種別	器種	調査		写真番号
				外面	内面	
1	S104 床面	須恵器	杯	回転ヘラ切り・回転ヘラケズリ	ロクロナダ	12.4 6.2 3.3
2	S104 床面	土師器	甕	ケヌリ・ヨコナダ	ヨコナダ	19.0 — (14.6) 9-8
3	S104 堆積土	土師器	甕	ロクロナダ	ロクロナダ	19.6 — (10.1)
4	S104 堆積土	石製品	土玉	重量38g	—	a a a 10-1
5	S104 堆積土	石製品	土玉	重量14g	—	a a a 10-2
6	S104 堆積土	石製品	執石	紙摺あり、重量135g	(8.2)	9.5 0.9

第17図 S104出土遺物

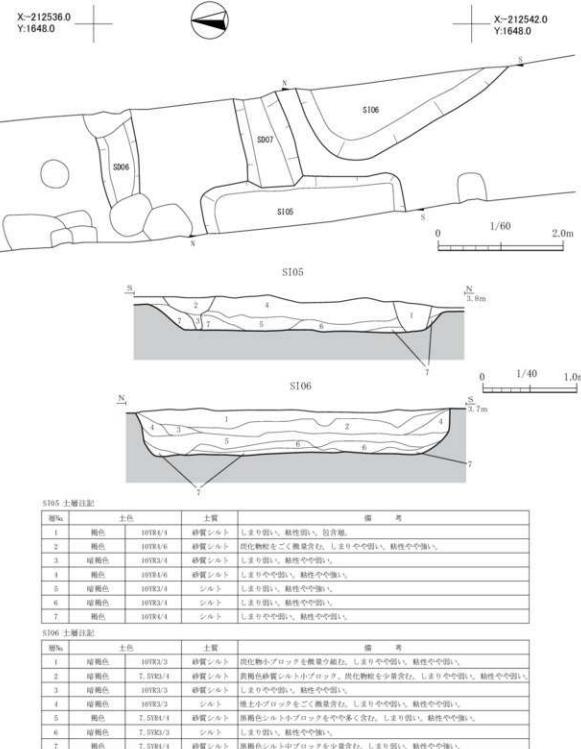
カマドは北壁中央に存在し、左袖は調査区外に位置するため部分的な検出に留まるが、両袖とともにぶい黄褐色粘質シルトを用いてつくられていた。確認できた範囲での燃焼部は幅49cm、奥行90cmである。煙道部は調査区外に位置するため規模は不明である。床面は褐色粘土ブロックを用いた貼床であり、主柱穴を2口確認した。なお、周溝はみとめられなかつた。

遺物は堆積土中より非ロクロ成形の土師器高杯・甕、須恵器杯、床面よりロクロ成形の土師器甕・甕が出土している。第24図に示した遺物の特徴から、8世紀末葉から9世紀初頭頃に位置付けられるが、後述するS109との重複関係から9世紀初頭頃を中心とした時期と考えたい。

【S109】(第25図)

調査区南部に位置する。S108と重複関係にあり、これより古い。遺構の大部分が調査区外へ広がるため全体の形状規模は不明である。建物の主軸方位は東辺を見る限り、真北に近いと考えられる。

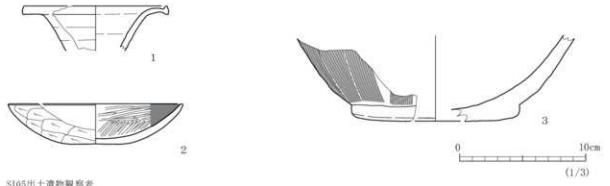
1. 原遺跡第1次調査(第7地点)



第18図 S105・S106

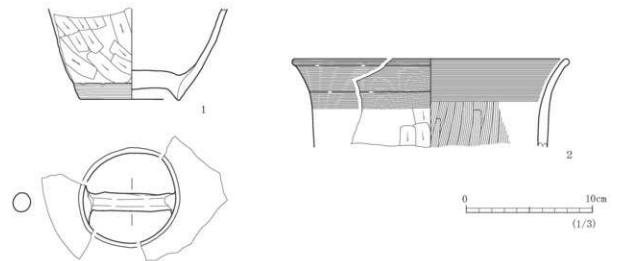
カマド本体は調査区外へ位置するが、煙道部が2基みとめられることから、造り替えが行われていたと推定される。また、煙道部の位置からカマドは北壁中央付近につくられたとみられる。煙道部は新旧いはずも底面はほぼ平坦であるが、新カマドの先端では第26図2に示したロクロ成形の土師器甕が逆位で設置されていた。床面は基本土層V層である黒色粘質シルト層を用いたようで、貼床はみられない。なお、確認できた床面の範囲は極めて限られていることから、明確な主柱穴や周溝はみと

1. 原遺跡第1次調査(第7地点)



番号	遺構・細部	種別	器種	調整			写真 番号
				外面	内面	法量(cm) 口径 底径 器高	
1	S105 堆積土・底盤	瓶	ロクロナダ	ロクロナダ	—	11.6 (3.6)	
2	S105 堆積土・底盤	杯	ハラケズリ	ミガキ・黒色処理	13.8 4.0 3.2	10.3	
3	S105 堆積土・土師器	甕	ハケメ	ナダ	—	13.0 (6.8)	

第19図 S105出土遺物



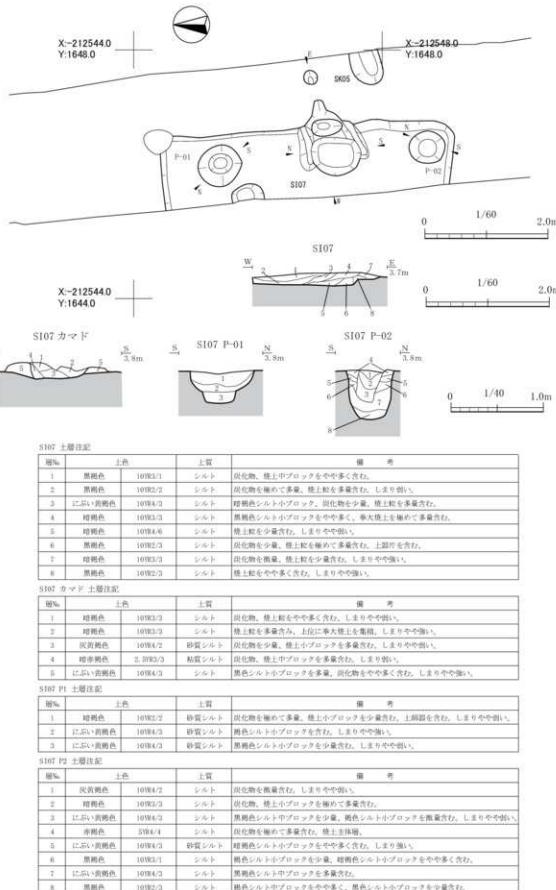
番号	遺構・細部	種別	器種	調整			写真 番号
				外面	内面	法量(cm) 口径 底径 器高	
1	S106 下層	土師器	瓶	ハラケズリ・ヨコナダ	ハラナダ・ナダ	— 7.9 (7.1) 10.4 5	
2	S106 下層	土師器	甕	ハラケズリ・ヨコナダ	ハラナダ・ヨコナダ	21.8 — (7.0)	

第20図 S106出土遺物

められなかつたが、小ピットを4口確認した。

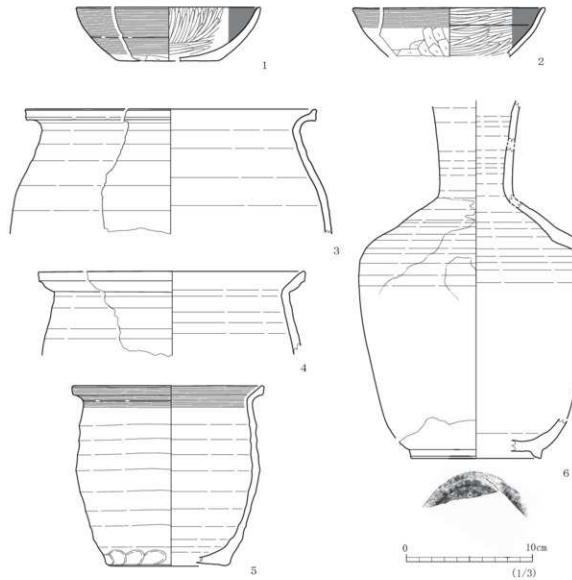
遺物は堆積土中より非ロクロ成形の土師器甕、須恵器杯・鉢・甕、床面や煙道部からロクロ成形の土師器杯・甕が出土している。第26図に図示した遺物の特徴から8世紀末葉から9世紀初頭頃に位置付けられるが、前述したS108との重複関係から8世紀末葉頃を中心とした時期と考えたい。

1. 原遺跡第1次調査(第7地点)



第21図 S107

1. 原遺跡第1次調査（第7地点）

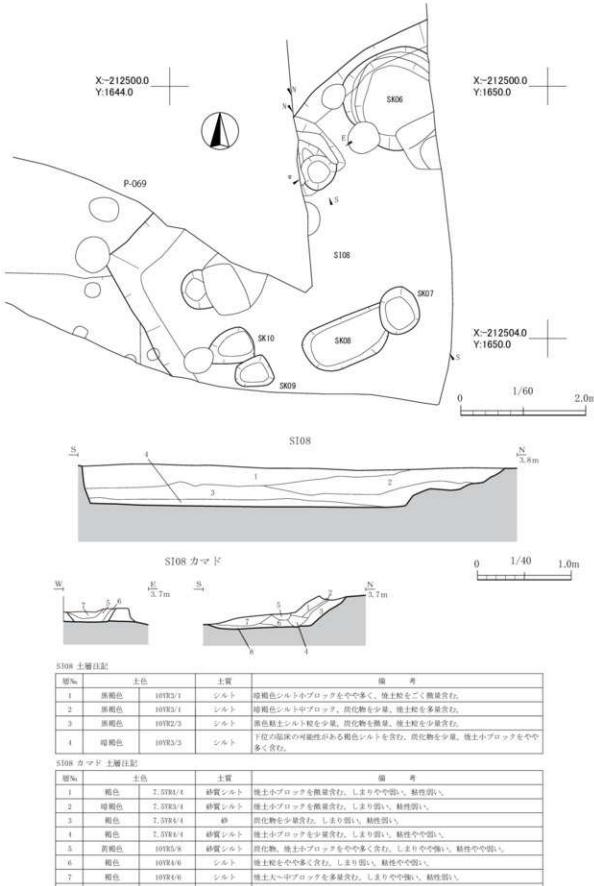


S107出土遺物観察表

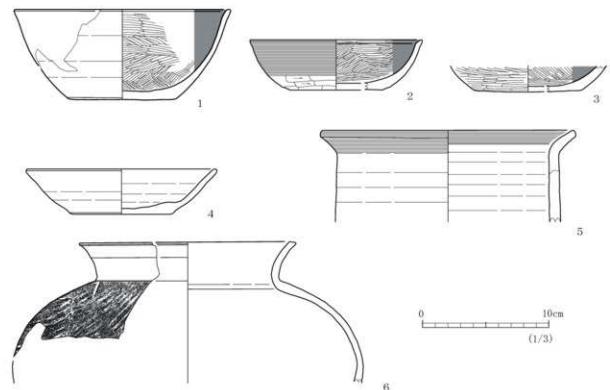
番号	遺構・細部	種別	器種	測量			写真番号	
				外面	内面	口径		
1	S107 床面	土師器	杯	体部下端と底部を手持ちハラケグリ	ミガキ・黒色処理	14.6	7.8	4.3
2	S107 床面	土師器	杯	ケグリ・ヨコナギ	ミガキ・黒色処理	15.2	—	(3.9)
3	S107 堆積土・土解説	甕	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	23.1	—	(9.9)
4	S107 堆積土・土解説	甕	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	21.0	—	(6.7) 10-7
5	S107 床面	土師器	甕	ロクロナダ・ユビオサエ	ロクロナダ	15.3	9.2	14.3 10-6
6	S107 床面	須恵器	瓶	ロクロナダ・自然釉	ロクロナダ	—	10.2	(28.4) 10-8

第22図 S107出土遺物

1. 原遺跡第1次調査（第7地点）



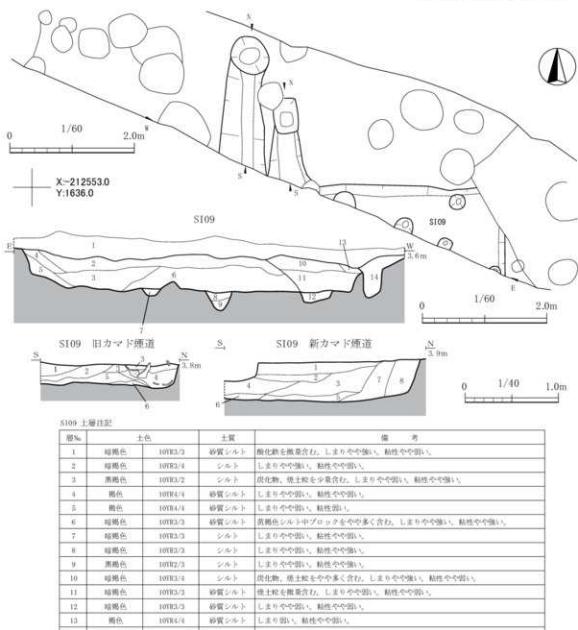
1. 原遺跡第1次調査（第7地点）



S108出土遺物観察表

番号	遺構・断面	種別	器種	調整			汎量(cm)	写真番号
				外面	内面	口径		
1	S108 底面	土師器	壺	底部鋭いケズリ、ロクロナデ	ミガキ・黒色処理	17.0	8.4	7.2 10.9
2	S108 底面	土師器	壺	底部下平と底部をへりケズリ	ミガキ・黒色処理	13.6	7.3	4.0
3	S108 堆積土・土師器	壺	ミガキ	ミガキ・黒色処理	—	—	8.6	(2.1)
4	S108 堆積土・土師器	壺	ロクロナデ	回転ヘラ切り・回転ヘラケズリ	ロクロナデ	15.0	8.0	3.6
5	S108 堆積土・土師器	壺	ヨコナダ・ロクロナデ	ヨコナダ・ロクロナデ	20.0	—	(7.3)	11-1
6	S108 遺跡土・瓦器	壺	平行タタキ・ロクロナデ	ロクロナデ	17.2	—	(11.2)	

第24図 S108出土遺物



S109出土遺物観察表

層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色	砂質シルト	陶器灰を微量含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。
2	暗褐色	シルト	しまりやや強め。粘性やや弱い。
3	黒褐色	シルト	皮膚灰。燒土を少量含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。
4	黒褐色	砂質シルト	砂質やや弱い。粘性やや弱い。
5	黒褐色	砂質シルト	しまりやや弱い。粘性やや弱い。
6	暗褐色	砂質シルト	黄褐色シルトブロックを多く含む。しまりやや強め。粘性やや強め。
7	暗褐色	シルト	しまりやや弱い。粘性やや弱い。
8	暗褐色	シルト	しまりやや弱い。粘性やや弱い。
9	黒褐色	シルト	しまりやや弱い。粘性やや弱い。
10	暗褐色	砂質シルト	皮膚灰。燒土を多く含む。しまりやや強め。粘性やや弱い。
11	暗褐色	砂質シルト	燒土塊を微量含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。
12	暗褐色	砂質シルト	しまりやや弱い。粘性やや弱い。
13	黒褐色	砂質シルト	しまりやや弱い。粘性やや弱い。
14	黒褐色	砂	しまり強め。粘性やや弱い。

S109出土カマド焼道部 上層注記

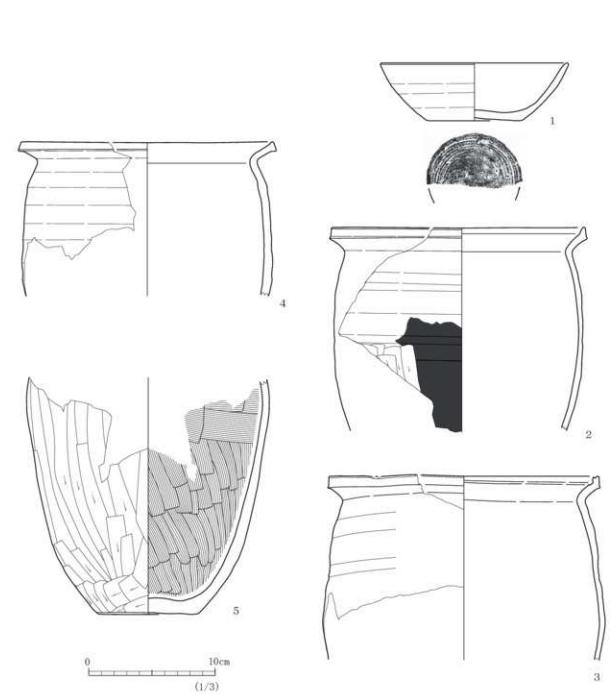
層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	10H2/3	褐色シルト小ブロック。燒土を少量含む。
2	黒褐色	10H2/3	黒褐色シルトを微量。燒土をやや多く含む。
3	黒褐色	10H2/3	燒土を多く含む。しまりやや弱い。
4	黒褐色	10H2/2	焼物灰をやや多く。燒土塊を多量含む。しまりやや弱い。
5	黒褐色	10H2/3	褐色シルトを少量。燒土塊を多量含む。しまりやや弱い。
6	黒褐色	10H2/4	黒褐色砂質シルト。
7	黒褐色	10H2/2	褐色シルトブロックを微量含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。
8	黒褐色	10H2/2	しまりやや強め。粘性やや弱い。

S109新カマド焼道部 上層注記

層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色	10H2/4	しまりやや強め。粘性やや弱い。
2	暗褐色	10H2/3	黒褐色砂質シルトブロックを少量含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。
3	暗褐色	10H2/3	燒土シルトブロックを微量含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。
4	暗褐色	10H2/3	黒褐色砂質シルトブロックを少量含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。
5	暗褐色	10H2/4	しまりやや弱い。粘性やや弱い。
6	暗褐色	10H2/4	黒褐色砂質シルト。
7	黒褐色	10H2/2	褐色シルトを少量。燒土シルトブロックをやや多く含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。
8	黒褐色	10H2/2	しまりやや強め。粘性やや弱い。

第25図 S109

1. 原遺跡第1次調査(第7地点)



第26図 S109出土遺物

S109出土遺物観察表

番号	遺構・解説	種類	深幅	調整			汎量(cm)	写真 番号
				外面	内面	口横 底径 厚さ		
1	S109 新カマド	須恵器 壺	ロクロナダ・回転系切末調整	ロクロナダ	14.8	7.5	4.1	
2	S109 新カマド	土師器 甕	ヘラケツリ・ロクロナダ	ロクロナダ	20.6	--	(16.2)	II-2
3	S109 新カマド	土師器 甕	ロクロナダ	ロクロナダ	21.3	--	(15.0)	
4	S109 新カマド	土師器 甕	ロクロナダ	ロクロナダ	20.6	--	(12.2)	
5	S109 新カマド	土師器 甕	ヨコナダ・ロクロナダ	ヨコナダ・ヘラナダ	--	7.8	(18.8)	II-3

表3 北側調査区堅穴建物跡属性表

建物名	平面形 東西×南北	輪方位	床	カマド	カマド 構築材	壁部	柱穴	周囲	出土遺物	時期	備考
SI01 不明	不明 4.65	真北	貼床	-	-	-	主柱穴 2	なし	非クロコ土師器壺・甕、須 恵器壺・甕	6世紀 中～後半	SD01・02より旧
SI02 不明	不明 6.00	N-46-W	貼床	-	-	-	-	なし	非クロコ土師器壺・甕、 須恵器壺・甕	6世紀 中～後半	地先家屋
SI03 不明	不明 3.90	N-22-W	貼床	北壁 西寄り	粘質 シルト	粗造道	主柱穴 2	なし	非クロコ土師器壺・甕、 須恵器壺・甕、 弥生土器	8世紀 半ば	
SI04 不明	不明 6.12	N-81-E	貼床	-	-	-	-	なし	非クロコ土師器壺・甕、 須恵器壺・甕、須 恵器壺・甕	8世紀 半ば	SD01・P47より新
SI05 不明	不明 3.16	N-5-W	地山	-	-	-	-	なし	非クロコ土師器壺・甕、 須恵器壺・甕	8世紀 半ば	SD07より新
SI06 不明	不明 不明	N-32-W	地山	-	-	-	-	なし	非クロコ土師器壺・甕、 須恵器壺・甕、 須恵器壺・甕、 須・壺、弥生土器	8世紀末葉	
SI07 不明	不明 4.74	N-5-W	地山	東壁 中央	粘質 シルト	粗造道	主柱穴 2	なし	非クロコ土師器壺・甕、 須・壺、須・壺、 須・壺、須・壺	8世紀末葉	
SI08 不明	5.56±1.1 4.12±1.13	N-30-W	貼床	北壁 中央	粘質 シルト	不明	主柱穴 2	なし	非クロコ土師器壺・甕、 須・壺、須・壺、 須・壺、須・壺	8世紀初頭	SD09より新 SK06～10より旧
SI09 不明	不明 不明	真北	地山	北壁 中央か	不明	新・旧 ととに 長造道	-	なし	クレオ土師器壺・甕、 須・壺、須・壺、須・甕	8世紀末葉	SD10より旧

・溝跡

【SD01】(第27・28図)

調査区北部に位置する。SI01・SD02・SK01と重複関係にあり、SI01より新しく、SD02・SK01より古い。調査区外へ延びるため全長は不明であるが、総長2.2mに渡って検出した。主軸方位は89° 東に傾いており、真北方向に対しほぼ直交関係にある。検出面での規模は上幅1.2m、下幅0.2m、確認面からの深さは75cmを測る。断面形状はV字状を呈する。堆積土は6層に分層でき、すべて自然堆積である。

遺物は堆積土中から非クロコ成形の土師器壺、須恵器壺が出土している。第29図に図示した遺物の特徴から、8世紀半ば頃に位置づけられる。

【SD02】(第27・28図)

調査区北部に位置する。SI01・SD01と重複関係にあり、両者より新しい。調査区外へ延びるため全長は不明であるが、総長2.6mに渡って検出した。主軸方位は53° 東に傾いている。本構造は新旧2時期あり、検出面での新段階の規模は上幅0.8m、下幅0.2m、確認面からの深さは46cmを測る。断面形状はU字状を呈する。堆積土は4層に分層でき、すべて自然堆積である。

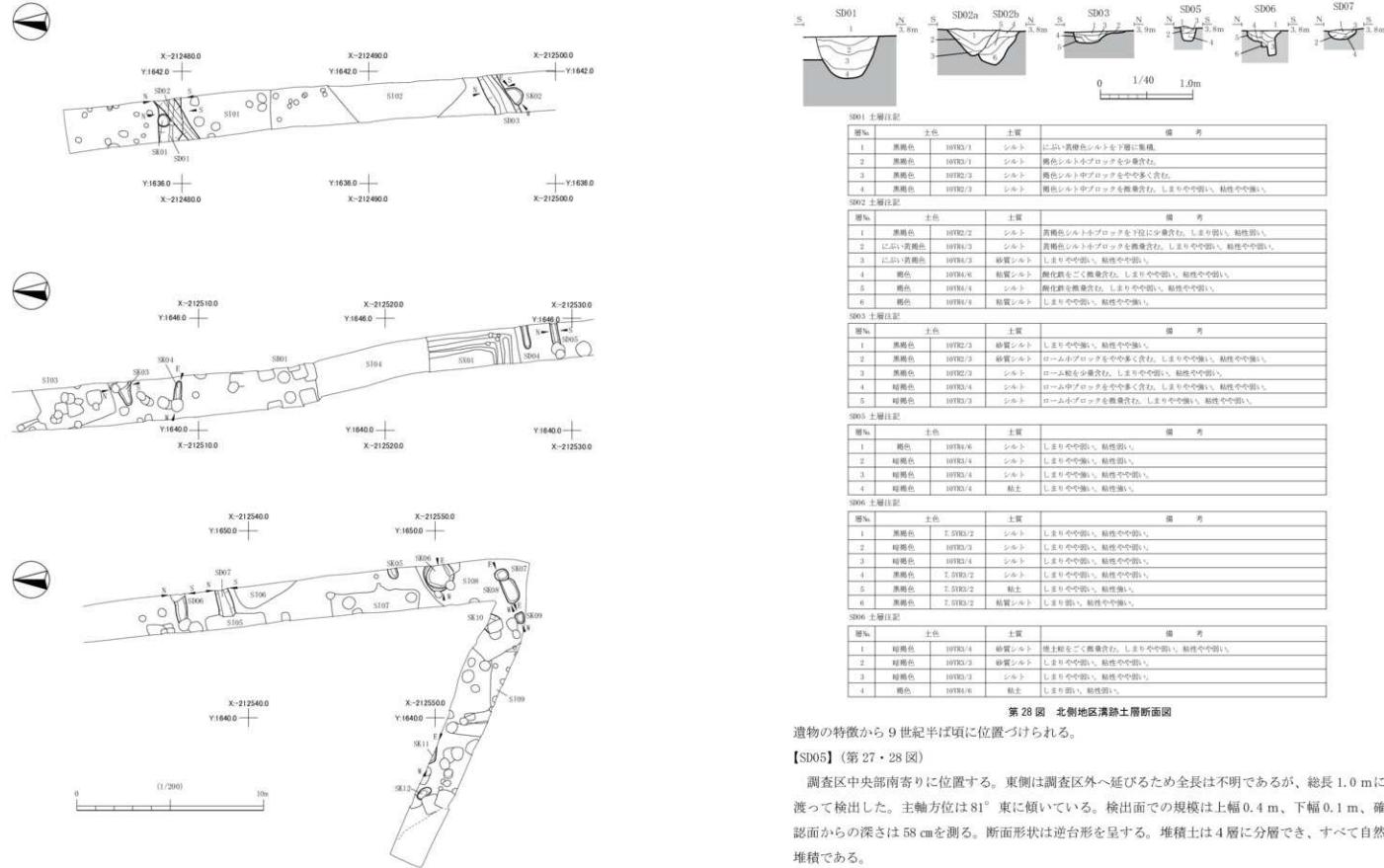
遺物は堆積土中からクロコ成形の土師器壺、須恵器壺が出土している。第29図に図示した遺物の特徴から、8世紀末葉から9世紀初頭頃に位置づけられる。

【SD03】(第27・28図)

調査区中央部北寄りに位置する。SK02と重複関係にあり、これより新しい。調査区外へ延びるため全長は不明であるが、総長2.3mに渡って検出した。主軸方位は55° 東に傾いている。検出面での規模は上幅1.0m、下幅0.2m、確認面からの深さは25cmを測る。断面形状は皿状を呈する。堆積土は4層に分層でき、すべて自然堆積である。

遺物は堆積土中から非クロコ成形の土師器壺・甕、須恵器壺が出土している。第29図に図示した

1. 原遺跡第1次調査(第7地点)



第28図 北側地区溝跡土層断面図

遺物の特徴から9世紀半ば頃に位置づけられる。

【SD05】(第27・28図)

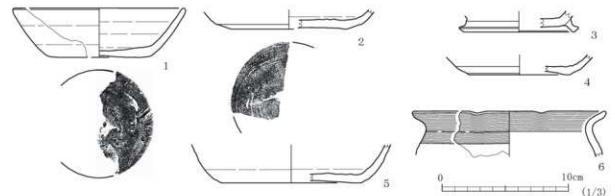
調査区中央部南寄りに位置する。東側は調査区外へ延びるため全長は不明であるが、総長1.0mに渡って検出した。主軸方位は81° 東に傾いている。検出面での規模は上幅0.4m、下幅0.1m、確認面からの深さは58cmを測る。断面形状は逆台形を呈する。堆積土は4層に分層でき、すべて自然堆積である。

遺物は堆積土中から非ロクロ成形の土師器甕、須恵器甕が出土しているが、図示はできなかった。

【SD07】(第27・28図)

調査区南部に位置する。SI05と重複関係にあり、これより古い。調査区外へ延びるため全長は不

1. 原遺跡第1次調査(第7地点)



北側地区溝跡出土遺物観察表

番号	構造・細部	種別	器種	調整			法量(cm)	厚さ 等分
				外面	内面	口径 底径 深さ		
1	SD01	須恵器	鉢	底部へ切り	ロクロナダ	13.6 8.0 3.9		
2	SD01	須恵器	鉢	体部下半のラケズリ、底部回転のラケズリ	ロクロナダ	— 9.2 (1.5)		
3	SD01	須恵器	高台所	回転ヘラケズリ、高台貼付	ロクロナダ	— 8.6 (1.7)		
4	SD03	須恵器	鉢	回転系切未調査	ロクロナダ	— 8.0 (1.6)		
5	SD07	須恵器	鉢	回転系切のち回転ヘラケズリ	ロクロナダ	— 11.0 (3.0)		
6	SD02	土師器	甕	ロクロナダ	15.2	— (3.6)		

第29図 北側調査区溝跡出土遺物

表4 北側調査区溝跡属性表

建物名	棟長(m)	断面形	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)	主軸方位	堆積土	出土遺物	時期	備考
SD01	東西 2.25	V字	124	22	75	8°-90°-E	6層 自然堆積	非ロクロ土師器甕、須恵器甕	8世紀 半ば	SD10より新 SD02、SK01より旧
SD02	東西 2.60	U字	84	22	46	N-50°-E	4層 自然堆積	非ロクロ土師器甕、須恵器甕	8世紀末葉 ～ 9世紀初頭	SD10、SD01より新
SD03	東西 2.30	皿形	102	24	25	N-55°-E	4層 自然堆積	非ロクロ土師器甕・甕、須恵器甕	8世紀前半	SK02より新
SD04	東西 1.22	箱形	34	18	28	N-80°-E	2層 自然→人為	なし	不明	
SD05	東西 1.00	逆走形	38	16	58	N-81°-E	4層 自然堆積	非ロクロ土師器甕、須恵器甕	不明	
SD06	東西 1.02	U字	64	38	36	N-76-E	2層 人為理土	なし	不明	
SD07	東西 1.45	U字	80	41	44	N-72-E	4層 自然→人為	非ロクロ土師器甕・甕・甕、須恵器甕・甕	8世紀末葉 ～ 9世紀初頭	

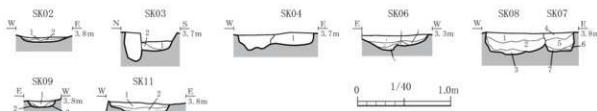
明であるが、総長1.5mに渡って検出した。主軸方位は72° 東に傾いている。検出面での規模は上幅0.8m、下幅0.4m、確認面からの深さは44cmを測る。断面形状はU字状を呈する。堆積土は4層に分層でき、すべて自然堆積である。

遺物は堆積土中から非ロクロ成形の土師器甕・甕・甕、須恵器甕・甕・甕が出土している。第29図に図示した遺物の特徴から8世紀前半頃に位置づけられる。

・土坑

【SK02】(第27・30図)

調査区北部に位置する。SD03と重複関係にあり、これより古い。平面形状は長円形と考えられる。規模は長軸は不明だが、短軸は104cmを測る。確認面からの深さは12cmであり、断面形状は皿形を呈する。堆積土は2層に分層でき、すべて自然堆積である。



SK02 土壌注記

番号	土色	土質	備考
1	暗褐色	HY012/3	シルト にぶい黄褐色砂質シルトブロックを多く無量含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。
2	にぶい黄褐色	HY012/3	粘質シルト にぶい黄褐色シルトを多く含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。

SK03 土壌注記

番号	土色	土質	備考
1	黒褐色	HY012/1	シルト 黄褐色シルト小ブロックをや多く、黒色シルト小ブロックを多量含む。
2	にぶい黄褐色	HY012/3	粘質シルト 黒褐色シルト中ブロックを多量含む。

SK04 土壌注記

番号	土色	土質	備考
1	にぶい黄褐色	HY012/3	シルト 黄褐色シルト小ブロックをや多く、黒色シルト小ブロックを多量含む。しまりやや弱い。

SK06 土壌注記

番号	土色	土質	備考
1	褐色	T.SY01/4	砂 しまり弱い。粘性やや弱い。
2	黒褐色	T.SY02/2	粘土 黄褐色砂質シルト小ブロック。酸化鉄をや多く含む。しまりやや弱い。
3	黒褐色	T.SY02/2	粘土 黒褐色土小ブロックを多く無量含む。しまりやや弱い。粘性強い。
4	暗褐色	HY012/4	粘質シルト しまりやや弱い。粘性強めで強い。
5	黒褐色	T.SY02/2	粘土 しまりやや弱い。粘性弱い。

SK07・8 土壌注記

番号	土色	土質	備考
1	黄褐色	HY012/2	砂 しまり弱い。粘性やや弱い。
2	黒褐色	HY012/2	粘土 黄褐色砂質シルト小ブロック。酸化鉄をや多く含む。しまり弱い。
3	黒褐色	HY012/2	粘土 にぶい黄褐色砂質シルト小ブロックをや多く含む。しまり弱い。
4	黄褐色	HY012/3	砂 にぶい黄褐色砂質シルト小ブロック。酸化鉄をや多く含む。しまり弱い。
5	黒褐色	HY012/2	粘土 にぶい黄褐色シルト中ブロックを少量含む。しまりやや弱い。

SK11 土壌注記

番号	土色	土質	備考
1	黄褐色	HY012/2	砂質シルト にぶい黄褐色砂質シルト小ブロックを少量、酸化鉄を微量含む。土脚部分を含む。しまりやや弱い。
2	黒褐色	HY012/3	シルト 黒褐色シルト小ブロックを無量含む。しまりやや弱い。
3	にぶい黄褐色	HY012/3	シルト 黒褐色シルト中ブロックを無量含む。しまりやや弱い。

第30図 北側地区土坑土層断面図



北側地区土坑出土遺物観察表

番号	構造・細部	種別	器種	調査			法量(cm)	厚さ 等分
				外面	内面	口径 底径 深さ		
1	SK03	土師甕	甕	ハケメ・ナダ		—	8.9 (6.0)	
2	SK09	須恵器	甕	平行タタキ		—	(6.6)	
3	SK11	須恵器	甕	平行タタキ	ナダ	当具痕	— (3.4)	

第31図 北側調査区土坑出土遺物

1. 原遺跡第1次調査（第7地点）

遺物は非クロコ成形の土師器甕が堆積土中より出土しているが、図示できなかった。

【SK05】（第27・30図）

調査区中央部北寄りに位置する溝状土坑である。東側ではピットと重複し、また調査区外へ広がるため長軸は不明だが、短軸は78cmを測る。確認面からの深さは37cmであり、断面形状は逆台形を呈する。堆積土は2層に分層でき、すべて人為的埋土である。

遺物は第31図3に示した非クロコ成形の土師器甕と須恵器甕が、堆積土中より出土している。

【SK04】（第27・30図）

調査区中央部北寄りに位置する溝状土坑である。西側ではピットと重複するため長軸は不明だが、短軸は42cmを測る。確認面からの深さは26cmであり、断面形状は盤形を呈する。堆積土は1層で人為的埋土である。

遺物は非クロコ成形の土師器甕・甕と須恵器瓶・甕、そして弥生土器が堆積土中より出土しているが、図示できなかった。

【SK06】（第27・30図）

調査区南部に位置する。SI08やピットと重複関係にあり、これらより古い。東側が調査区外へ広がるが、平面形状は円形と考えられる。規模は長軸146cmを測る。確認面からの深さは32cmであり、断面形状は皿形を呈する。堆積土は3層に分層でき、すべて人為的埋土である。遺物は出土していない。

【SK07】（第27・30図）

調査区南部に位置する。SI08、SK08と重複関係にあり、両者より新しい。平面形状は楕円形であり、規模は長軸74cm、短軸64cmを測る。確認面からの深さは40cmであり、断面形状は箱形を呈する。堆積土は4層に分層でき、すべて人為的埋土である。

遺物は堆積土中より須恵器甕が出土しているが、図示できなかった。

【SK08】（第27・30図）

調査区南部に位置する。SI08、SK07と重複関係にあり、前者より新しく、後者より古い。平面形状は長円形であり、規模は短軸76cmを測る。確認面からの深さは45cmであり、断面形状はU字状を呈する。堆積土は3層に分層でき、すべて人為的埋土である。

遺物は堆積土中より非クロコ成形の土師器甕、須恵器甕が出土しているが、図示できなかった。

【SK09】（第27・30図）

調査区南部に位置する。SI08と重複関係にあり、これより古い。平面形状は台形であり、規模は長軸58cm、短軸46cmを測る。確認面からの深さは14cmであり、断面形状は皿状を呈する。堆積土は2層に分層でき、すべて人為的埋土である。

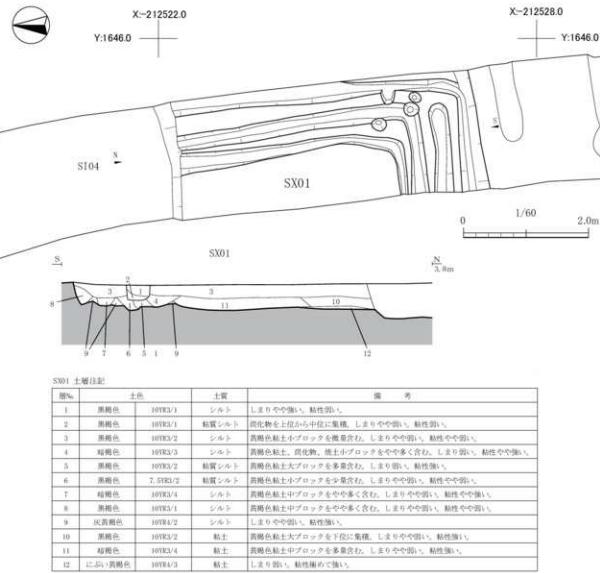
遺物は堆積土中より非クロコ成形の土師器甕・甕、須恵器蓋・甕（第31図2）が出土している。

【SK11】（第27・30図）

調査区南部に位置する。大部分が調査区外へ広がるため、平面形状、規模は不明である。確認面からの深さは33cmであり、断面形状はU字状を呈する。堆積土は3層に分層でき、すべて自然堆積である。

遺物は堆積土中より非クロコ成形の土師器甕・鉢・甕、須恵器甕（第31図3）が出土している。

1. 原遺跡第1次調査（第7地点）



第32図 SX01

・性格不明遺構

【SX01】（第27・32図）

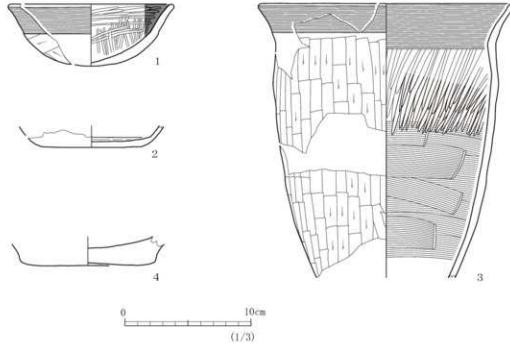
調査区中央部に位置する。SI04と重複し、これより古い。遺構の大部分は調査区外へ広がるため全体の形状・規模は不明である。本遺構は堅穴建物跡である可能性も考慮できるが、底面に4条ものL字状に屈曲する小溝が存在することから通常の堅穴建物の拡張とは考えにくく、ここでは性格不明遺構として扱う。なお、小溝を除いた遺構底面はほぼ平坦であった。

遺物は非クロコ成形の土師器甕・甕、須恵器甕、そして不明土製品が堆積土中より出土している。第33図に図示した遺物の特徴から、7世紀末から8世紀初頭頃に位置づけられる。

・柱穴（第7図）

北側調査区内では柱痕跡が認められながらも、調査面積の関係で建物の復元ができなかった柱穴が89口存在する。また、柱痕跡は明瞭に確認できなかったが、遺物が出土している柱穴もある。ここでは、今後の調査の一助とするためにこれらの柱穴について簡潔に触れておく。

1. 原遺跡第1次調査(第7地点)



SX01出土遺物図表

番号	遺構・部品	種別	器種	調査		法量(cm) 口徑/底径/ 深さ	写真 番号
				外面	内面		
1	SX01	堆積土	土師器	坏	ヨコナデ・ヘラケズリ	ミガキ・黒色処理 13.2 — 5.0	
2	SX01	堆積土	須恵器	Hf	底面手持ち・ヘラケズリ・ロクロナデ	ロクロナデ — 8.0 (1.7)	
3	SX01	堆積土	土師器	甕	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ミガキ・ヘナダ 20.3 — (21.7) 13.8	
4	SX01	堆積土	土師器	甕	底部ヘナダ・ナデ	ユビオカエ・ナデ — 8.0 (2.3)	

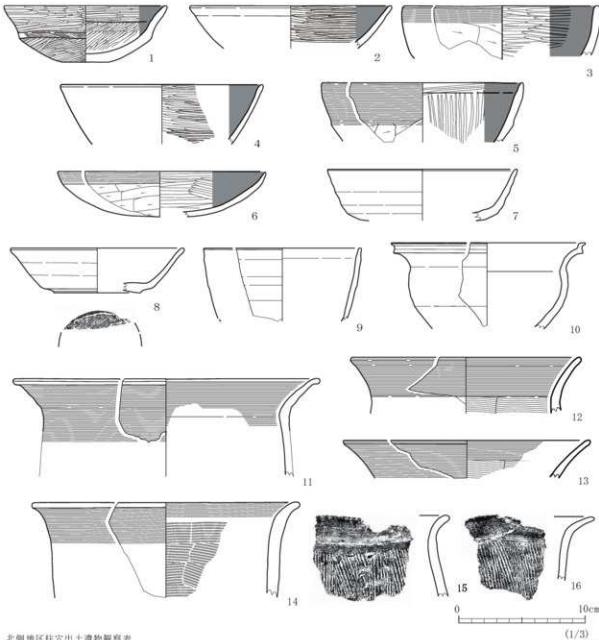
第33図 SX01出土遺物

調査区中央付近で確認されたP44・45は、いずれも平面形状は円形で、覆土も同様に黒褐色粘土ブロックを含む暗褐色シルトである。柱穴間の距離は1.2mであり、柱列を構成する可能性がある。また、近接して存在するP47の掘方は、一辺50cm以上の大方形、あるいは長方形を呈するとみられるが、本遺跡地内で確認される掘立柱建物跡の柱穴と同様に基本土層VII層である褐色粘土ブロックを多量に含むものである。柱抜き取り穴からは第34図1の非ロクロ成形の土師器坏が出土しており、7世紀末から8世紀初頭に機能していたと推定できるSB01に先行する建物が存在していた可能性が考慮される。

調査区中央部南寄りで確認したP50からは、非ロクロ成形の土師器坏・甕・高坏や、第34図4に示したロクロ成形の土師器坏などとともに羽口が出土している。また、この南側に位置するP55からは第34図13に示した非ロクロ成形の土師器甕・須恵器杯が出土しているが、これらは8世紀前半頃に位置づけられる。

調査区南部で確認されたP81からは、非ロクロ成形の土師器坏・甕・須恵器鉢・甕が出土しており、8世紀前半頃に機能していたと考えられる。P87・88・89は、いずれも柱掘方が一辺1m程度の大方形を呈するものと思われる。これらは柱材の抜き取りが行われていることから柱痕跡は明瞭に確認できなかったが、官衙的な建物を構成する柱穴である可能性が高い。

1. 原遺跡第1次調査(第7地点)

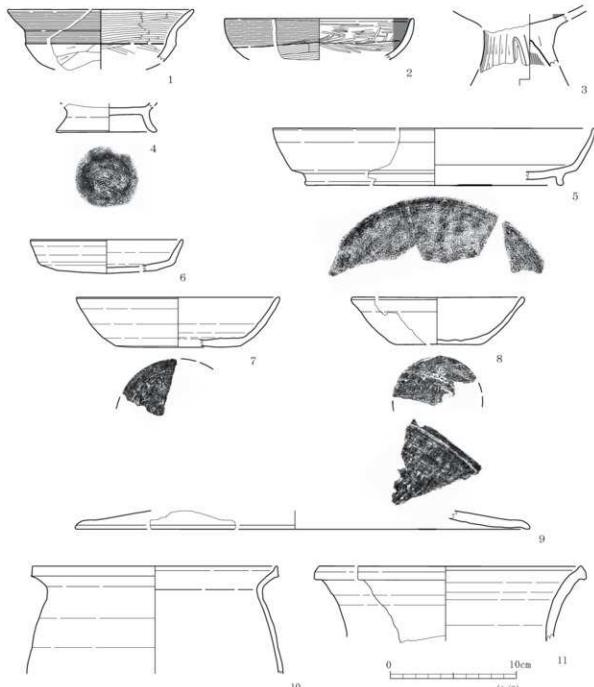


北側地区柱穴出土遺物図表

番号	遺構・部品	種別	器種	調査		法量(cm) 口徑/底径/ 深さ	写真 番号
				外面	内面		
1	P47	土師器	坏	ヘラケズリのちヘラミガキ	ミガキ・黒色処理 12.7 3.8 4.5 14-1		
2	P50	土師器	坏	ヘラケズリ・ヨコナデ	ミガキ・黒色処理 16.0 — (3.4)		
3	P50	土師器	坏	ヘラケズリ・ヨコナデ	ミガキ・黒色処理 15.2 — (4.3)		
4	P50	土師器	坏	ヘラケズリ・ヨコナデ	ミガキ・黒色処理 16.0 — (4.7)		
5	P80	土師器	坏	ヘラケズリ・ヨコナデ	ミガキ・黒色処理 15.8 — (4.8)		
6	P89	土師器	坏	ヘラケズリ・ヨコナデ	ミガキ・黒色処理 16.4 — (3.6)		
7	P55	須恵器	Hf	回転ヘラケズリ	ロクロナデ 13.7 6.9 3.6		
8	P55	須恵器	Hf	回転羽口切妻調整	ロクロナデ 13.7 6.9 3.6		
9	P81	須恵器	鉢	ロクロナデ	ロクロナデ 12.4 — (5.8)		
10	P81	須恵器	鉢	ロクロナデ	ロクロナデ 15.4 — (6.6) 14-2		
11	P59	土師器	甕	ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラナデ 24.0 — (7.7)		
12	P55	土師器	甕	ヨコナデ	ヨコナデ・ヘラナデ 18.0 — (4.5)		
13	P55	土師器	甕	ヨコナデ	ヨコナデ・ヘラナデ 20.0 — (3.0)		
14	P80	土師器	甕	ヨコナデ	ヨコナデ・ヘラナデ 21.0 — (7.5)		
15	P81	土師器	甕	ハク・ヨコナデ	ヨコナデ・ヘラナデ — — (6.4)		
16	P81	土師器	甕	ハク・ヨコナデ	ヨコナデ・ヘラナデ — — (5.1)		

第34図 北側調査区柱穴出土遺物

1. 原遺跡第1次調査（第7地点）

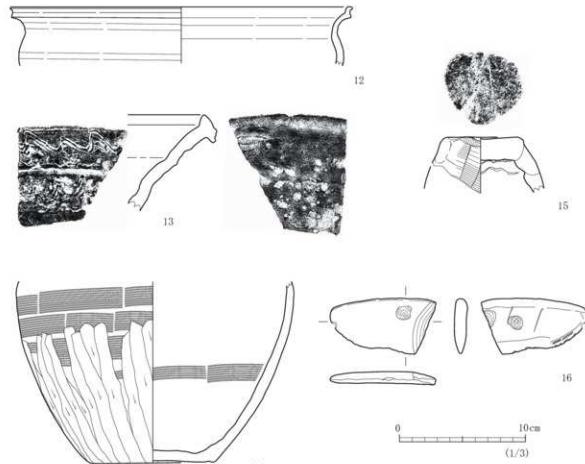


北側地区遺構外出土遺物観察表1

番号	遺構・細部	種別	器種	調整			写真番号
				外面	内面	法量(cm)	
1	廻転	土師器	杯	ヘラケズリ・ヨコナダ	ミガキ	14.8	— (4.8)
2	当世織維下付	土師器	杯	ヘラナダ・ヨコナダ	ミガキ・黒色処理	15.0	— (3.3)
3	SIIH 磁土	土師器	高杯	ヘラケズリ・細長い切れ込み状の透かし	脚部ヘラナダ 環部ミガキ・黒色処理	—	(4.0) 14-3
4	SIIH	土師器	高台杯	底部糸切未調整	脚部のため不明	—	8.0 (2.3)
5	当世織維下付	土師器	高台杯	高台貼付	ロクロナダ	25.0	20.4 4.5 14-4
6	当世織維下付	土師器	杯	ロクロナダ	ロクロナダ	12.0	10.6 2.7
7	当世織維下付	土師器	杯	回転ヘラケズリ	ロクロナダ	16.0	10.0 4.0
8	廻転	土師器	杯	手持ちヘラケズリ	ロクロナダ	13.6	7.0 3.8
9	当世織維下付	土師器	蓋	平行タタキ・ヘラナダ	ロクロナダ	36.0	— (1.5)
10	当世織維下付	土師器	便	ロクロナダ	ロクロナダ	19.8	— (8.6)
11	廻転	土師器	便	ロクロナダ・自然袖	ロクロナダ	20.8	— (5.9) 14-5

第35図 北側調査区その他の出土遺物（1）

1. 原遺跡第1次調査（第7地点）



北側地区遺構外出土遺物観察表2

番号	遺構・細部	種別	器種	調整		法量(cm)	写真番号
				外面	内面		
12	廻転	須恵器	鉢	ロクロナダ	ロクロナダ	28.0	— (4.5) 14-6
13	廻転	須恵器	便	脚部による波状文・器面剥離	ロクロナダ	—	(7.6) 14-7
14	当世織維下付	須恵器	便	木口狀(?)且によるキメ・ヘラケズリ。 底部ヘラナダ	ヘラナダ・ヨコナダ	—	10.0 (14.4) 14-7
15	廻転	土製品	筒形土製品	ヨビオサヌ・ヘラナダ 底部木薙毛・ヘナダ	輪積底紙著	—	3.2 (4.4) 14-8
16	SIIH 磁土	石製品	石施丁	縫穴穿孔のための敲打面、重量47g	—	(8.0) 4.4 1.0 14-8	

第36図 北側調査区その他の出土遺物（2）

・その他の出土遺物（第35・36図）

1はSI02の床面より出土した資料と近似しており、6世紀後半頃の年代観が考えられる。3の高杯は脚部に細長い切れ込み状の透孔を有するものである。脚部の楕を失うため透孔の形状を判別するのは困難であるが、円形や長方形では無いと思われることから、おそらくは細長の三角形を呈するものと考えられる。5の高台杯は口径・底径ともに大きく、高台部分の成形も極めて精緻である。11の甕は外面に降灰による自然釉がみられ、また口唇部は丸味を有する。胎土の色調は暗褐色を呈し、当遺跡から出土した他の甕類と比較した場合に異質な感を受ける。類例としては猿投窓跡群NN288号窯の製品があり、8世紀後第2四半期の年代観が与えられている（愛知県2015）。

このほか15の筒形土製品は主にカマドで使用されるものである。成形は粗雑で輪積痕を明瞭に留めている。16の石施丁は縫穴を穿孔している途中で破損して廃棄されたと考えられる。

1. 原遺跡第1次調査（第7地点）

1. 原遺跡第1次調査（第7地点）

②南側調査区（第37図）

南側調査区は、排水路の計画にあわせて幅2m、長さ120mとして設定した。確認できた遺構は掘立柱建物跡2棟、竪穴建物跡16棟、木材群1列、溝跡6条、土坑、柱穴などである。

・掘立柱建物跡

【SB02】（第38・39図）

調査区中央部南寄りに位置する。SB03・SI23と重複関係にあり、両者より新しい。調査区内では東西1間以上、南北2間以上と確認できたが、第3次調査の結果から東西3間、南北5間の南北棟であると考えられる。調査区内では柱穴を5口確認し、うち2口で柱痕跡を確認した。復元した平面規模は桁行9.6m、梁行6.8mである。建物の主軸は東列で計測すると33°西へ傾く。柱穴の大半は調査区外へ広がるために全容が判明しているものはP3のみであるが、これを参考にすると長辺130cm、短辺100cmほどの長方形と考えられる。柱痕跡は直径18cmほどの円形である。

遺物は非クロコ成形の土師器壺・高杯・甕、須恵器甕が柱掘方より出土している。第40図に図示した土師器高杯は脚部に小形の円形透しがみられる。また図示はできなかつたが土師器壺には底面が平底気味のものが見受けられることから7世紀末葉から8世紀初頭頃に位置付けられるが、後述するSB03・SI23との重複関係から8世紀初頭を中心とした時期と考えたい。

【SB03】（第38・41図）

調査区中央部南寄りに位置する。SB02と重複関係にあり、これより古い。調査区内では東西1間以上、南北3間以上と確認できたが、西列と北列の関係から東西2間以上、南北4間以上の南北棟であると考えられる。調査区内では柱穴を5口確認し、1口で柱痕跡を確認したほか、掘立柱面では加重痕跡が2口でみとめられている。復元した平面規模は桁行8.7m以上、梁行2.0m以上である。建物の主軸は西列で計測すると21°西へ傾く。柱穴の大半は調査区外へ広がるために全容が判明しているものはP3のみであるが、これを参考にすると長辺110cm、短辺100cmほどの方形、ないしは長方形と考えられる。柱痕跡は直径20cmほどの円形である。

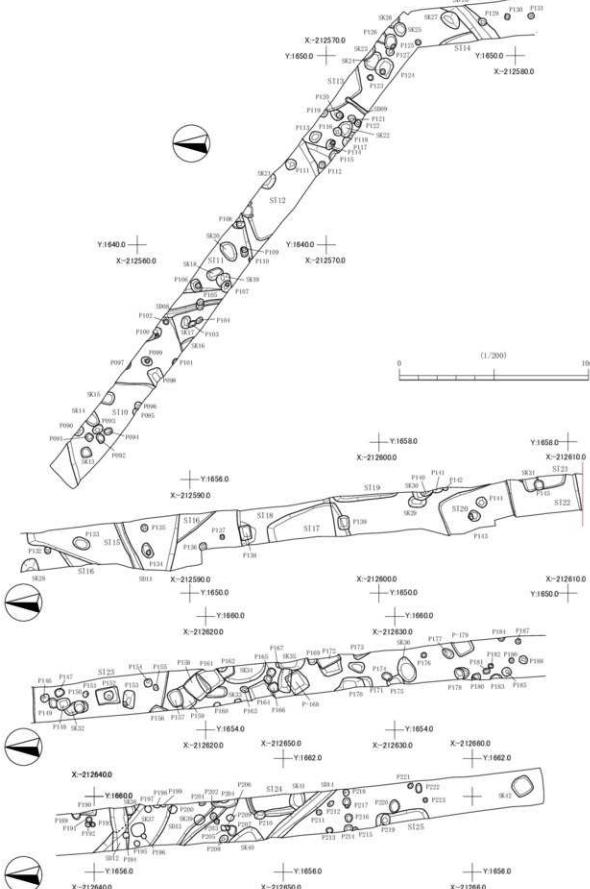
遺物は非クロコ成形の土師器壺・高杯・甕が柱掘方より出土している。第42図に図示した土師器高杯は脚部にやや大きい円形透しがみられる。また図示はできなかつたが土師器壺では底面が平底気味のものが見受けられることから7世紀末葉から8世紀初頭頃に位置付けられるが、前述したSB02との重複関係から7世紀末葉を中心とした時期と考えたい。

・竪穴建物跡

【SI10】（第43図）

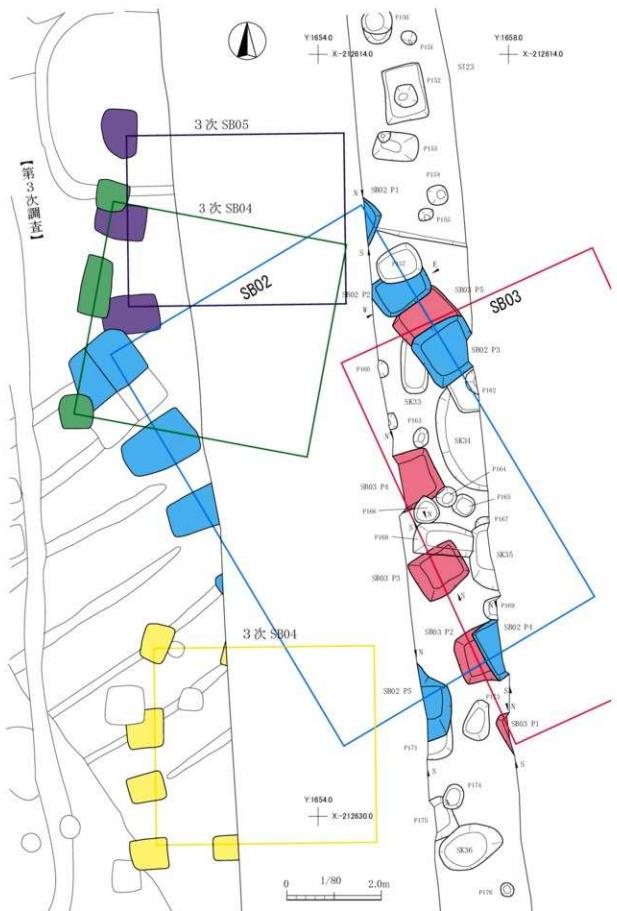
調査区西北部に位置する。遺構の南西部は調査区外へ広がるため、全体の形状規模は不明である。建物の主軸方位は東辺で見た場合、5°東へ傾く。床面は黒褐色粘土ブロックを含む暗褐色砂質シルトを用いた貼床であり、主柱穴は不明ながらも土坑1基とピット2口を確認した。カマド・炉跡、周溝は確認されていない。

遺物は堆積土から非クロコ成形の土師器壺・甕、クロコ成形の土師器甕、須恵器壺・鉢・瓶・甕が出土している。第44図に図示した遺物の特徴から、7世紀末葉から8世紀初頭頃に位置づけられる。

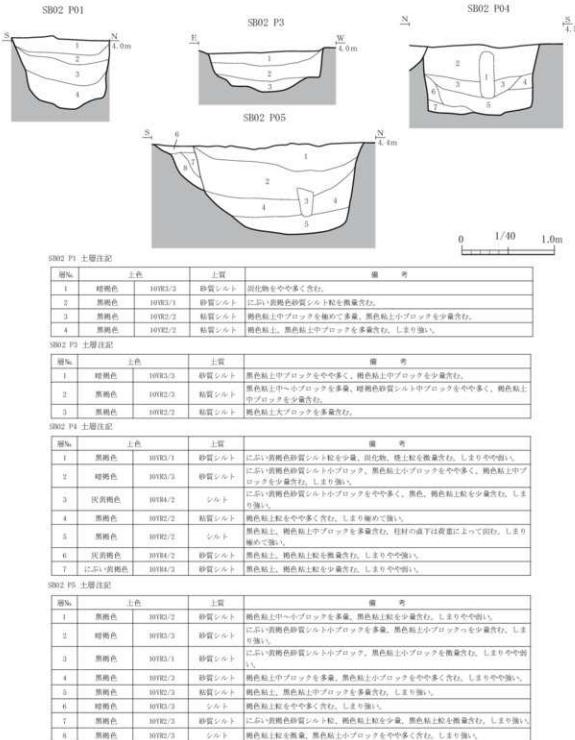


第37図 南側調査区全体図 (1/200)

1. 原遺跡第1次調査(第7地点)



1. 原遺跡第1次調査(第7地点)

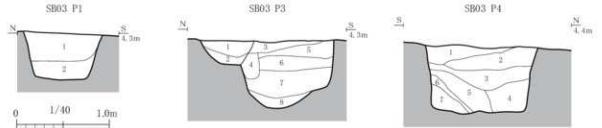


第39図 SB02 土壌断面図



第40図 SB02 出土遺物

1. 原遺跡第1次調査(第7地点)

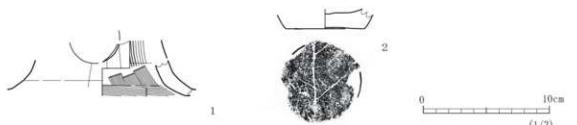


SB03 P1 土層記述		
層番	土色	土質
1	黒褐色	10YR3/2 砂質シルト
2	に高い黄褐色	10YR4/2 砂質シルト

SB03 P3 土層記述		
層番	土色	土質
1	黒褐色	10YR3/2 シルト
2	黄褐色	10YR4/2 砂質シルト
3	黑褐色	10YR3/2 砂質シルト
4	黒褐色	10YR3/2 シルト
5	黒褐色	10YR3/2 シルト
6	黒褐色	10YR3/2 シルト
7	黒褐色	10YR3/2 シルト
8	黒褐色	10YR3/2 砂質シルト

SB03 P4 土層記述		
層番	土色	土質
1	暗褐色	10YR3/2 砂質シルト
2	暗褐色	10YR3/2 砂質シルト
3	暗褐色	10YR3/2 砂質シルト
4	黒褐色	10YR3/2 砂質シルト
5	黒褐色	10YR3/2 砂質シルト
6	黒褐色	10YR3/2 砂質シルト
7	黒褐色	10YR3/2 砂質シルト
8	暗褐色	10YR4/2 砂質シルト
9	黒褐色	10YR3/2 砂質シルト

第41図 SB03



SB03出土遺物観察表

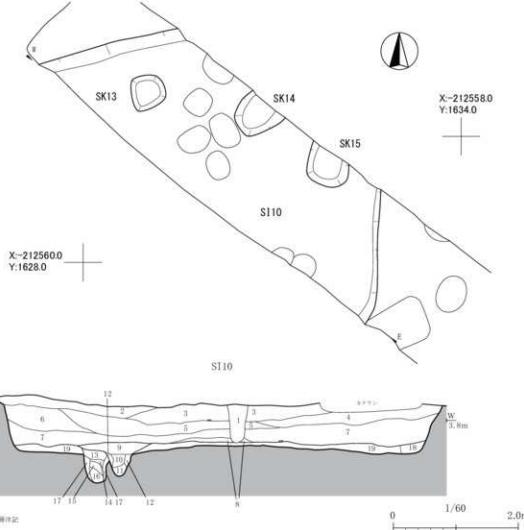
番号	構造・細部	種類	表面	調整			法量(cm)	厚薄 百分比
				外面	内面	口径		
1	SB03 P5	土師器	窓	ヘラケズリ。円形透かし1箇所	ヘラメ・ヘラナデ	—	— (4.5)	1
2	SB02 P2	土師器	便	木葉模	ナダ	—	6.4 (1.6)	1

第42図 SB03出土遺物

表5 南側調査区掘立柱建物属性表

建物名	間数	棟方向	桁行	柱間寸法	測定柱列	梁間 総長 (m)	推定 総長 (m)	柱間寸法	測定 柱列	方向	柱間 総長 (cm)	柱穴 縦幅 (cm)	平面形	備考
SB02	5×3 と推定	南北	9.6	1.8, 2.1	東列	1.9	北列 N-33-#	18	136~96	長方形	SB03・S123 より新			
SB03	4×1 以上	南北	8.76 以上	1.9, 2.1	西列	2.0 以上	北列 N-21-#	25	111~98	方形	SB02 より旧			

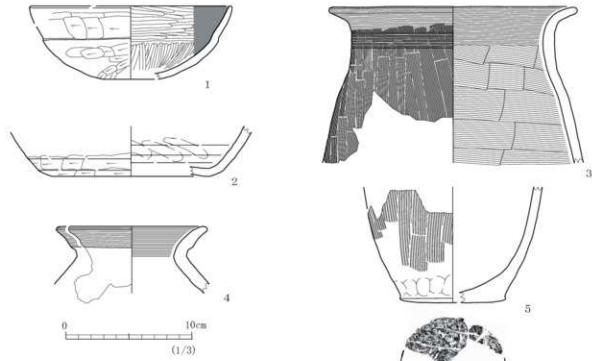
1. 原遺跡第1次調査(第7地点)



層番	土色	土質	備考
1	褐色	10YR4/4 シルト	しまりやや弱い、粘性やや弱い。
2	褐色	10YR4/4 砂質シルト	しまりやや弱い、粘性。
3	褐色	10YR3/2 砂質シルト	しまりやや弱い、粘性。
4	褐色	10YR3/2 シルト	既往の物を多く埋藏され、しまりやや弱い、粘性やや弱い。
5	褐色	10YR4/4 砂質シルト	しまりやや弱い、粘性やや弱い。
6	褐色	10YR4/4 砂質シルト	しまりやや弱い、粘性やや弱い。
7	褐色	10YR4/4 砂質シルト	既往の物を多く埋藏され、しまりやや弱い、粘性やや弱い。
8	に高い褐色	10YR4/3 砂質シルト	既往の物を多く埋藏され、しまりやや弱い、粘性やや弱い。
9	灰オリーブ色	2.5YR3/2 砂質シルト	しまりやや弱い、粘性やや弱い。
10	灰オリーブ色	2.5YR3/2 シルト	しまりやや弱い、粘性やや弱い。
11	褐色	2.5YR4/4 砂質シルト	二かいの既往の物を多く埋藏され、しまりやや弱い、粘性やや弱い。
12	褐色	2.5YR4/4 砂質シルト	しまりやや弱い、粘性やや弱い。
13	灰オリーブ色	2.5YR3/2 シルト	しまりやや弱い、粘性やや弱い。
14	褐色	2.5YR4/4 シルト	しまりやや弱い、粘性やや弱い。
15	褐色	2.5YR4/4 シルト	しまりやや弱い、粘性やや弱い。
16	褐色	2.5YR4/4 シルト	二かいの既往の物を多く埋藏され、しまりやや弱い、粘性やや弱い。
17	褐色	2.5YR3/2 砂質シルト	しまりやや弱い、粘性やや弱い。
18	褐色	2.5YR4/4 砂	しまりやや弱い、粘性弱い。
19	褐色	2.5YR3/4 砂	しまりやや弱い、粘性弱い。

第43図 S110

1. 原遺跡第1次調査(第7地点)



SI10出土遺物観察表

番号	遺構・細部	種別	器形	調整			
				外面	内面	汎量(cm)	写真 番号
1	SI10 堆積土	土師器	鉢	ハラケズリ	ミガキ・黒色処理	16.0 4.5 5.8	11-4
2	SI10 堆積土	須恵器	鉢	体底下半ハラケズリ、底部手持ちハラケズリ	クロナダ・ スピオサエ	— 12.5 (4.0)	
3	SI10 堆積土	土師器	甕	ハケメ・ヨコナダ	ハラナダ・ヨコナダ	19.5 — (12.4)	11-5
4	SI10 堆積土	土師器	甕	ヨコナダ	ヨコナダ	12.0 — (5.3)	11-6
5	SI10 堆積土	土師器	甕	ハケメ・ユビオサエ	ナダ	— 8.4 (9.2)	

第44図 SI10出土遺物

【SI11】(第45図)

調査区北西部に位置する。遺構の北東部は調査区外へ広がるため、全体の形状規模は不明である。建物の主軸方位は西辺で見た場合、5° 西へ傾く。床面は基本土層V層である黑色粘質シルト層を用いたようだ、貼床はみられない。またカマド・炉跡や主柱穴、周溝もみとめられなかった。

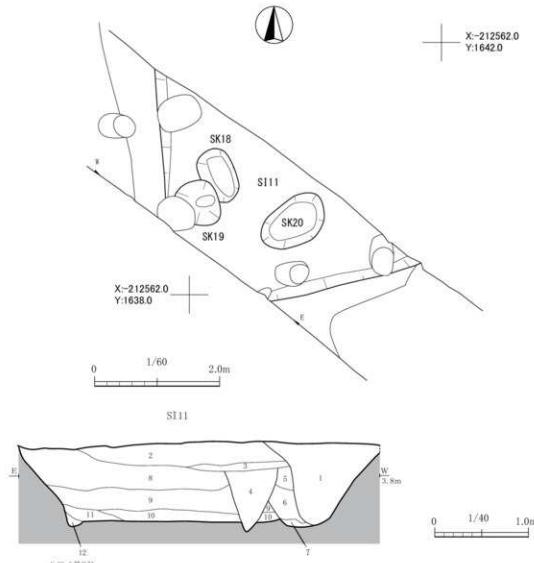
遺物は堆積土中及び床面から非クロコ成形の土師器壺・高杯・甕・須恵器壺・甕が出土している。第46図に図示した遺物の特徴から、8世紀半ば頃に位置づけられる。

【SI12】(第47図)

調査区北西部に位置する。SK21と重複関係にあり、これより古い。遺構の北東部は調査区外へ広がるため、全体の形状規模は不明である。建物の主軸方位は西辺で見た場合、22° 西へ傾く。カマドは北壁中央からやや西寄りに存在し、右袖は調査区外に位置するために部分的な検出に留まるが、両袖とも暗褐色粘質シルトを用いてつくられていた。確認できた範囲での燃焼部は幅55cm、奥行60cmである。煙道部は調査区外に位置するため規模は不明である。床面は基本土層V層である黑色粘質シルト層を用いたようだ、貼床はみられない。また主柱穴、周溝もみとめられなかった。

遺物は堆積土中及び床面から非クロコ成形の土師器壺・高杯・鉢・甕・須恵器壺・蓋・瓶・甕が出土している。このうち第48図5・6の2個体はカマド燃焼部前面からの出土である。第48図に図示した遺物の特徴から、7世紀末葉から8世紀初頭頃に位置づけられる。

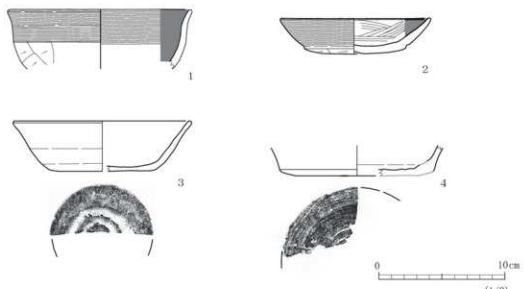
1. 原遺跡第1次調査(第7地点)



第45図 SI11

番号	土色	土質	備考
1	褐色色	砂質シルト	植物遺体を散在含む。しまりやや細かい、粘性でや固い。
2	褐色	砂質シルト	植物遺体を多く散在含む。しまりやや弱い、粘性でや固い。
3	褐色色	砂質シルト	しまりやや強め、粘性やや弱い。
4	褐色	シルト	粘性物、堆土粒をやや多く含む。しまりやや強い、粘性強い。
5	褐色	シルト	しまりやや強め、粘性やや弱い。
6	褐色色	シルト	しまりやや強め、粘性やや弱い。
7	褐色色	砂質シルト	粘性物、堆土粒を多く含む。しまりやや弱い、粘性やや弱い。
8	褐色	シルト	しまりやや強め、粘性やや弱い。
9	褐色色	砂質シルト	しまり弱い、粘性弱い。
10	褐色	シルト	粘性物、堆土粒を散在含む。しまりやや弱い、粘性やや弱い。
11	褐色	砂質シルト	粘性物、堆土粒をやや多く含む。しまりやや弱い、粘性やや弱い。
12	褐色	砂質シルト	粘性物、堆土粒を散在含む。しまりやや弱い、粘性やや弱い。

1. 原遺跡第1次調査（第7地点）



番号	構構・細部	種別	器種	調整		重量 (kg)	厚さ 底径 深さ
				外面	内面		
1	SI11 堆積土	土師器	杯	ハラケズリ・ヨコナデ	ヨコナデ・黒色処理	14.4	— (4.7)
2	SI11 堆積土	土師器	杯	ハラケズリ・ヨコナデ	ミガキ・黒色処理	12.2	— 2.8
3	SI11 堆積土	須恵器	杯	底部ハラ切り・手持ちハラケズリ	ロクロナデ	14.0	8.0 4.0 11.7
4	SI11 堆積土	須恵器	杯	底部削輪ハラケズリ	ロクロナデ	—	9.6 (2.4)

第46図 SI11出土遺物

【SI13】(第37図)

調査区北部に位置する。SD09と重複関係にあり、これより古い。南西隅のみの検出のため、全体の形状規模は不明である。建物の主軸方位は西辺で見た場合、28° 西へ傾く。床面は基本土層V層である黒色粘質シルト層を用いたようで、貼床はみられない。またカマド・炉跡や主柱穴、周溝もみとめられなかった。

遺物は非クロク成形の土師器杯・甕が出土している。第49図に図示した非クロク成形土師器甕の特徴から、8世紀半ばから後半頃に位置づけられる。

【SI14】(第37図)

調査区北部に位置する。SD10と重複関係にあり、これより新しい。東辺の一部のみの検出のため、全体の形状規模は不明である。建物の主軸方位は東辺で見た場合、18° 西へ傾く。床面は基本土層V層である黒色粘質シルト層を用いたようで、貼床はみられない。またカマド・炉跡や主柱穴、周溝もみとめられなかった。

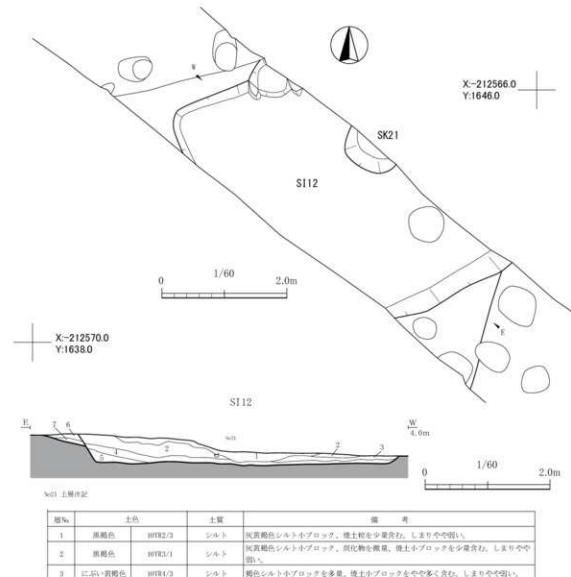
遺物は非クロク成形の土師器杯・甕が出土しているが、図示できるものはなかった。

【SI15】(第50図)

調査区北部に位置する。SI16、SD11などと重複関係にあり、前者より新しく、後者より古い。遺構の東側は調査区外へ広がるため、全体の形状規模は不明であるが、南北は7.8 mを測る。建物の主軸方位は西辺で見た場合、29° 東へ傾く。床面は褐色粘土ブロックなどを用いた貼床であり、主柱穴を1口確認した。なお、周溝はみとめられなかった。

遺物は非クロク成形の土師器杯・高杯・鉢・甕、須恵器杯・高台杯・瓶・甕、そして筒型土製品が堆積土・床面から出土している。第51図に図示した遺物の特徴から7世紀末葉から8世紀初頭頃

1. 原遺跡第1次調査（第7地点）



第47図 SI12

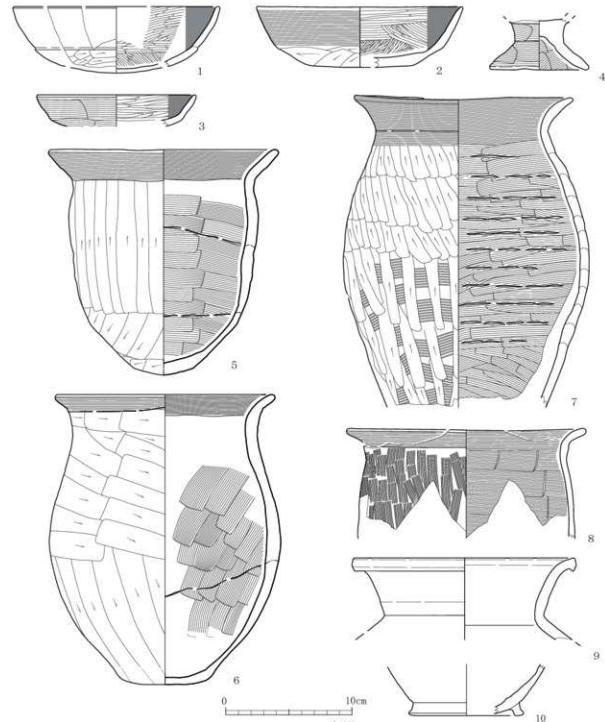
に位置づけられるが、後述するSI16との重複関係から8世紀初頭を中心とした時期と考えたい。

【SI16】(第50図)

調査区北部に位置する。SI15と重複関係にあり、これより古い。遺構の東側は調査区外へ広がるため、全体の形状規模は不明であるが、南北は5.2 m以上となる。建物の主軸方位は西辺で見た場合、37° 西へ傾く。床面は基本土層VI層である暗褐色粘質シルト層を用いたようで、貼床はみられない。またカマド・炉跡や主柱穴、周溝もみとめられなかった。

遺物は非クロク成形の土師器杯・甕、須恵器杯・高台杯・瓶・甕が堆積土・床面から出土している。第52図に図示した遺物の特徴から7世紀末葉から8世紀初頭頃に位置づけられるが、前述のSI15との重複関係から7世紀末葉を中心とした時期と考えたい。

1. 原遺跡第1次調査(第7地点)

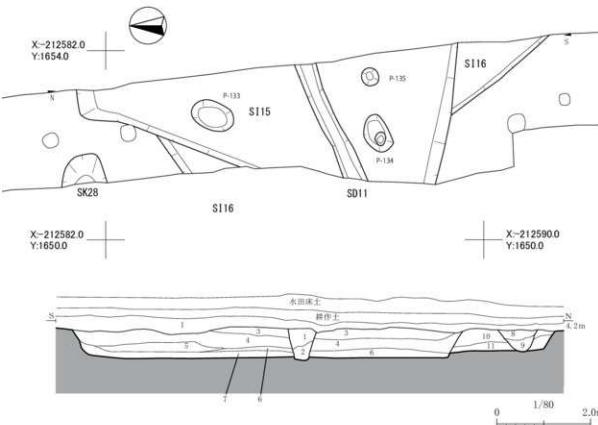


第48図 SI12出土遺物

1. 原遺跡第1次調査(第7地点)



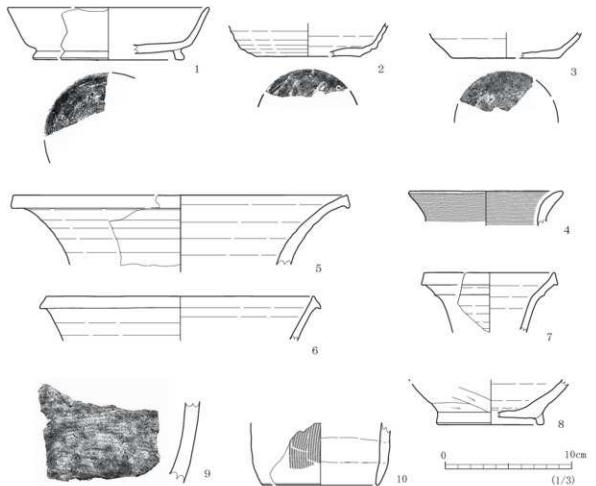
第49図 SI13出土遺物



層号	土色	土質			備考
		上層	中層	下層	
1	暗褐色	10W3/1	2.0	—	にぶい黄褐色シルト小ブロックを含む。焼付陶片微量含む。しまりやや弱い。SD11.
2	暗褐色	10W3/2	2.0	—	焼付陶片小ブロックを含むやや多く含む。しまりやや弱い。SI15.
3	にぶい黄褐色	10W4/1	2.0	—	焼付陶片小ブロックを含むやや多く含む。しまりやや弱い。SI15.
4	暗褐色	10W3/2	2.0	—	地土・焼付陶片を二つ焼付陶片。しまりやや弱い。SI15.
5	暗褐色	10W3/2	2.0	—	地土・焼付陶片を二つ焼付陶片。しまりやや弱い。SI15.
6	暗褐色	10W3/2	2.0	—	地土・焼付陶片を二つ焼付陶片。しまりやや弱い。SI15.
7	暗褐色	10W3/3	粘質シルト	—	焼付陶片シルト・褐色粘土小ブロックを含むや多く含む。地土粒少含む。しまりやや弱い。SI15.
8	にぶい黄褐色	10W4/1	砂質シルト	—	焼付陶片シルト小ブロックを含むや多く含む。しまりやや弱い。
9	暗褐色	10W3/2	2.0	—	にぶい黄褐色シルト小ブロックを多量含む。しまりやや弱い。
10	暗褐色	10W3/2	2.0	—	焼付陶片シルト・小ブロックを含むや多く含む。しまりやや弱い。SI16.
11	黒褐色	10W2/2	粘質シルト	—	にぶい黄褐色シルト・小ブロックを少量含む。しまりやや弱い。SI16.

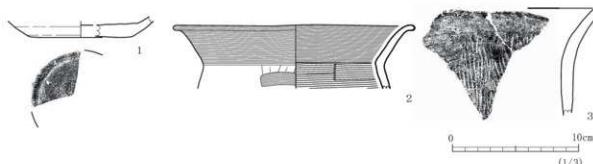
第50図 SI15・16・SD11 土層柱状図

1. 原遺跡第1次調査（第7地点）



番号	遺構・細部	種別	器種	調査			写真番号
				外面	内面	法量(cm)	
1	SI15 堆積土 須恵器	高台环	底部回転ヘラケズリ・高台貼付け	ロクロナダ	—	15.4 11.8 4.1	12-4
2	SI15 堆積土 須恵器	杯	底部下平ヘラケズリ・底面手持ちヘラケズリ	ロクロナダ	—	8.0 (2.6)	
3	SI15 堆積土 須恵器	杯	底部ヘラケズリ・手持ちヘラケズリ・ナダ 墨痕あり	ロクロナダ	—	8.4 (2.0)	
4	SI15 堆積土 土師器	甕	ヨコナダ	ロクロナダ	—	12.0 (2.8)	
5	SI15 堆積土 須恵器	甕	ロクロナダ	ロクロナダ	—	26.4 (6.1)	
6	SI15 堆積土 須恵器	甕	ロクロナダ	ロクロナダ	—	21.0 (3.5)	
7	SI15 堆積土 須恵器	甕	ロクロナダ	ロクロナダ	—	10.4 (4.7)	
8	SI15 堆積土 須恵器	甕	底部下平ヘラケズリ・高台貼付	ロクロナダ	—	8.2 (3.6)	
9	SI15 堆積土 須恵器	甕	平行タタキ	ナダ	—	— (6.4)	
10	SI15 堆積土 生製品	陶型 土製品	ハケメのちナダ	ユビオサエ	—	9.1 (5.0)	

第51図 SI15出土遺物



番号	遺構・細部	種別	器種	調査			写真番号
				外面	内面	法量(cm)	
1	SI16 堆積土 須恵器	IF	底部回転ヘラケズリ・ヘラナダ	ロクロナダ	—	— (1.3)	
2	SI16 堆積土 土師器	甕	ヘラケズリ・ヨコナダ	ヘラナダ・ヨコナダ	—	8.0 (5.0)	
3	SI16 堆積土 土師器	甕	ハケメ・ヨコナダ	ヘラナダ・ヨコナダ	—	— (8.3)	

第52図 SI16出土遺物

【SI17】(第53図)

調査区中央部北寄りに位置する。SI18と重複関係にあり、これより新しい。遺構の西側は調査区外へ広がるため、全体の形状規模は不明であるが、南北は4.0 mを測る。建物の主軸方位は東辺で見た場合、18° 西へ傾く。床面は基本土層VI層である暗褐色粘質シルト層を用いたようで、貼床はみられない。またカマド・炉跡や主柱穴、周溝もみとめられなかった。なお、堆積土の中ほどには多量の炭化物が含まれていた。

遺物は非ロクロ成形の土師器壺・高壺・甕、須恵器瓶・甕のほか、土製支脚、磁石が堆積土及び床面から出土している。第54図に図示した遺物の特徴から、7世紀末葉から8世紀初頭頃に位置づけられる。

【SI18】(第53図)

調査区中央部北寄りに位置する。SI17と重複関係にあり、これより古い。遺構の東西は調査区外へ広がるため、全体の形状規模は不明であるが、南北は5.0 mを測る。建物の北辺で見た場合、82° 東へ傾くため、主軸方位は8° 西へ傾くものと考えられる。カマドは北壁側に焼土や炭化物、そしてカマド構築材と考えられるにぶい黄褐色粘質シルトが広がるが、カマド本体はP138により消失。また煙道部については確認できなかった。床面は基本土層VI層である暗褐色粘質シルト層を用いたようで、貼床はみられない。また主柱穴、周溝もみとめられなかった。

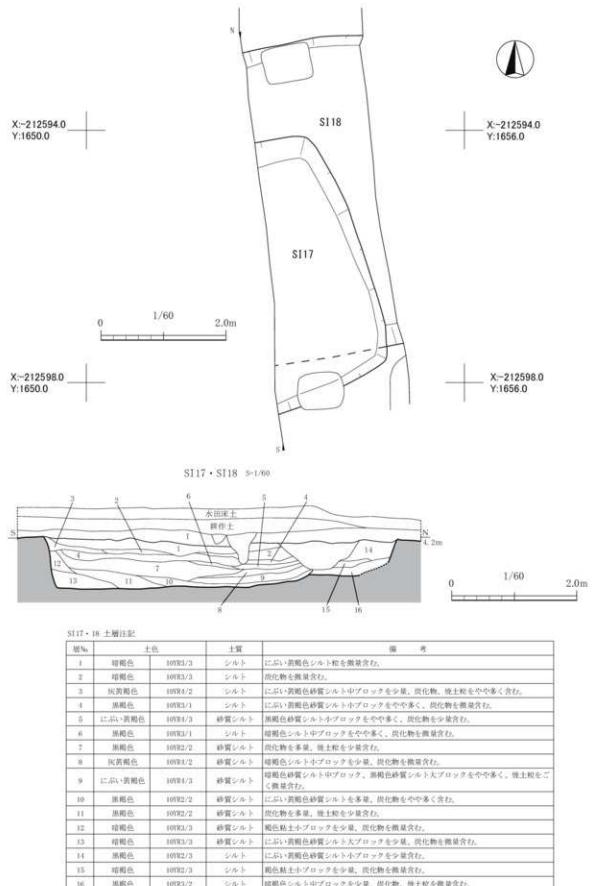
遺物は非ロクロ成形の土師器壺・高壺、須恵器瓶・甕、甕が堆積土及び床面から出土している。第56図に図示した遺物の特徴から、7世紀後半頃に位置づけられる。

【SI19】(第37図)

調査区中央部北寄りに位置する。遺構の東側は調査区外へ広がるため、全体の形状規模は不明であるが、南北は3.0 mを測る。建物の主軸方位は西辺で見た場合、7° 西へ傾く。床面は基本土層VI層である暗褐色粘質シルト層を用いたようで、貼床はみられない。またカマド・炉跡や主柱穴、周溝もみとめられなかった。

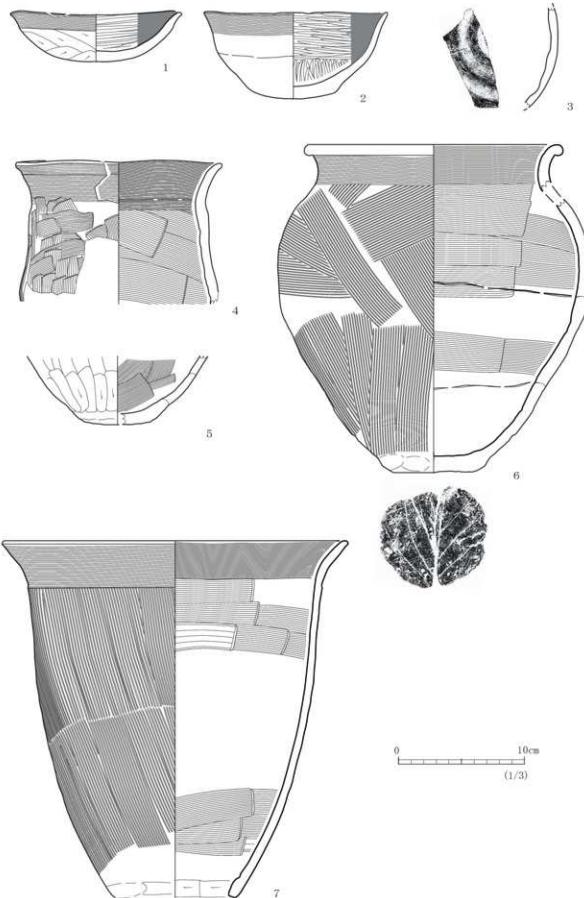
遺物は須恵器甕が堆積土より出土しているが、図示できなかった。

1. 原遺跡第1次調査(第7地点)



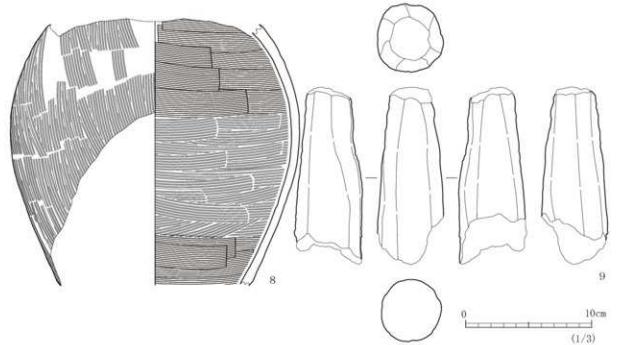
第53図 SII17・18

1. 原遺跡第1次調査(第7地点)



第54図 SII17出土遺物(1)

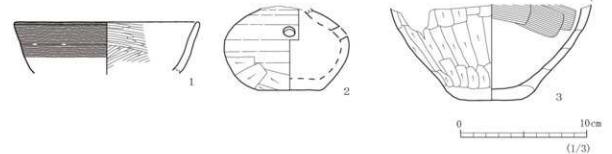
1. 原遺跡第1次調査（第7地点）



SI17出土遺物観察表

番号	遺構・細部	種別	器種	調整		法量 (cm)	写真番号
				外面	内面		
1	SI17 堆積土	土師器	壺	ヘラケズリ・ヨコナヂ	ミガキ・黒色処理	13.6	—
2	SI17 堆積土	土師器	壺	不明瞭なヘラナヂ	ミガキ・黒色処理	14.5	—
3	SI17 堆積土	土師器	瓶	ヨコナヂ・自然釉付着	ミガキ	—	(7.8)
4	SI17 堆積土	土師器	甕	ヘラナヂ・ヨコナヂ	ヨコナヂ	16.2	— (11.3)
5	SI17 堆積土	土師器	甕	ヘラケズリ	ヘラナヂ	—	5.2 (5.5)
6	SI17 堆積土	土師器	甕	ハケメ・ヨコナヂ	ヘラナヂ・ヨコナヂ	20.0	6.4
7	SI17 堆積土	土師器	甕	ハケメ・ヨコナヂ・ユビオサエ	ヘラナヂ・ヨコナヂ・ケリ	27.0	— 28.8 13-1
8	SI17 堆積土	土師器	甕	ハケメ	ヘラナヂ	—	— (20.8)
9	SI17 堆積土	土製品	支脚	ナヂ	—	(14.1)	5.2 5.3

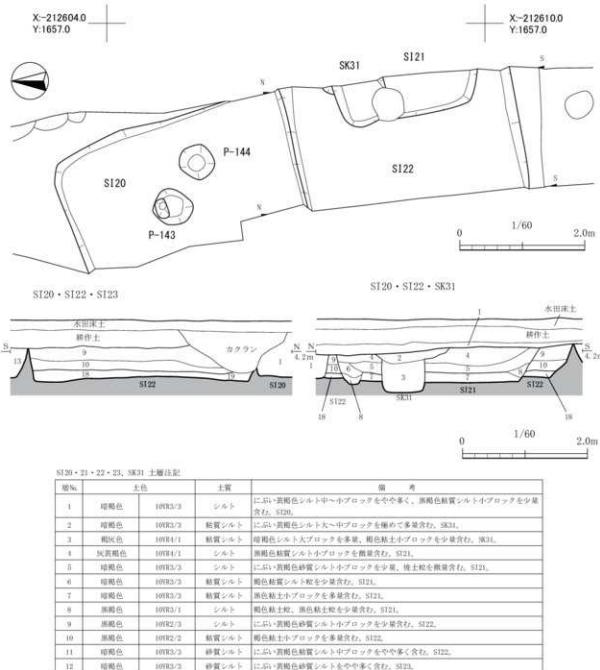
第55図 SI17出土遺物（2）



SI18出土遺物観察表

番号	遺構・細部	種別	器種	調整		法量 (cm)	写真番号
				外面	内面		
1	SI18 堆積土	土師器	壺	ヨコナヂ	ミガキ	14.6	— (4.2)
2	SI18 堆積土	土師器	甕	下平ヘラケズリ・底部ヘラケズリ	ミガキ	—	5.0 (6.1) 13-2
3	SI18 堆積土	土師器	甕	ヘラケズリ	ヘラナヂ	—	5.0 (7.6)

第56図 SI18出土遺物



SI20・21・22・23, SK31 土層注記

層No.	土色	土質	備考	
			上段	下段
1	暗褐色	砂質シルト	シルト	[記述]
2	褐色	砂質シルト	シルト	[記述]
3	褐色	砂質シルト	シルト	[記述]
4	灰褐色	シルト	シルト	[記述]
5	褐色	シルト	シルト	[記述]
6	褐色	砂質シルト	シルト	[記述]
7	褐色	砂質シルト	シルト	[記述]
8	褐色	シルト	シルト	[記述]
9	褐色	シルト	シルト	[記述]
10	褐色	シルト	シルト	[記述]
11	褐色	砂質シルト	シルト	[記述]
12	褐色	砂質シルト	シルト	[記述]

第57図 SI20・21・22

【SI20】(第57図)

調査区中央部に位置する。SI22と重複関係にあり、これより新しい。遺構の西側は調査区外へ広がるため、全体の形状規模は不明であるが、南北は3.8mを測る。建物の主軸方位は東辺で見た場合、20°西へ傾く。床面は基本土層Ⅵ層である暗褐色粘質シルト層を用いたようで、貼床はみられない。カマドは未確認であるが、遺構北側の床面に焼土・炭化物がみられることから、北壁中央付近に存在していた可能性がある。主柱穴、周溝はみとめられなかった。

遺物は非クロコ成形の土師器壺・鉢・甕、須恵器壺・甕のほか、繩文土器が堆積土より出土しているが、図示できるものはなかった。

1. 原遺跡第1次調査(第7地点)

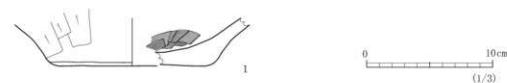
【SI21】(第57図)

調査区中央部に位置する。SI20と重複関係にあり、これより新しい。遺構の東側は調査区外へ広がるため、全体の形状規模は不明であるが、南北は3.2mを測る。建物の主軸方位は西辺で見た場合、7°西へ傾く。床面は黒色粘土ブロックを多く含んだ暗褐色粘質シルトの貼床であり、平面的には明瞭に確認できなかったが土層断面の観察から北壁沿いには周溝が巡る可能性が考えられる。なお、カマド・炉跡や支柱穴はみとめられなかった。遺物は出土していない。

【SI22】(第57図)

調査区中央部に位置する。SI20・22と重複関係にあり、これらより古い。遺構の東西は調査区外へ広がるため、全体の形状規模は不明であるが、南北は3.6mを測る。建物の南辺で見た場合、70°東へ傾くため、主軸方位は20°西へ傾くものと考えられる。床面は暗褐色粘質シルトの貼床であるが、カマド・炉跡や支柱穴、周溝はみとめられなかった。

遺物は覆土中からクロコ成形の土師器壺や底部系切未調整の須恵器壺が出土しているが、床面から出土した非クロコ成形の土師器壺(第58図1)が本遺構の年代を示すと思われる。この土師器壺は底部のみの出土であるが、底部の厚みが少なく、また胴部にかけての立ち上がりも緩やかであることから、6世紀末葉から7世紀初頭頃の年代観と推定したい。



番号	遺構・細部	種別	器種	調整			写真番号
				外面	内面	口径 底径 膜高	
1	SI22 床面	土師器	壺	ヘラケズリ	ヘラナダ	— 11.8 (3.8)	

第58図 SI22出土遺物

【SI23】(第59図)

調査区中央部に位置する。SB02、SK32などと重複関係にあり、これらより古い。遺構の東西は調査区外へ広がるため、全体の形状規模は不明であるが、南北は6.9mを測る。建物の北辺で見た場合、真北方向に直交することから、東西辺での主軸方位はほぼ真北方向であると考えられる。床面は暗褐色粘質シルトの貼床であるが、カマド・炉跡や支柱穴、周溝はみとめられなかった。

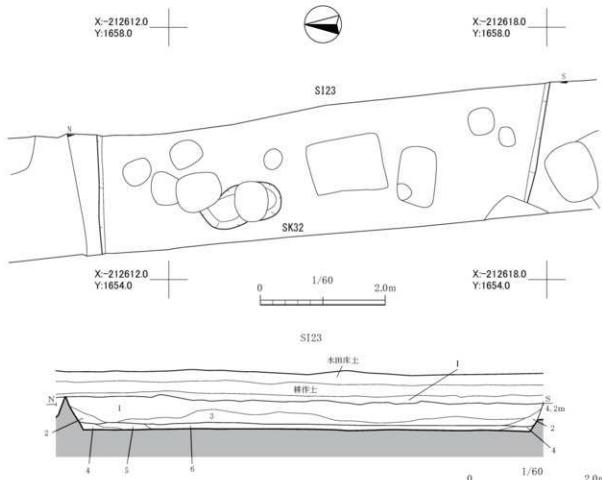
遺物は非クロコ成形の土師器壺・高杯・甕、須恵器円面鏡・瓶・甕が堆積土中より出土している。第60図1の円面鏡は床面より出土したもので、鏡部の外縁部には2条の突帯があり、また脚部には長方形の透孔が巡る。鏡部の内面には当具痕がみられる。胎土の特徴から美濃須恵窯群の製品である可能性が高い。SB02との重複関係から7世紀末葉を中心とした時期と位置付けたい。

【SI24】(第61図)

調査区南部に位置する。SA01、SK41などと重複関係にあり、これらより古い。遺構の東側は調査区外へ広がり、また南側はSA01に切られるため、全体の形状規模は不明である。建物の主軸方位は西辺で見た場合、8°西へ傾く。床面は暗褐色粘質シルトの貼床であり西壁及び北壁沿いに周溝がみられる。カマド・炉跡や支柱穴はみとめられなかった。

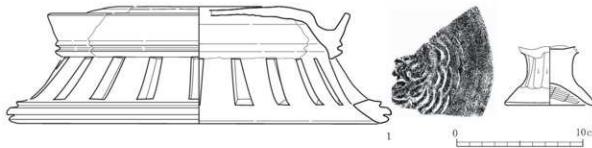
遺物は非クロコ成形の土師器壺と須恵器壺が出土しているが、図示できるものはなかった。

1. 原遺跡第1次調査(第7地点)



SI19 土層注記			
層番	土色	土質	備考
1	暗褐色	10YR3/3 砂質シルト	にぶい黄褐色砂質シルトをや多く含む。
2	暗褐色	10YR3/3 砂質シルト	黒褐色粘質シルト純物、埴土粒を少許含む。
3	暗褐色	10YR3/3 砂質シルト	化物、埴土粒をごく少く含む。
4	黒褐色	10YR2/3 粘質シルト	暗褐色小石ブロックをやや多く、埴土粒を無量含む。
5	褐色	10YR4/4 砂質シルト	化物を少々、埴土粒をや多く含む。しまりやや強い。
6	暗褐色	10YR3/3 砂質シルト	化物を少々、埴土粒をや多く含む。しまりやや強い。

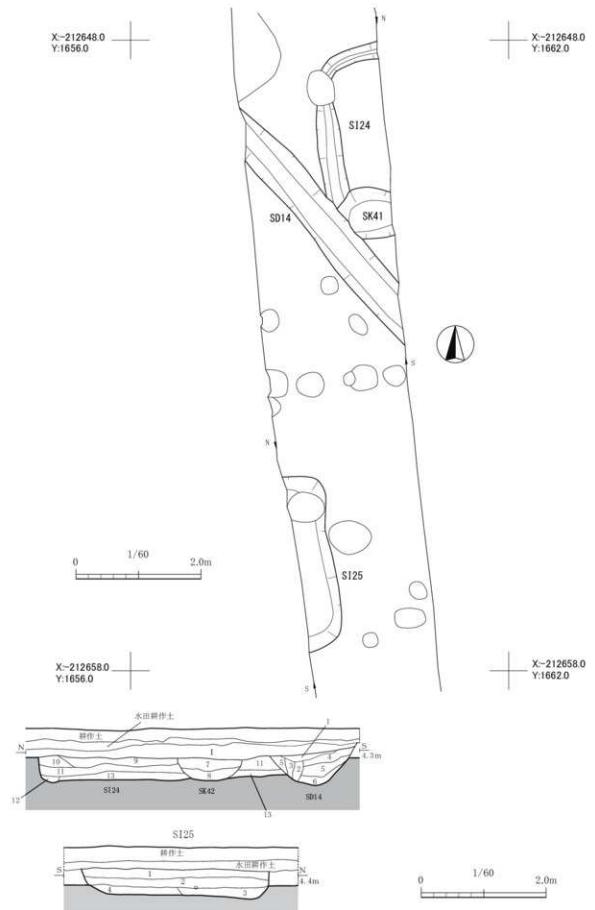
第59図 SI23



番号	遺構・細部	種別	器種	調整			写真番号
				外面	内面	口径 底径 膜高	
1	SI23 床面	須恵器	円面鏡	脚部に長方形透孔、自然縫。	鏡部内面に同心円状の当具痕	外縁径 脚部径 8.9	13-3 ~6
2	SI23 床面	土師器	高杯	ヘラケズリ	ヘラナダ	— 7.0 (4.6)	13-7

第60図 SI23出土物

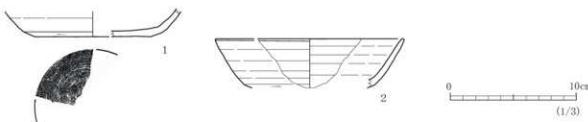
1. 原遺跡第1次調査(第7地点)



第61図 S124・25

S124・SK41・SD14 土層注記		
層番	土色	土質
1	にじみ 黄褐色	砂質シルト 塊状色シルト小ブロックを少量。他土粒をごく微量含む。しまりやや弱い。
2	暗褐色	砂質シルト 塊状色をやや多く、塊状色シルト小ブロックを少量含む。しまり弱い。
3	暗褐色	砂質シルト 塊状色シルト小ブロックを少量含む。しまりやや弱い。
4	暗褐色	砂質シルト 塊状色シルト小ブロックを多量。他土粒ごく微量含む。しまりやや弱い。
5	暗褐色	砂質シルト 塊状土小ブロックを少量。にじみ黄褐色シルト小ブロックを微量含む。しまり強い。
6	にじみ 黄褐色	砂質シルト 黒褐色土小ブロックを微量含む。しまり強い。
7	黒褐色	砂質シルト 特に粘土を微量含む。しまりやや弱い。
8	黒褐色	砂質シルト 黒褐色土小ブロックを少量。斑状色を微量含む。しまりやや弱い。
9	にじみ 黄褐色	砂質シルト にじみ黄褐色シルト小ブロックをやや多く含む。しまりやや弱い。
10	暗褐色	砂質シルト にじみ黄褐色シルト小ブロックを少量。斑状色を微量含む。しまりやや弱い。
11	にじみ 黄褐色	砂質シルト 黒褐色粘土小ブロックをやや多く。後土粒ごく微量含む。しまりやや弱い。
12	暗褐色	砂質シルト 黒褐色土小ブロックを多量含む。しまりやや弱い。
13	黒褐色	砂質シルト 黒褐色土小ブロックを多量含む。斑状色を微量含む。しまり強めで強い。

SD14 土層注記		
層番	土色	土質
1	黒褐色	砂質シルト 黒褐色土小ブロックを微量含む。しまりやや弱い。
2	黒褐色	砂質シルト 特に粘土を微量含む。しまりやや弱い。
3	黒褐色	砂質シルト にじみ黄褐色シルト小ブロックを少量。斑状色を多量。細胞鉄を微量含む。しまり弱い。
4	黒褐色	砂質シルト 黒褐色粘土小ブロックを少量含む。しまり強めで強い。



S125出土遺物観察表								
番号	構造・細部	種別	器種	調整				
				外面	内面			
1	S125 堆積土 水田器	壺	壺	体部下端へラケズリ。 底部回転へラケズリ	ロクロナデ	—	9.2 (2.0)	写真番号
2	S125 堆積土 水田器	壺	壺	体部下端へラケズリ	ロクロナデ	15.0	— (3.9)	

第62図 S125出土遺物

【S125】(第61図)

調査区南部に位置する。遺構の西側は調査区外へ広がるため、全体の形状規模は不明であるが、南北は2.8mを測る。建物の主軸方位は東辺で見た場合、8° 西へ傾く。床面は基本土層VI層である暗褐色粘質シルト層を用いたようで、貼床はみられない。またカマド・炉跡や主柱穴、周溝もみとめられなかった。

遺物は堆積土上層よりロクロ成形の土師器甕が出土しているが、堆積土下層及び床面からは非ロクロ成形の土師器壺・甕と須恵器壺が出土している。このうち第62図に図示した須恵器壺の特徴から、8世紀前半頃に位置づけられる。

1. 原遺跡第1次調査(第7地点)

1. 原遺跡第1次調査(第7地点)

表6 南側調査区堅土建物跡属性表

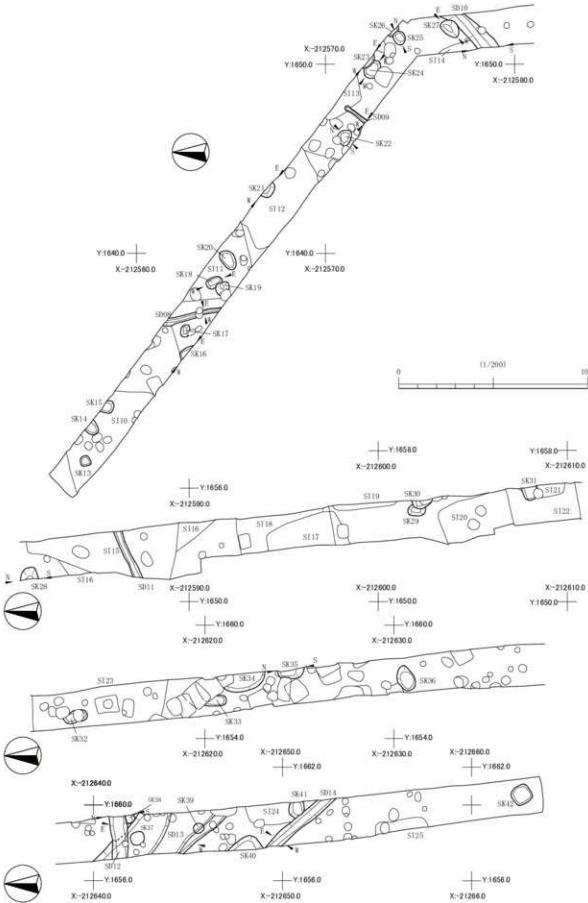
建物名	平面形 裏面(正面)	面積(m ²)	軸方位	床	カマド	カマド 構造材	構造部	柱穴	周縁	出土遺物	時期	備考
SI10 不明	不明× 不明	N-5-E	貼床	-	-	-	-	-	東のみ	非クロコ土壌器杯・甕、 須恵器杯・瓶・甕	7世紀末葉 ~8世紀初頭	SK15より旧
SI11 不明	不明× 不明	N-5-W	地山	-	-	-	-	-	なし	非クロコ土壌器杯・高 輪・鉢・甕、甕	8世紀半ば	SK18~20より旧
SI12 不明	不明× 4.50	N-22-W	地山	北壁 西寄り	粘質 シルト	不明	なし	なし	非クロコ土壌器杯・高 輪・鉢・甕、須恵器杯・甕 蓋・瓶・甕、 石製模造品	7世紀末葉 ~8世紀初頭	SK21より旧	
SI13 不明	不明× 不明	N-28-W	地山	-	-	-	-	-	なし	非クロコ土壌器杯・甕	8世紀半ば ~後半	SD09より旧
SI14 不明	不明× 不明	N-18-W	地山	-	-	-	-	-	なし	非クロコ土壌器杯・甕	SD10より旧	
SI15 不明	不明× 7.85	N-29-E	貼床	-	-	-	-	-	なし	非クロコ土壌器杯・甕、 輪・鉢・甕、須恵器杯・甕 蓋・瓶・甕	SD11より旧、 SD16より新	
SI16 不明	不明× 5.20 (L3)	N-37-W	地山	-	-	-	-	-	なし	非クロコ土壌器杯・高 輪・鉢・甕、須恵器杯・甕 蓋・瓶・甕、 西台杯	7世紀末葉	SI15より旧
SI17 不明	不明× 4.04	N-18-W	地山	-	-	-	-	-	なし	非クロコ土壌器杯・高 輪・鉢・甕、須恵器杯・甕 蓋・瓶・甕、 土器文様、瓶瓦	7世紀初頭 ~8世紀初頭	SI18より新
SI18 不明	不明× 6.00	(N-8-W)	地山	北壁 中央か シルト	粘質 シルト	不明	なし	なし	非クロコ土壌器杯・甕、 須恵器杯・瓶・甕、 鐵鑄?	7世紀 後半	SI17より旧	
SI19 不明	不明× 3.00	N-7-W	地山	-	-	-	-	-	なし	須恵器甕		
SI20 不明	不明× 3.82	N-20-W	地山	北壁 中央か シルト	不明	不明	なし	なし	非クロコ土壌器杯・鉢・ 甕、須恵器杯・甕、 鐵鑄・土器			
SI21 不明	不明× 不明	N-7-E	貼床	-	-	-	-	-	なし	非クロコ土壌器杯・甕、 須恵器杯・甕、 鐵鑄?	7世紀初頭 以降	SK31より旧、 SI22より新
SI22 不明	不明× 3.62	(N-20-W)	貼床	-	-	-	-	-	なし	非クロコ土壌器杯・甕、 須恵器杯・甕、 鐵鑄?	6世紀末葉 ~7世紀初頭	SI21・SK31より旧
SI23 不明	不明× 6.90	真北	貼床	-	-	-	-	-	なし	非クロコ土壌器杯・高 輪・甕、須恵器甕・瓶、 甕	7世紀	SD02より旧
SI24 不明	不明× 3.30 (L3)	N-8-W	貼床	-	-	-	-	-	なし	非クロコ土壌器杯・須 恵器甕・甕	SD14・SK41より旧	
SI25 不明	不明× 2.90	N-8-W	地山	-	-	-	-	-	なし	非クロコ土壌器杯・甕	8世紀前半	

・木材埋跡

[SA01] (第63・64図)

調査区南部に位置する。SI24と重複関係にあり、これより新しい。遺構の東側は調査区外へ広がるため不明だが、総長3.7mに渡って検出した。主軸方位は40°西に傾いている。検出面での規模は上幅64cm、下幅24cm、確認面からの深さは22cmを測る。断面形状はU字状を呈する。木材はすべて抜き取りが行われているが、痕跡から直径15~18cmの木材を用いていたことが判明した。堆積土は4層に分層でき、1・2層が抜き取り痕跡、3層が木材を抜き取った後に流入した土、4層が掘方理土である。なお、第2・3次調査では本遺構の西側延長部分が確認されており、総延長は49mを測る。

遺物は堆積土中から非クロコ成形の土師器甕が出土しているが、図示はできなかつた。



第63図 南側地区的溝跡・土坑

1. 原遺跡第1次調査（第7地点）

・溝跡

【SD08】（第63・64図）

調査区北西部に位置する。調査区外へ延びるため全長は不明であるが、総長2.9mに渡って検出した。主軸方位は15°西に傾いている。検出面での規模は上幅32cm、下幅14cm、確認面からの深さは10cmを測る。断面形状はU字状を呈する。堆積土は2層に分層でき、すべて自然堆積である。

遺物は堆積土中から非クロコ成形の土師器壺・鉢、ロクロ成形の土師器壺、須恵器壺・甕が出土している。第65図に図示した遺物の特徴から、8世紀末葉から9世紀初頭頃に位置づけられる。

【SD09】（第63・64図）

調査区北西部に位置する。SI13と重複関係にあり、これより新しい。調査区外へ延びるため全長は不明であるが、総長1.3mに渡って検出した。主軸方位は36°東に傾いている。検出面での規模は上幅22cm、下幅10cm、確認面からの深さは10cmを測る。断面形状はU字状を呈する。堆積土は2層に分層でき、すべて自然堆積である。

遺物は堆積土中から非クロコ成形の土師器壺が出土しているが、図示はできなかった。

【SD10】（第63・64図）

調査区北部に位置する。SI14、SK27と重複関係にあり、前者より新しく、後者より古い。調査区外へ延びるため全長は不明であるが、総長2.2mに渡って検出した。主軸方位は50°東に傾いている。検出面での規模は上幅96cm、下幅38cm、確認面からの深さは50cmを測る。断面形状はU字状を呈する。堆積土は4層に分層でき、1層が人為的堆積、2~4層は自然堆積である。

遺物は堆積土中から非クロコ成形の土師器壺・鉢、甕、須恵器壺・甕が出土しているが、図示はできなかった。

【SD11】（第63・64図）

調査区北部に位置する。SI15と重複関係にあり、これより新しい。調査区外へ延びるため全長は不明であるが、総長2.6mに渡って検出した。主軸方位は66°東に傾いている。調査区東壁の土層観察での規模は上幅60cm、下幅18cm、掘り込み面からの深さは64cmを測る。断面形状は逆台形を呈する。堆積土は2層に分層でき、すべて自然堆積である。

遺物は堆積土中から非クロコ成形の土師器壺が出土しているが、図示はできなかった。

【SD12】（第63・64図）

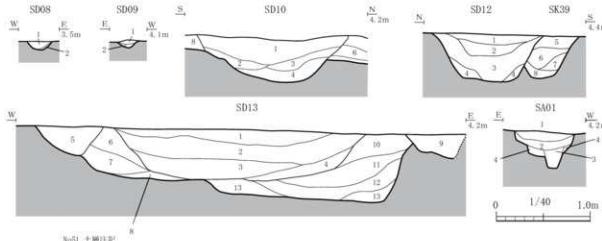
調査区南部に位置する。SD13・SK38と重複関係にあり、これらより新しい。調査区外へ延びるため全長は不明であるが、総長2.2mに渡って検出した。主軸方位は84°東に傾いている。検出面での規模は上幅90cm、下幅52cm、確認面からの深さは50cmを測る。断面形状は逆台形を呈する。堆積土は4層に分層でき、すべて自然堆積である。なお、最上層には人頭大の礫が複数混入していた。

遺物は堆積土中から須恵器壺・瓶、甕が出土している。第65図2・3に図示した壺の特徴から、8世紀末葉から9世紀初頭頃に位置づけられる。

【SD13】（第63・64図）

調査区南部に位置する。SD12をはじめとする土坑・ピットなどと重複関係にあり、これらより古い。調査区外へ延びるため全長は不明であるが、総長2.7mに渡って検出した。堆積土の観察及び底面の形状から本遺構は大別してA~Cの3時期の変遷が考えられるが、中央に最も新しいA段階の大溝が存在しており、B・C段階の新旧関係については明確ではない。なお、第3次調査では本遺構の西側

1. 原遺跡第1次調査（第7地点）



No.1 土層注記		
層番	土色	土質
1	黒褐色	10YR3/2 シルト
2	黒褐色	10YR2/2 シルト

No.1 土層注記		
層番	土色	土質
1	褐色	10YR4/6 砂
2	褐色	10YR4/6 砂質シルト

No.1 土層注記		
層番	土色	土質
1	暗褐色	10YR3/3 シルト
2	暗褐色	10YR2/3 砂質シルト
3	暗褐色	10YR3/1 シルト
4	暗褐色	10YR2/2 砂質シルト

3. 断面セクション No.1 土層注記

断面セクション No.1 土層注記		
層番	土色	土質
1	灰褐色	10YR3/3 シルト
2	灰褐色	10YR2/3 砂質シルト
3	暗褐色	10YR3/3 砂質シルト
4	暗褐色	10YR3/1 シルト
5	暗褐色	10YR3/3 シルト
6	暗褐色	10YR2/3 砂質シルト
7	暗褐色	10YR3/1 砂質シルト
8	暗褐色	10YR3/3 シルト

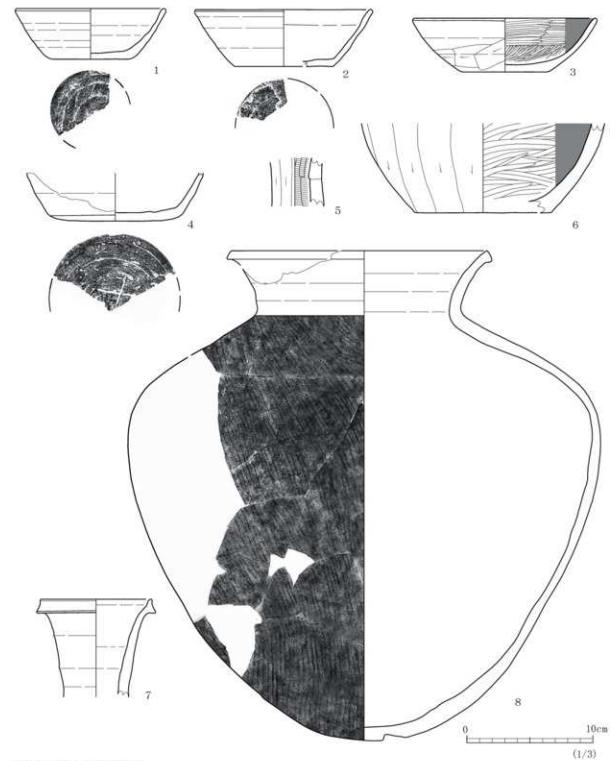
4. 土層注記

4. 土層注記		
層番	土色	土質
1	黒褐色	10YR3/2 シルト
2	灰褐色	10YR4/4 砂質シルト
3	暗褐色	10YR3/3 砂
4	灰褐色	10YR4/4 砂質シルト
5	暗褐色	10YR3/3 シルト
6	黒褐色	10YR3/1 シルト
7	暗褐色	10YR3/3 シルト
8	黒褐色	10YR2/2 砂質シルト
9	黒褐色	10YR3/1 シルト
10	黒褐色	10YR3/2 シルト
11	黒褐色	10YR2/3 砂質シルト
12	黒褐色	10YR2/2 砂質シルト
13	黒褐色	10YR4/4 砂土

5. 土層注記		
層番	土色	土質
1	黒褐色	10YR3/2 シルト
2	黒褐色	10YR2/1 砂質シルト
3	黒褐色	10YR3/2 シルト
4	黒褐色	10YR2/2 シルト

第64図 南側地区溝跡断面図

1. 原遺跡第1次調査(第7地点)



南側地区溝跡出土遺物観察表

番号	遺構・細部	種別	剖面	調査			付量(cm)	分類 参考 番号
				外観	内面	日経 底径 深さ		
1	S008	須恵器	H	ハラギリ、手持ちハラケズリ	ロクロナダ	11.6 6.3 4.0 15-3		
2	S012	須恵器	H	回転垂切・外周回転ハラケズリ	ロクロナダ	14.0 7.8 4.5		
3	S012	土師器	H	体部・底部ハラケズリ・ヨコナダ	ミガキ・黒色処理	14.5 6.9 4.3 15-4		
4	S008	須恵器	H	回転ハラケズリ、「×」の縫割	ロクロナダ	— 7.5 (3.8)		
5	S013	土師器	H	ハラケズリ	ミナダ	— — (3.9)		
6	S008	土師器	H	ハラケズリ	ミガキ・黒色処理	— 10.8 (7.0)		
7	S012	須恵器	H	ロクロナダ	ミナダ	8.8 — (7.8)		
8	S012	須恵器	H	平行タタキ・ロクロナダ	当具瓶・ナダ・オサニ	20.8 — 48.0 15-5		

第65図 南側地区溝跡出土遺物

1. 原遺跡第1次調査(第7地点)

延長部分が確認されており、総延長は48 mを測る。

A段階は上幅212 cm、下幅156 cm、確認面からの深さは42 cmを測る。断面形状は皿形を呈し、主軸方位は54° 西に傾いている。堆積土は4層に分層でき、すべて自然堆積であるが、堆積土で注目される点としては下層の2~4層が砂、もしくは砂質感が強い砂質シルトであることがある。調査地周辺でこのような堆積土をもつ遺構は、これまでのところ本遺構の西側延長線である第3次調査SD11のみであり、極めて短期間にほぼ均質な多量の土砂が流入したことをうかがわせる。この後、もしくは砂質シルトの供給源としては調査地の南側約120 m付近を東流する阿武隈川とみられ、おそらくは洪水などによって埋没した可能性が高い。

A段階大構の北側に位置するB段階は、上幅は不明であるが、下幅は137 cm、確認面からの深さは56 cmを測る。断面形状は逆台形、主軸方位は40° 西に傾くとみられる。堆積土は4層に分層でき、すべて自然堆積である。

A段階大構の南側に位置するC段階は、上幅・下幅とも不明であるが、確認面からの深さは44 cmを測る。断面形状・主軸方位とも不明である。堆積土は3層に分層でき、すべて自然堆積である。

遺物は堆積土中から非ロクロ成形の土師器高杯・甕、須恵器甕が出土しているが、いずれも堆積土上層からの出土であり、本遺構の年代を示すものではない。なお、第3次調査SD11は南小屋式の土師器を含む小溝状遺構群より新しく、6世紀末葉~7世紀前半頃と推定される窪穴建物より古いことを確認しているが、さらに詳細な年代推定は今後の調査の課題となる。

表7 南側調査区溝跡・木材塙属性表

建物名	検出長 (m)	断面形	上幅 (cm)	下幅 (cm)	深さ (cm)	主軸 方位	堆積土	出土遺物	時期	備考
SD08	南北 2.96	U字	32	14	10	N-15-W	2層 自然堆積	ロクロ土師器坪、須恵器坪・甕	8世紀未葉 ~	
SD09	南北 1.34	U字	22	10	10	N-36-E	2層 自然堆積	ロクロ土師器甕	8世紀未葉 ~	
SD10	東西 2.24	U字	96	38	50	N-50-E	4層 自然・人為	非ロクロ土師器坪・甕・甕、須恵器坪・甕	8世紀初頭 SK27より旧、 SI14より新	
SD11	東西 2.60	逆台形	38	18	14	N-66-E	1層 人為埋土	非ロクロ土師器甕	SI13より新	
SD12	東西 2.18	逆台形	90	52	50	N-84-E	4層 自然・人為	須恵器坪・甕、鐵石	8世紀未葉 ~	SD13・SK38より新
SD13	東西 2.76	A: 直形 B: 頂部 C: 4段	A: 212 B: 178 C: 4段	A: 156 B: 137 C: 4段	A: 42 B: 56 C: 40	N-38-W	A: 4層・自 然・人為 B: 頂部 C: 4段	非ロクロ土師器高杯・甕	6世紀末葉以前 SD12より旧	
SA01	東西 3.70	U字	64	24	22	N-39-E	4層 人為埋土	非ロクロ土師器・甕		SI24・SK41より新

・土坑

【SK16】(第63・66図)

調査区北西部に位置する。SI10と重複関係にあり、これより古い。南側は調査区外へ広がるため不明な点があるが、平面形状は長方形と考えられる。規模は、長軸・短軸は不明だが、確認面からの深さは32 cmであり、断面形状は逆台形を呈する。堆積土は3層に分層でき、すべて人為的埋土である。

遺物は非ロクロ成形の土師器甕が堆積土中より出土しているが、図示できなかつた。

【SK18】(第63・66図)

調査区北西部に位置する。P103と重複関係にあり、これより古い。平面形状は楕円形と考えられる。

1. 原遺跡第1次調査（第7地点）

規模は長軸 64 cm、短軸は 46 cm を測る。確認面からの深さは 30 cm であり、断面形状は逆台形を呈する。堆積土は 3 層に分層でき、すべて人為的埋土である。

遺物は非クロコ成形の土師器壺・甕、土製の紡錘車（第 67 図 4）が堆積土中より出土している。

【SK21】（第 63・66 図）

調査区北西部に位置する。SI12 と重複関係にあり、これより新しい。北側は調査区外へ広がるため平面形状、及び長軸は不明である。短軸は 92 cm、確認面からの深さは 22 cm であり、断面形状は U 字状を呈する。堆積土は 3 層に分層でき、すべて人為的埋土である。遺物は出土していない。

【SK22】（第 63・66 図）

調査区北西部に位置する。P116・117・118・121 と重複関係にあり、P116・117 より古く、P118・121 より新しい。平面形状は不整形である。規模は長軸 82 cm、短軸は 68 cm を測る。確認面からの深さは 20 cm であり、断面形状は皿形を呈する。堆積土は 3 層に分層でき、すべて人為的埋土である。

遺物は非クロコ成形の土師器甕が堆積土中より出土しているが、図示できなかった。

【SK23】（第 63・66 図）

調査区北西部に位置する。SK24 と重複関係にあり、これより新しい。北側は調査区外へ広がるため平面形状、規模は不明である。確認面からの深さは 18 cm であり、断面形状は皿形を呈する。堆積土は 3 層に分層でき、すべて人為的埋土である。

遺物は非クロコ成形の土師器甕が堆積土中より出土しているが、図示できなかった。

【SK24】（第 63・66 図）

調査区北西部に位置する。SK23、P124 と重複関係にあり、両者より古い。平面形状は楕円形である。規模は長軸 105 cm を測る。確認面からの深さは 16 cm であり、断面形状は皿形を呈する。堆積土は 3 層に分層でき、すべて人為的埋土である。

遺物は非クロコ成形の土師器甕が堆積土中より出土しているが、図示できなかった。

【SK25】（第 63・66 図）

調査区北西部に位置する。SK26 と重複関係にあり、これより新しい。平面形状は楕円形である。規模は長軸 72 cm、短軸 60 cm を測る。確認面からの深さは 18 cm であり、断面形状は U 字状を呈する。堆積土は 2 层に分層でき、すべて人為的埋土である。

遺物は第 67 図 1 に図示した非クロコ成形の土師器甕が堆積土中より出土している。

【SK27】（第 63・66 図）

調査区北部に位置する。SD10 と重複関係にあり、これより新しい。平面形状は楕円形である。規模は長軸 108 cm、短軸 76 cm を測る。確認面からの深さは 22 cm であり、断面形状は皿形を呈する。堆積土は 2 層に分層でき、すべて人為的埋土である。

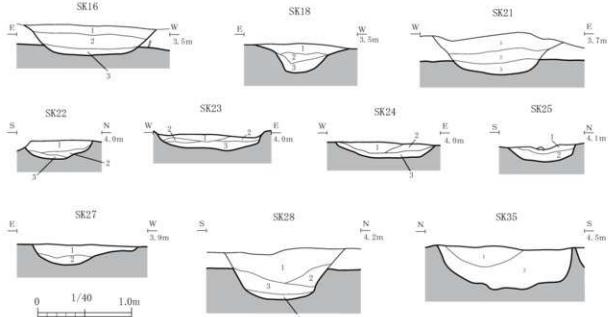
遺物は非クロコ成形の土師器甕、須恵器甕が堆積土中より出土しているが、図示できなかった。

【SK28】（第 63・66 図）

調査区北に位置する。平面形状は楕円形である。西側は調査区外へ広がるため平面形状と長軸は不明であるが、短軸 96 cm を測る。確認面からの深さは 54 cm であり、断面形状は逆台形を呈する。堆積土は 4 層に分層でき、すべて人為的埋土である。

遺物は非クロコ成形の土師器甕、ロココ成形の土師器甕が堆積土中より出土しているが、図示できなかった。

1. 原遺跡第1次調査（第7地点）



SK16 土層注記

層番	上色	土質	備考
1	暗褐色	10YR2/3	砂 しまり弱い、粘性弱い
2	暗褐色	10YR2/3	砂土を多く含む 砂土を多く含む、しまり弱い、粘性弱い
3	暗褐色	10YR4/4	砂質シルト 砂土を多く含む、しまり弱い、粘性弱い

SK18 土層注記

層番	上色	土質	備考
1	黒褐色	10Y2/3	褐色シルト小ブロックをやや多く、堆土を少ブロックを含む、しまり弱い
2	暗褐色	10YR3/3	シルト 褐色シルト小ブロックを多量、堆土を少ブロックを少含む、しまりやや弱い
3	黒褐色	10YR3/1	シルト 褐色シルト小ブロックを少含む、しまりやや弱い

SK22 土層注記

層番	上色	土質	備考
1	灰青色	10YR2/3	シルト 化物を少量、堆土を少含む、しまりやや弱い
2	暗褐色	10YR3/3	シルト 褐色シルト小ブロックを少量、堆土を少含む、しまりやや弱い
3	黒褐色	10YR3/1	シルト 褐色シルト中ブロックを多量、堆土を少含む、しまり弱い

SK23 土層注記

層番	上色	土質	備考
1	灰青色	10YR2/3	シルト 堆土をや多く含む、しまりやや弱い
2	暗褐色	10YR3/3	シルト 褐色シルト小ブロックを少量、堆土をや多く含む、しまりやや弱い
3	灰褐色	10YR4/3	砂質シルト 褐色シルト中ブロックを少量含む、しまり弱い

SK24 土層注記

層番	上色	土質	備考
1	黒褐色	10Y2/3	シルト 堆土をや多く含む、しまりやや弱い
2	暗褐色	10YR3/3	砂質シルト 褐色シルト小ブロックを少量、堆土を少含む、しまりやや弱い
3	灰褐色	10YR4/3	砂質シルト 褐色シルト中ブロックをや多く、堆土を少含む、しまりやや弱い

SK25 土層注記

層番	上色	土質	備考
1	暗褐色	10YR2/3	砂質シルト 堆土を少含む、しまりやや弱い
2	灰褐色	10YR4/3	砂質シルト 褐色シルト小ブロックを少量、堆土を少含む、しまりやや弱い

第 66 図 南側地区土坑土質断面図

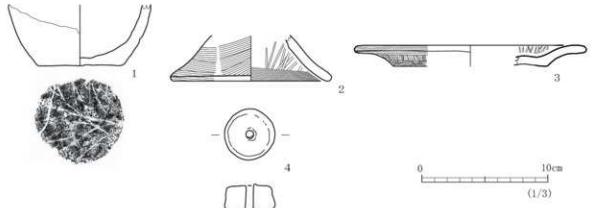
1. 原跡道第1次調査(第7地点)

1. 原跡道第1次調査(第7地点)

SK27 土層目記			
層番	土色	土質	備考
1	暗褐色	10YR2/3	シルト 灰土テープ状粘質シルト粘土ブロックをやや多く含む。底面断片を含む。
2	黒褐色	10YR2/3	砂質シルト 褐色粘質シルト粘土を微量含む。上部断片を含む。しまりやや細い。

SK28 土層目記			
層番	土色	土質	備考
1	暗褐色	10YR2/3	シルト に凹・凸褐色粘質シルト粘土をやや多く。地土粒を微量含む。
2	黒褐色	10YR2/3	シルト 褐色シルト粘土を多く。地土粒をシルト粘土ブロックを少含む。
3	褐色	10YR2/3	砂質シルト 褐色粘土ブロックをやや多く含む。
4	茶色	10YR2/1	粘土 地山。土量少い。

SK30 土層目記			
層番	土色	土質	備考
1	暗褐色	10YR2/3	シルト に凹・凸褐色粘質シルト粘土ブロックをやや多く。炭化物を少含む。
2	黒褐色	10YR2/3	砂質シルト に凹・凸褐色粘質シルト粘土ブロックをやや多く。褐色粘土粘。炭化物を少含む。



南側地区土坑出土遺物観察表

番号	構造・組合	種別	器種	調整		法量(cm)			厚み	厚み
				外面	内面	口径/長さ	底径/幅	高さ/厚み		
1	SK25	土師器	甕	底部木葉痕	ナダ	—	6.8	(4.7)		
2	SK41	土師器	高杯	ヘラナダ	ミガキ・ハケメ	—	12.8	(3.6)		
3	SK41	赤陶土器	器台?	ミガキ	ミガキ	—	17.4	(2.0)	16.1	
4	SK18	土製品	薪桶軸	重量35g		4.0	3.5	2.0	16.2	

第67図 南側地区土坑出土遺物

【SK35】(第63・66図)

調査区中央部に位置する。P167・168と重複関係にあり、これらより新しい。東側は調査区外へ広がるため平面形状・長軸は不明であるが、短軸40cmを測る。確認面からの深さは46cmであり、断面形状はU字状を呈する。堆積土は2層に分層でき、すべて人為的埋土である。なお、底面では凹凸がみられる。遺物は出土していない。

【SK36】(第63・66図)

調査区南部に位置する。SD12・13と重複関係にあり、前者より古く、後者より新しい。東側は調査区外へ広がるため平面形状・長軸は不明であるが、短軸48cmを測る。確認面からの深さは46cmであり、断面形状はU字状を呈する。堆積土は4層に分層でき、すべて人為的埋土である。

遺物は堆積土中より鉄滓が出土している。

【SK41】(第63・66図)

調査区南部に位置する。S124、SA01と重複関係にあり、前者より新しく、後者より古い。東側は調査区外へ広がるため平面形状・長軸は不明であるが、短軸80cmを測る。確認面からの深さは36cmであり、断面形状はU字状を呈する。堆積土は2層に分層でき、すべて人為的埋土である。

遺物は堆積土中より非ロクロ成形の土師器高杯(第67図2)・甕、赤焼土器の器台とおもわれる資料(第67図3)が出土している。

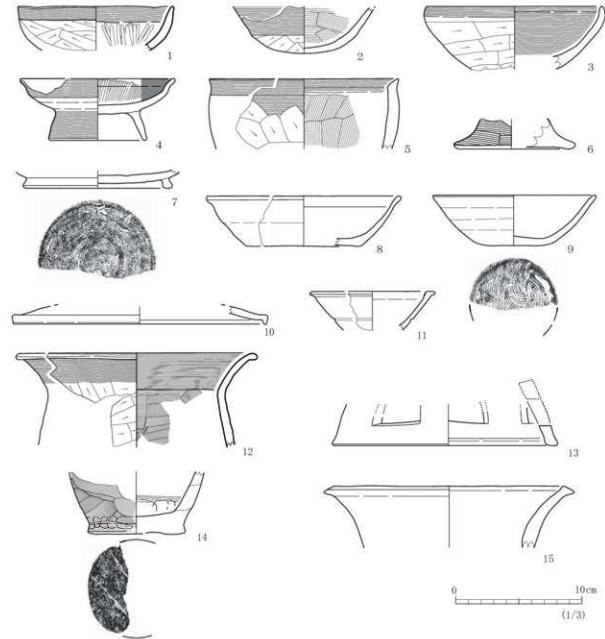
・柱穴

南側調査区内でも北側調査区同様に、柱痕跡が認められながらも、調査面積の関係で建物の復元ができなかった柱穴が133口存在する。また、柱痕跡は明瞭に確認できなかつたが、遺物が出土している柱穴もある。以下にこれらの柱穴について簡潔に概要を述べる。

はじめに図示可能な遺物を出土した柱穴をみていく。これらには調査区北西部のP100・116、調査区北部のP137・138・145、調査区中央部のP167、調査区南部のP177・190・204・207がある。これらを時期的に古いものから順を追ってみていくと、P137から出土した第68図7の須恵器高台壺と、12のP138から出土した非ロクロ成形の土師器甕、P190から出土した3の非ロクロ成形の土師器甕は7世紀末～8世紀初頭頃の年代観が推定される。10のP100の須恵器蓋とP167から出土した1の非ロクロ成形の土師器甕は8世紀前半頃の年代観が推定される。特に1は内部に黒漆による黒色処理の様子がみられ、また丸みを帯びた体部から内窓気味に口縁部が立ち上がるという特徴から在地化した関東系土師器の可能性がある。P145から出土した8の須恵器甕は、口縁部が外反するという特徴から9世紀半ば頃、P177から出土した9の須恵器甕は底径がやや小型化し、糸切後未調整であることも踏まえると9世紀半ば頃の年代観が推定される。またP207から出土した4の土師器高台皿は、高台部が高く口縁部が外反するという特徴から9世紀半ば頃の年代観が推定される。

次に良好な柱痕跡が確認された柱穴をみていく。調査区北西部のP98・107の掘方は長軸が100cmほどの長方形、乃至は長円形である。ここで確認された柱痕跡は径20cmであり、掘方埋土には褐色粘土ブロックが多量に含まれていた。調査区中央部南寄りのP179では柱痕跡は明瞭に認められなかつたが、掘方の短軸は100cmで方形、乃至は長方形を呈するものと思われる。調査区最南端に位置するP224の掘方規模は、長軸・短軸とも100cmの方形である。これらは今回の調査、及び西側で実施した第3次調査で建物の復元には至らないものであり、調査区東側にも建物が存在する可能性を示すものと考えられる。

1. 原遺跡第1次調査(第7地点)



南側柱穴出土遺物観察表

番号	遺構・細部	種類	器種	調整			法量(cm)	写真番号
				外面	内面	口徑 径底 距高		
1	F167	土師器	杯	ヘラケズリ・ヨコナデ	ミガキ・黒漆付	12.2 — (3.5)		
2	F100	土師器	杯	ヘラケズリ・ヨコナデ	ヘラナデ	— — (3.8)		
3	F190	土師器	鉢	ヘラケズリ・ヨコナデ	ヨコナデ	14.0 — (5.0)		
4	F207	土師器	高台杯	底削切らし凹輪ヘラケズリ	ミガキ・黒色処理	12.4 7.5 4.9	16-3	
5	F190	土師器	鉢	ヘラケズリ・ヨコナデ	ヘラナデ・ヨコナデ	15.0 — (5.6)		
6	F204	土師器	器台?	ヘラナデ	—	8.9 (2.4)		
7	F137	原底器	高台杯	高台貼付、底削切らし凹輪ヘラケズリ	ロクロナデ	— 11.6 (1.4)		
8	F145	原底器	杯	底削切らし凹輪ヘラケズリ	ロクロナデ	15.6 9.0 4.0		
9	F177	原底器	杯	凹輪切らし凹輪ヘラケズリ	ロクロナデ	13.0 5.0 4.1	16-4	
10	F109	原底器	蓋	ロクロナデ	ロクロナデ	20.0 — (1.4)		
11	F116	原底器	鉢?	ロクロナデ、浅縁1条	ロクロナデ	10.0 — (3.1)		
12	F138	土師器	鉢	ヘラケズリ・ヨコナデ	ヘラナデ・ヨコナデ	18.6 — (7.5)		
13	F151	原底器	円面鏡	脚部に刃形の削かし、自然釉	ロクロナデ	— 17.6 (2.1)	16-5	
14	F100	土師器	甕	ヘラナデ・ヨコナデ、木葉痕	ヘラナデ・ユビオサエ	— 6.0 (5.0)		
15	SD12	原底器	鉢?	ロクロナデ	ロクロナデ	19.8 — (4.9)		

第68図 南側地区柱穴出土遺物

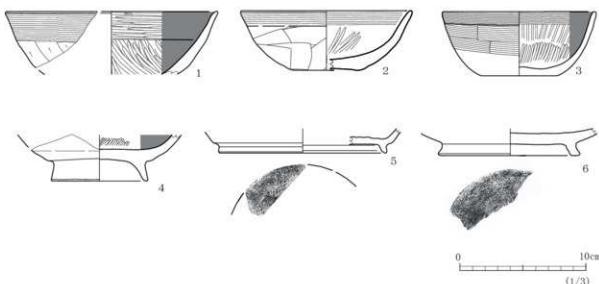
・その他の遺物(第69~71図)

前述の遺構出土遺物のほか、掘削時や精査時、そして遺物包含層の掘り下げ時に土師器・須恵器が多数出土している。また、遺構内からの出土ではあるものの、遺構の年代観とは明確に異なる時期の遺物についてもあわせて示した。以下に特記すべき点について述べる。

土師器の杯・甕は非クロ成形で作られたものと、クロロ成形で作られたものの2者がある。4は高台杯であるが、これまでのところ当遺跡での発見事例はごく少量である。14の甕は体部から底部にかけて丸味を持つものである。外面は磨滅のために調整が判断できない部分が多いが、部分的にハケ調整がなされる。19は外面に赤彩が施されている。遺跡内では第3次調査において南小泉式の高台脚部が出土していることから、当資料についてもこの時期の所産である可能性が高い。20は長頭瓶とみられるもので、内面には黒色処理が施されている。

須恵器の杯は底部の調整で違いがみられるものを示した。8は回転ヘラケズリ、9は手持ちヘラケズリ、10・11は回転糸切で未調整である。12の蓋はカカリが付くものである。21は上面が平滑に仕上げられていることから中空円面鏡の可能性がある。自然釉は上面の縁辺と体部でみられ、鏡部とした上面中心付近ではみられない。これはSI23より出土した円面鏡でも同様の傾向がみられており、墨を磨りやすいように自然釉が付着した箇所を研磨した結果であると考えられる。22はフランコ形瓶で、製作時に開口していた部分を円形の粘土板で閉塞している。胎土の色調や自然釉の特徴から猿投窓跡群の製品である可能性が考えられる。

このほか、23の平瓦は当遺跡では唯一の瓦資料である。また24は器形と調整から製塙器である可能性が考えられる。

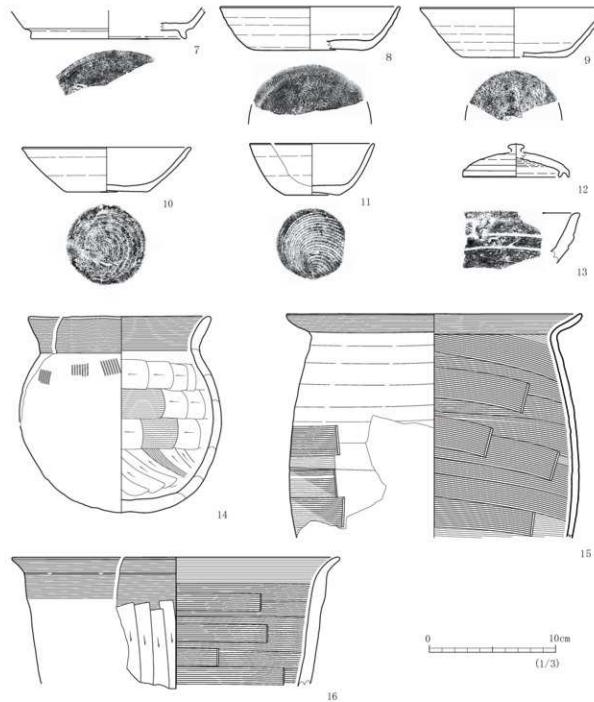


南側地区遺構外出土遺物観察表

番号	遺構・細部	種類	器種	調整			法量(cm)	写真番号
				外面	内面	口徑 径底 距高		
1	当空縁無リテ	鉢	杯	ヘラナデ・ヘラケズリ	ミガキ・黒色処理	16.8 — (5.0)		
2	当空縁無リテ	土師器	杯	ヘラナデ・ヘラケズリ	ヘラナデ	13.6 5.5 4.7		
3	当空縁無リテ	土師器	杯	ヘラナデ・ヨコナデ	ミガキ・黒色処理	12.0 6.0 5.1	16-6	
4	当空縁無リテ	土師器	高台杯	底削切らしヘラナデ、高台付	ミガキ・黒色処理	— 7.5 (3.7)		
5	糊付	原底器	高台杯	高台貼付、底部削切ヘラケズリ	ロクロナデ	— 13.6 (1.9)		
6	当空縁無リテ	原底器	高台杯	高台貼付、底部削切ヘラケズリ	ロクロナデ	— 11.0 (2.1)		

第69図 南側地区その他の出土遺物(1)

1. 原遺跡第1次調査（第7地点）

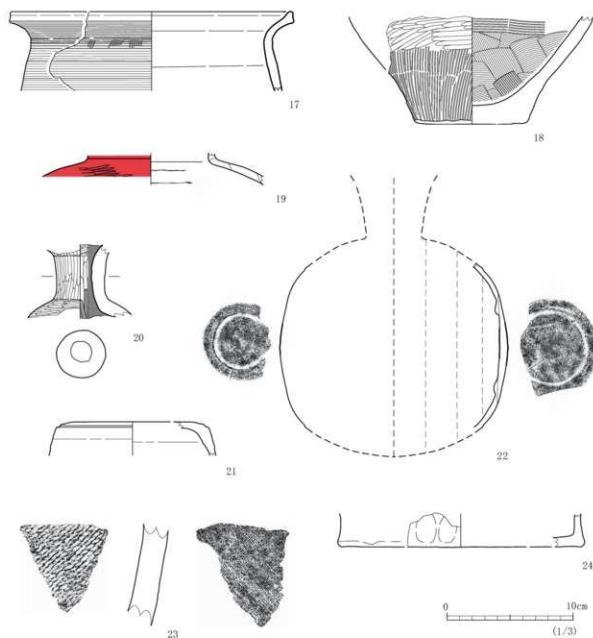


南側地区遺構外出土遺物観察表2

番号	遺構・細部	種別	器種	調整		法量(cm)	写真番号
				外面	内面		
7	糞器	須恵器	高台杯	高台點付、底部回転へラケズリ	ロクロナダ	— 12.2 (2.3)	
8	糞器	須恵器	坪	回転へラケズリ	ロクロナダ	14.2 8.8 3.5	
9	糞器	須恵器	坪	手持ちへラケズリ	ロクロナダ	14.8 8.0 4.0	
10	当身輪附子	須恵器	坪	底部糞切手調整	ロクロナダ	13.3 6.5 3.6	
11	当身輪附子	須恵器	坪	底部糞切手調整	ロクロナダ	10.0 4.4 4.1	
12	当身輪附子	須恵器	瓦	ロクロナダ	8.4 —	2.7	
13	当身輪附子	須恵器	瓦	へラケズリ、2条の沈織	ロクロナダ	— — (4.0)	
14	当身輪附子	土師器	甕	ハケメ・ヨコナダ	ハラケズリ・ヘラナダ・ヨコナダ	14.2 — 15.5 16.7	
15	糞器	甕	瓦	ロクロナダ・ヨコナダ	ヘラナダ・ヨコナダ	23.2 — (17.7)	
16	当身輪附子	土師器	甕	ヘラケズリ・ヨコナダ	ヘラナダ・ヨコナダ	25.5 — (10.6)	

第70図 南側調査区その他の出土遺物（2）

1. 原遺跡第1次調査（第7地点）



南側地区遺構外出土遺物観察表3

番号	遺構・細部	種別	器種	調整		法量(cm)	写真番号
				外面	内面		
17	廻転時	土師器	甕	ロクロナダ	ロクロナダ	21.9 — (6.3)	
18	廻転時	土師器	甕	ミガキ・ヘラナダ	ハケメ・ヘラナダ	— 8.8 (8.5)	
19	廻転時	土師器	甕	ミガキ・赤彩	磨滅のため不明	— — (3.7)	
20	廻転時	土師器	甕	ヘラケズリ・ミガキ	無色処理	— — (5.9)	
21	廻転時	須恵器	円筒形	自然輪付甕	自然輪付甕	ロクロナダ	11.4 — (2.7)
22	倒立輪廻り下口	須恵器	甕	自然輪付甕	成形時の穴を円筒板で開闢	— — (13.4)	16-8
23	廻転時	瓦	平瓦	調日瓦	有目痕	— — (1.9)	
24	廻転時	土製品	削土器	ユビオサエ	ユビオサエ	— 18.0 (2.7)	

第71図 南側調査区その他の出土遺物（3）

1. 原遺跡第1次調査（第7地点）

e. 考察

①遺物について

今回の調査で出土した遺物は、縄文時代の土器、弥生時代の土器・石製品、古墳時代中期の土器、そして古墳時代後期から平安時代にかけての土器（土師器・須恵器）である。前項までにそれぞれの出土構造のなかで年代観については若干触れているが、ここでは特に遺跡の存続期間を把握することを目的として古墳時代後期から平安時代にかけての土師器・須恵器について全体を俯瞰し、編年的な位置づけを試みる。

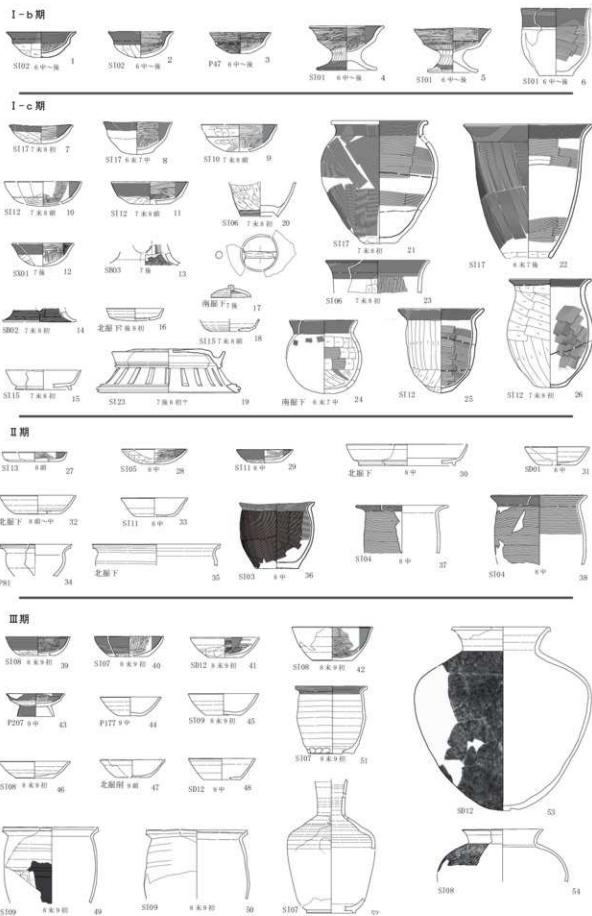
・土器について（第72図）

古墳時代後期から奈良時代にかけての土器研究・編年に関しては、東北地方全域を視野に入れて行った辻秀人氏を研究代表者とする広域編年がある（辻編2007）。ここでは主として広域編年の一節として田村晃一氏が行った宮城県中・南部での研究成果（田村2007）以下、「田村A編年」と表記）とともに見ていく。同じ平安時代については多賀城、及び周辺も視野に入れた田村晃一氏による編年研究（田村1994以下、「田村B編年」と表記）に導かれるながら当遺跡の出土遺物の特徴について述べる。なお、これまでの原遺跡出土遺物の検討から出土遺物についてはI～III期に大別し、I期についてはa・b・cの小期を設定している。

I-a期の土器はこれまで第5次調査で出土したものであり、第1次調査では出土していない。I-b期は北側調査区SI01・SI02出土遺物を基にした。いずれも非クロコ形の土師器であり、器種は壺、高壺・甕がある。壺は3を除くと体部がヘラケズりで口縁部はヨコナデ、内面はヘラミガキと黒色処理が施されている。4・5の高壺は体部、及び脚部がヘラケズり、口縁部がヨコナデで、内面はヘラミガキと黒色処理が施される。これらは器種構成や形態的特徴から、I-b期の土器は住社式、及び栗式の古段階の範疇に含まれるものであり、1・2は6世紀末葉の時期である角田市住社遺跡第1号住居跡（角田市教委1997）、6は同じく6世紀末葉の時期である角田市住社遺跡1955年調査住居跡（志間1958）に類例がみられる。4・5の高壺については住社遺跡出土資料には中実の脚部という形態で類例は認められないが、壺部の形状から田村A編年の2・3段階である6世紀末葉から7世紀前半に位置づけられる。

I-c期の土器は北側調査区SI06・SX01、南側調査区SB02・SB03・SI10・SI12・SI15・SI17・SI23の各遺構と、補足的に遺構外の出土遺物を基にした。土師器と須恵器があり、土師器はいずれも非クロコ形である。器種は土師器が壺、高壺、壺・甕、甕、須恵器が蓋・壺、高台壺・円面鏡、さらに図示はしていないが甕・長頭瓶・甕がある。土師器壺はいずれも丸底であるが、11は底部を持ちヘラケズりによって比較的平坦にしている。また壺の口縁下には段を有するもの（9・10）と、不明瞭なもの（7・11・12）の2者がいる。いずれも内面はヘラミガキと黒色処理が施される。高壺では脚部に円形の透孔が認められるが、13は大型、14は小型とそれぞれ透孔の大きさが異なる。13と同様の高壺には7世紀後半に位置づけられる仙台市郡山遺跡SX2093遺構（仙台市教委2004）がある。14に類似する高壺には透孔の位置が異なるものの、7世紀末葉から8世紀初頭に位置づけられる東松島市赤井遺跡SE326井戸状遺構（矢本町教委2001）がある。20の壺は蒸氣孔に1本の桟を取り付けて半月状にしたものである。須恵器では同様の形状の甕は日の出山窯跡C地点などで確認されている（色麻町教委1993）、東日本の土師器甕は蒸氣孔が箇所が多い中で、西日本

1. 原遺跡第1次調査（第7地点）



第72図 時期別にみた出土遺物

1. 原遺跡第1次調査（第7地点）

にみられる形状の瓶として希少な事例となる。21の蓋は体部外面にハケメ、内面にヘラナデが施され、頸部は短く外反しながら直立し、口唇部は玉縁状を呈するものである。類例は7世紀後半から8世紀前半に位置づけられる仙台市下飯田遺跡SR2 河川跡出土資料がある（仙台市教委 1995）。17の蓋は宝珠状のツマミを持ち、カエリ有するものである。類例はとともに7世紀後半に位置づけられる利府町八幡崎B遺跡III層一括土器（利府町教委 1988）、仙台市郡山遺跡SX2093 遺構（仙台市教委 2004）などがある。19の円面鏡については後述する。

これらの器種構成や形態的特徴からI-c期の土器は栗式の範疇に含まれるものであり、村田A編年の4・5段階である7世紀後半から8世紀初頭に位置づけられる。

II期の土器は北側調査区SI03・SI04・SI05・SD01、南側調査区SI11・SI13の各遺構と、補足的に遺構外の出土遺物を基にした。土師器と須恵器があり、土師器は非クロコ成形とクロコ成形の両者がある。器種は土師器が壺・甕、須恵器が蓋・壺・高台壺・鉢、さらに図示はしていないが甕がある。土師器壺はいずれも非クロコ成形であるが、器高は低くなり、また27・29のように体部下端をヘラケズリし、平底状にしている。27の類例には8世紀半ば～後後に位置づけられる多賀城市山王遺跡八幡地区SD461区画溝跡（宮城県教委 2018）などがある。また29の類例にはいずれも8世紀半ばに位置づけられる利府町郷樂遺跡第17住居跡（宮城県教委 1990）、同町硯沢遺跡B2号住居跡（宮城県教委 1987）がある。36の小型甕は外面ともにヘラナデが施され、口縁部は短く外反し、胴部中央付近で口縁との径がほぼ一致するものである。類例は8世紀半ばに位置づけられる多賀城市山王遺跡SD677講跡（宮城県教委 1997）がある。37・38の甕はともにロクロコ成形であり、外面には回転ハケメが施される。須恵器は30の高台壺と34・35の鉢が同様の胎土を呈する。30の高台壺は口径・底径とも大きいものであり、体部下半で強く屈曲した後にやや内弯しながらもほぼ直線的に立ち上がる。類例は8世紀前半から半ばに位置づけられる利府町硯沢窯跡B地区16号窯（宮城県教委 1987）や8世紀半ばに位置づけられる多賀城市山王遺跡SK898（宮城県教委 1997）がある。

これらの器種構成や形態的特徴からII期の土器は国分寺下層式から表衫ノ入式の範疇に含まれるものであり、村田A編年の6・7段階である8世紀前半から後後に位置づけられる。

III期の土器は北側調査区SI07・SI08・SI09、南側調査区SD12・P177・P207の各遺構と、補足的に遺構外の出土遺物を基にした。土師器と須恵器があり、土師器はすべてロクロコ成形である。器種は土師器が壺・高台壺・甕・甕、須恵器が壺・長頸甕・甕である。土師器壺はいずれも底部からやや内弯気味に立ち上がるものであり、体部中央から下端にはヘラケズリが施される。また底部外面もヘラケズリ調整が施されている。これらはいずれも8世紀末葉から9世紀前半に位置づけられる多賀城市山王遺跡八幡地区SI7043堅穴建物跡（宮城県教委 2018）に類例を求めることができる。42の壺は底部から内弯気味に立ち上がり、口縁部は弱く外反するもので、類例としては9世紀半ばに位置づけられる蔵王町東山遺跡土器窯（宮城県教委 1981）がある。43の高台壺は高い高台と口縁部が外反することが特徴として挙げられ、類例に9世紀半ばに位置づけられる多賀城市山王遺跡SK2019土壤（宮城県教委 1996）がある。51の小型甕の口縁部は短く、頸部からやや丸味を持ちながら底部に至ることが特徴であり、類例は8世紀末葉から9世紀初頭に位置づけられる栗原市伊治城跡SI173住居跡（多賀城研 1980）に求めることができる。須恵器の壺は口径と底径の比率が大きくなり、底部の調整も46はヘラ切り後回転ヘラケズリ、47は全体で手持ちヘラケズリを行うが、48は回転糸切後外周部分のみを回転ヘラケズリし、44・45は回転糸切後未調整である。52の長頸甕は頸部と胴部の接合部

1. 原遺跡第1次調査（第7地点）

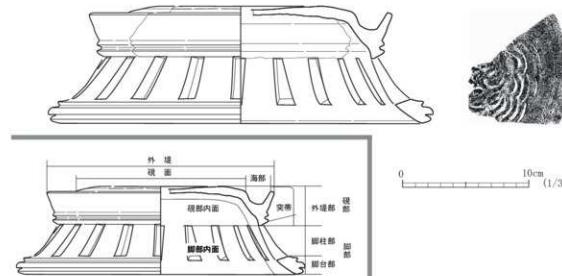
分に扁平なリング状突起を付けたものである。器表には黒色の湧出物がみられることから、会津若松市に所在する大戸窯跡群の製品である可能性が高い。

これらの器種構成や形態的特徴からIII期の土器は表衫ノ入式の範疇に含まれるものであり、村田B編年の1～3群である8世紀末葉から9世紀後半に位置づけられる。

・円面鏡について

今回の調査で最も注目を集めた遺物はSI23から出土した須恵器円面鏡である。ここでは改めてその特徴を記し、類例及び推定される生産地について述べる。

円面鏡についてはこれまで多数の先行研究があるが、ここでは奈良文化財研究所から刊行された『平城京出土陶鏡集成 I - 平城宮跡』（奈良文化財研究所 2006）に掲載されている器形分類・部位名称を用いる（第73図）。



第73図 SI23出土円面鏡と部位名称

SI23出土の円面鏡は圓足円面鏡に分類されるものである。外堤径22.4cm、観面径17.8cm、脚部径30.6cm、器高9.3cmを測る。胎土はやや暗い灰白色であり、非常に精良である。観面の側縁・海部、及び脚部側面には陰灰がみられることから、焼成は正置の状態で行われたと考えられる。脚部は極めて平滑に研磨され、拡大鏡を用いた観察では擦痕内に墨の痕跡がみられる。器形の特徴として観面部では以下の特徴がある。

- ①観面が外堤部よりも高く、平坦である
 - ②外堤部には二重に幅の狭い突起がめぐらる
 - ③観面内面には同心円状の当具痕がみられる
 - また、脚部では以下の特徴がある。
 - ④脚柱部に長方形の透孔が存在する
 - ⑤脚台部には2条の沈線をめぐらし幅広い突起を造り出す
- ことなどが挙げられる。なお、復元した透孔数は20孔である。

宮城県内で出土した陶鏡については、これまで多賀城政序跡（多賀城跡調査研究所 1982）や山王遺跡八幡・伏石地区（宮城県教委 2018）をはじめとした調査報告書のほか、生田和宏氏（生田

1. 原遺跡第1次調査（第7地點）

2003)、関根章義氏（関根 2014）、村田晃一氏（村田 2018）の個別論考がある。このうち、陸奥国や宮城県域という比較的広域にわたって集成を行っている関根氏・村田氏の論考においても、本資料の特徴を具備したものは皆無であり、本資料が陸奥国外からの搬入であることを強くうかがわせる。

本資料の中でも最も大きな特徴は前述の②・③・⑤であると言えるが、管見に触れた限りでは③・⑤については残念ながら現時点まで類似資料を見出せない。このため②を手掛かりにみていくと、多数の円面鏡が収録されている『平城京出土陶磚集成 I - 平城宮跡-』（奈良文化財研究所 2006）、『平城京出土陶磚集成 II - 平城京・寺院-』（奈良文化財研究所 2007）でも、圓足円面鏡の外堤部に幅の狭い二重の突帶を有する事例はさほど多くはない。むしろ、この特徴は蹄脚円面鏡で多くの類例が見られることから、蹄脚円面鏡を強く意識して製作された可能性も指摘されている（註1）。

生産地については、在地産の須恵器と大きく異なる胎土、及び前述の陸奥国内では類似例が認められない点から、他地域からの搬入品である可能性が高いと考えられる。このため、本資料に近似した胎土や、降灰による自然釉の色調に共通点が多い製品を生産している東海地方の窯跡で検討した。まず東日本に多くの製品を供給し、市内の横穴墓群でも副葬品がみられる湖西窯と猿投窯であるが、現地での実見により湖西窯から出土した製品に含まれる円面鏡とは胎土の色調、器形とも大きく異なることを確認した（註2）。猿投窯から出土した円面鏡については残念ながら実見の機会に恵まれなかつたが、坏や瓶頸などにみられる胎土・自然釉の色調とは若干異なるように見受けられた。このため陸奥国にはあまり供給例が無い美濃須衛窯まで視野を含めると、鵜沼 8号窯（各務原市教委 1984）で本資料に近似する特徴を具備した資料が認められ、また胎土の特徴や降灰による自然釉の色調からは老洞窯跡の製品に近似していることが指摘された（註3）。さらに美濃須衛窯群では製作に同心円状の当具を多用し、その痕跡を多く留めた製品が多く認められること（註4）も加味し、現時点では本資料は美濃須衛窯群で生産された製品である可能性が高いものと考えられる。

②遺構について

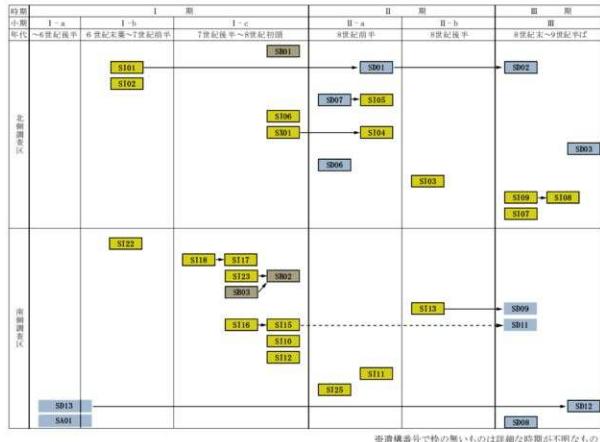
ここでは今回の調査で確認された主要遺構群の変遷と、これまで隣接箇所等で実施した調査で関係する遺構について記述する。

・主要遺構の変遷

前項の出土土器の年代観、そして各遺構の重複関係をもとに整理したものが第74図である。以下に各期の主要遺構の様相についてみていく。

I期の遺構群は、土器の年代観、及び遺構の重複関係から6世紀前半～後半の時期をa小期（I-a期）。以下の各小期も同様に表記）、6世紀末葉～7世紀前半をb小期、7世紀後半～8世紀初頭をc小期とした。I-a期の遺構は南側調査区のSI13、SA01である。これらの遺構は明確に年代を示す遺物が得られなかったが、第3次調査でそれぞれの遺構の延長線が確認され、さらに後述するI-b期の遺構群が本遺構の埋没後につくられていたことを確認したことから、現段階ではこの段階での所産と考えておく。I-b期の遺構は北側調査区のSI01・02、及び南側調査区のSI22である。第75図に示したように、この時期の遺構群は調査区全体に散発的に広がるが、本調査地点の西側に位置する第3次調査地点や第5次調査I区ではやまとまて当該期の堅穴建物が存在する。またJR常磐線の東側で実施した第4次調査地点でも遺構の規模は確認できなかったが、当該期の土器が出土して

1. 原遺跡第1次調査（第7地點）



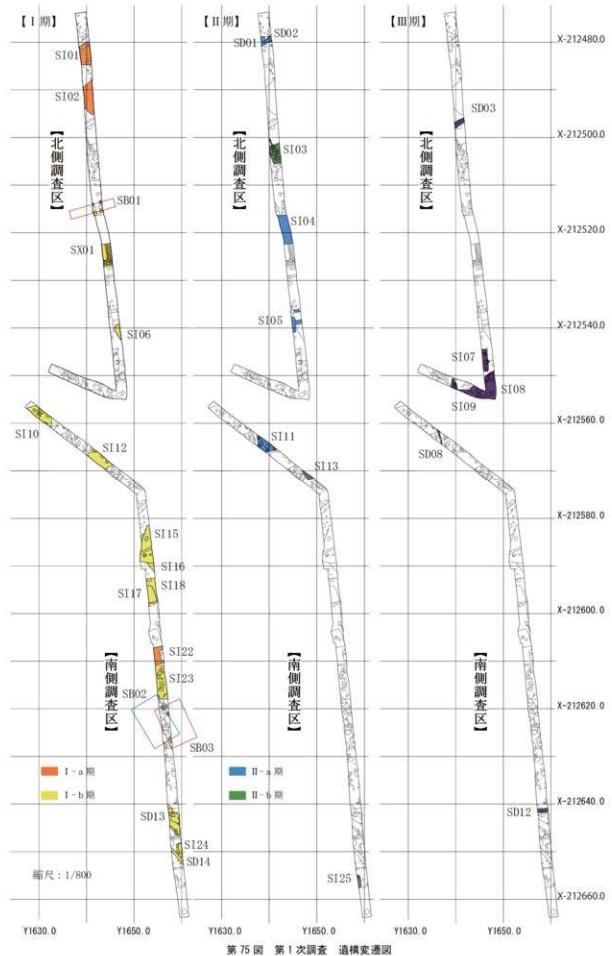
※遺構番号で枠の無いものは詳細な時期が不明なもの

第74図 第1次調査 主要な遺構の重複関係図

おり、遺跡内の広範囲にわたって分布していることが判明していることから、阿武隈川北岸の地に拠点的な集落が形成された時期と考えられる。I-c期の遺構は北側調査区SB01、SI06、SX01、南側調査区SB02・03、SI10・12・14・16・17・18・23をはじめとする遺構群がつくられる。この時期の遺構は堅穴建物を中心とするが、SB01・02・03は柱穴の掘方から官衙的な性格が強い掘立柱建物であるとみられることから、この地に古代國家が成立に関与した施設がつくられた時期と考えられる。特にSB02・03は柱穴の規模も大きいことから、当該期の主要な建物であった可能性も考慮できる。なお、SB02・03の主軸は真北から西へ21°～33°西へ傾くものであるが、第3次・第5次調査ではこれらの主軸方向と近似した数値を示す掘立柱建物が少ないことから、主要な建物群は東側に展開するともされる。遺物の面では前述の本調査SI23から出土した美濃須衛窯群の製品とみられる須恵器円面鏡をはじめとし、周辺の調査でも第3次調査ではSI14から出土した関東系土器、さらには第5次調査II区ではSI16から出土した湖西窯跡群で生産された須恵器フラスコ形長頸瓶、SI17から出土した猿投窯跡群で生産された須恵器フラスコ形長頸瓶があり、遠隔地との交流が可能な人々がこの地に存在していた可能性が考えられる。

II期の遺構群については土器の年代観や遺構の重複関係から8世紀前半から半ばの時期をa小期、8世紀後半をb小期とした。II-a期の遺構は北側調査区SD01・SD07・SI04・SI05、南側調査区SI13・SI11・SI25である。第75図のように、この時期の遺構は調査区北側に多く、南側では少ない傾向にある。続くII-b期の遺構は北側調査区SD02・SD07・SI04があるものの、南側調査区では見られなくなる。このような遺構分布を示す背景としては、第76図で示したように第3次調査で確認

1. 原遺跡第1次調査(第7地点)



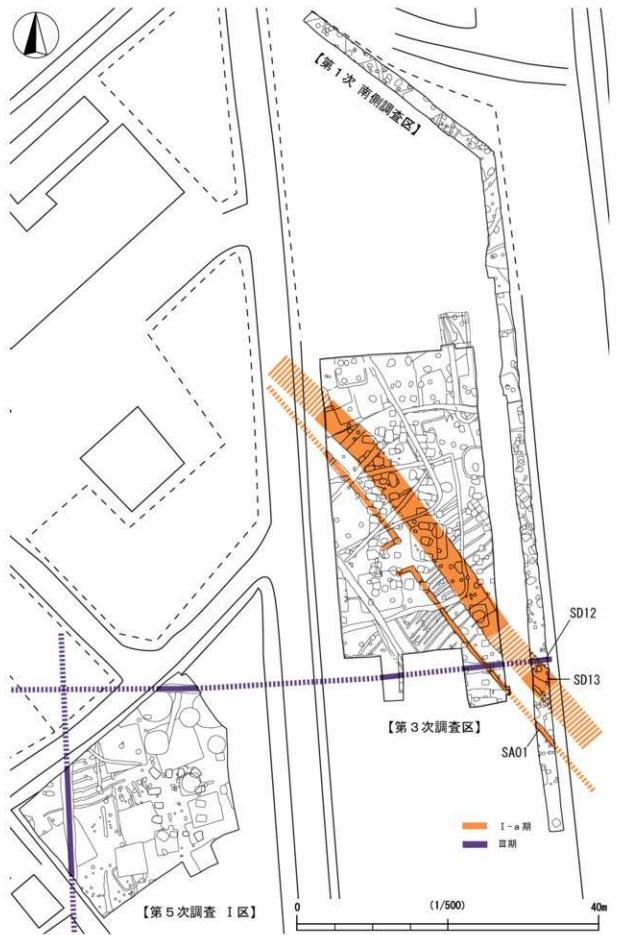
第75図 第1次調査 遺構実測図

1. 原遺跡第1次調査(第7地点)



第76図 原遺跡第1・3・5次調査で発見されたII期主要遺構配置図

1. 原遺跡第1次調査（第7地点）



第 77 図 原遺跡第1・3・5次調査で発見された区画構造配置図

1. 原遺跡第1次調査（第7地点）

された3間×10間の大型建物跡をはじめとする掘立柱建物群・第5次調査で確認された3間×4間の掘立柱建物など、真北方向を強く意識した官衙遺構群の成立が挙げられる。調査区周辺にその中枢施設が設けられた結果、竪穴建物などの集落域が周辺部に移動した可能性が考えられる。

III期の遺構群は8世紀末葉から9世紀後半の時期とした。当該期の遺構には北側調査区SD03・SD107・SD108・SD109、南側調査区SD08・SD12がある。第75図では一見するも北側調査区に分布が偏重しているように見られるが、西側に位置する第3次調査や第5次調査地ではこの时期的竪穴建物が確認されている。またJR常磐線の東側に位置する第4次調査地・第12地点調査地でも当該期の遺構・遺物が認められ、特に第4次調査地ではトレンチ調査のために全体像は不明ながらも多数の掘立柱建物が存在していることが判明しており、官衙施設の中枢が東側へ移動している可能性が指摘されている（岩沼市教委2020）。

・区画施設について

南側調査区南部で確認したSD13大構とSA01木材堆は、その後の調査において第3次調査地でも連続して展開することが確認されている。両者は主軸方位が真北から西へ約40°傾くものであり、同時期に機能していた可能性が考慮される。しかしながら一方で、各遺構の年代観を明確に判断できる遺物が発見されていないこと、及び総長48～49mに渡って並行して存在していることは明らかではあるが、調査区外へ展開している部分については未だ不明であることから、両者が一連の遺構であるかについては今後の調査の中で解明すべき重要な事項となっている。

前述のとおり第3次調査では、大構が埋没したちにI-a期の遺構群がつくられていることが確認されたことにより、現時点ではSD13大構とSA01木材堆はI-a期の遺構として捉えられる。周辺の調査でのI-a期の遺構は、第5次調査I区で竪穴建物が1棟確認されているのみであり、まだ全体の様相は掴めてはいない。しかしながら、第77図に示したように第3次調査で発見された木材堆が調査区中央付近で西側へ2.5mほど屈曲することから、主体部はこの西側に位置するものとみられる。なお、屈曲した箇所の先端部分では、それぞれ柱穴が1穴存在していることから、冠木門のような簡易的な門が存在していた可能性が考えられる。今後の調査では、木材堆と大構で囲まれた区画内部の空間構成・区画の規模・機能した時期の詳細な年代観の把握を特に留意して行う必要がある。

もうひとつの区画施設としては南側調査区南部のIII期遺構であるSD12がある。こちらも第77図にも示したように第3次調査地で西側が確認され、延長線上の第5次調査でも一部が確認されている。さらに第5次調査I区では、SD12の延長であるSD07と直交するとみられるSD01が確認されている。前述のようにIII期の官衙施設の中枢は第4次調査地周辺に展開する可能性があるが、これらの区画施設の存在から周辺の集落についても計画的に土地の利用を行っていたことが推定される。

③遺跡の性格

【原遺跡を取り巻く自然的・歴史的環境】

本遺跡は阿武隈川左岸で形成された標高5m前後の自然堤防上に広がる。遺跡が立地する自然堤防は、西側ではほぼ直線的に東西方向に延びるが、遺跡の中央付近では阿武隈川河道の影響を受け、北側へと大きく方向を変え弧状を呈する。国内第6位の流域面積を誇る阿武隈川は、古くは古墳時代中期の古墳分布状況や、『先代旧事本紀』卷十「国造本紀」にみられる国造制の施行範囲、さらには

1. 原遺跡第1次調査（第7地点）

古代以降の名取郡と亘理郡（現在の岩沼市と亘理町）を分け隔てる重要な境目となっている。

10世紀に編纂された『和名類聚抄』（大東急記念文庫本）によると、古代の名取郡には7つの郷があり、現在の岩沼市域はこのうちの指賀郷と玉前郷に相当するとみられる。指賀郷は岩沼市北西部の志賀周辺、玉前郷は岩沼市南部の南長谷・玉字崎と考えられ、ほぼ市域の南北を二分することから、市域の最南端に位置する本遺跡はこのうちの玉前郷に包括されることは明らかである。この玉崎（玉前）という地を広域的な視点で歴載すると、西側の丘陵部からは平野部の玄関口となり、また太平洋側から眺めた場合は外洋と内陸部をつなぐ阿武隈川のほぼ河口付近に相当する地でもあることが分かる。本遺跡ではこれまでに前述の美濃須窯跡群の製品と考えられる凹面鏡をはじめ、狼狽窯跡群や湖西窯跡に代表される東海諸窯で生産された長頸瓶、東日本には類例が少ないとみられる蒸氣孔に棲を渡した土師器など海上交通を介してもたらされた可能性がある製品や、阿武隈川を利用した河川交通によってもたらされた可能性がある会津地方の大戸窯跡で生産された長頸瓶、そして陸上交通によつてもたらされたと考えられる黒漆を用いて黒色処理をした土師器壺（第68図1）や第2次調査では東北地方北部の製作技法でつくられた土師器壺が発見されており、海上交通・河川交通、さらには陸上交通の結節点として機能していたことをうかがうことができる。

玉前の地名は、10世紀頃に成立したと考えられている『延喜式』（巻二十八 兵部省 諸國駅伝馬）の東山道陸奥国に設置された駅家の名の中にも認められる。また詳細は後述するが、多賀城跡より出土した9世紀代と推定されている木簡でも、「玉前刻」という名称が記載されている（多賀城跡調査研究所 1985）。これらのことから、本調査で発見された遺構・遺物の数々は、駅家や剣といった交通に関連する施設に伴う可能性が調査時より考えられた。以下にこれらの施設について、他地域での先行研究を参考しながら述べる。

【古代交通研究の概況】

古代国家が諸国を掌握するために用いた施策のひとつに駅制による迅速な情報の収集、命令の伝達を行うことを目的とした道路の整備がある（近江2016）。この道路は東海道・東山道・北陸道・山陽道・山陰道・西海道・南海道のいわゆる七道であり、1980年代以降に各地の発掘調査で道路遺構の発見が相次いでいる（近江2006）。東北地方では福島県郡山市の荒井猫田遺跡の東山道とみられる発見例（郡山市教育委員会 2002）が知られているが、そこで発見された道路遺構は両側に側溝を持ち、路面幅は8~10mという規模のものである。古代国家によって推し進められたこれらの道路建設は、直進性が強く指向されて整備されており、歴史地理学の研究者によって1970年代から地表面に残る連続する地割などを手掛かりとして航空写真や地図から駅跡をはじめとした古代道路の路線想定がなされたほか、大字・小字などの地名から『延喜式』などにみられる駅家の位置を模索する研究が行われてきた（藤岡1978、木下2009など）。また文献史料の立場からは交通に関する様々な律令の検討、駅路や駅家、剣の改廃時期やその原因、そして約30里ごとに設置された駅家内部施設の建物や人員の構成などの研究が行われ



第78図 東山道と海道と玉前駅・剣

1. 原遺跡第1次調査（第7地点）

ている（註5）。一方、考古学的研究では前述のように道路遺構の発見から具体的な駅路路線の復元や道路構造や敷設時期、そして駅家遺跡内の建物配置などの研究が行われている（岸本2006、木本2008、近江2012）。

【仙台平野南部域の古代交通】

上記の先行研究を参考として岩沼市周辺を中心とした仙台平野南部域の交通に関わる古代史についてみていくと、『延喜式』の段階では陸奥国・出羽国とも東山道諸国に含まれているが、『続日本紀』養老2年（718）の記載から一時期は陸奥国を分割して石城国と石背国が成立したことが知れる。このうち石城国は陸奥国側の石城・標様・行方・宇太・日理と、当時は常陸国に含まれていた菊多六郡からなるもので、名取郡とは阿武隈川を境界としていたとみられる。続く養老3年（719）の記載からは常陸国から太平洋沿岸を北上する「海道」が存在し、そこに10箇所の駅家を新たに設置したことが記されている。この「海道」は地形的な要因から岩沼市玉崎地区に存在が確定してきた玉前駅家に至ると考えられ、玉前の地が從来の東山道と「海道」が合流・分岐する交通要衝地となった。残念ながら「海道」10駅については名称が伝わらず、詳細は不明である。なお、石城国と石背国は養老5年（721）に再び陸奥国に併合されるが、「海道」は弘仁2年（813）まで存続しており、都と陸奥国との情報伝達や、約38年という長期にわたる蝦夷との衝突で必要となる物資を多賀城、及び現在の宮城県北部から岩手県南部にかけて設置された城柵への輸送のために利用されたとみられる（永田2018）。

陸奥国的主要官道である東山道についてみてみると、現在の福島県中通地域を北上し、国見峠を越えて宮城県へと至る。『延喜式』をみると、宮城県には篤借・柴田・小野・名取・玉前・栖屋・黒川・色麻・玉造・栗原の10駅が存在するとみられる。陸奥・出羽两国に整備された駅路や駅家については律令国家と蝦夷との軋轢によって進退があり、一様ではない。この各時期ごとの駅路・駅家の位置推定については中村太一氏によって整理、提示されている（中村2020）。なお、『延喜式』には各駅家に配置された駅馬の頭数も記され、県南部域に存在が推定される篤借・柴田・小野は10頭である

第79図 陸奥国内古代道の変遷（左：伊治公僭麻呂の乱以前 右：『延喜式』成立時点）
※中村太一 2020 を参考にして作成

1. 原遺跡第1次調査（第7地点）

が、玉前を含めたその他の駅家は各5頭となっている。前述のように東山道と東海道からの連絡路である「海道」の合流・分歧の地である玉前駅家の駆馬頭数の少なさは、『延喜式』が編纂された10世紀には征夷政策の終了に伴う海道10駅の廃止と、宝亀11年（780）に勃発した伊治公麿麻呂の乱を受けた東山道本線の路線が嶺基駅・玉野駒ルートから、小野駅・最上駅ルートへ変更となり、玉前駅家の重要性が低くなつた結果と考えられる。

遺跡周辺ではこれまで古代道路の発見は無いが、自然地形の観察からは西の柴田町方面からは阿武隈川北岸に形成された自然堤防を通て本遺跡へ至るとみられる。また南側の亘理町方面からは、「海道」が9世紀段階の亘理郡家である三十三間堂官衙遺跡が立地する丘陵裾部を通過し、本遺跡の対岸付近から渡船を用いて渡河したとみられる（永田2018）。本遺跡から北上するルートとしては、從来は低湿地と丘陵部が入り組む市域西部の丘陵裾部付近を通過して名取市熊野堂付近で名取川を渡河すると想定されていたが（木下2009）、市史編纂事業に伴う発掘調査の結果から本遺跡が立地する自然堤防から市街地の下で堆積している第I浜堤列上を通過して名取市増田方面へと向かうルートも提示されている（白鳥2015・2018）。

【駅家関連遺跡の様相と構造】

次に駅家・刻遺跡の構造についてみていくたいのが、『延喜式』では全国で402箇所の駅家が設置されていたことを記しているものの、これまで国内で駅家に関わる可能性が高い遺跡の数はごく少数に留まり、さらに駅家であることを確実視される遺跡は極めて少ない。また刻として明確に判断できる遺跡は、管見に触れた限りでは全く見られない。駅家遺跡については宮城県内はもとより、東北地方全域を見渡しても現時点では内容が良好に判明している遺跡は現時点では皆無であることから、ここでは山陽道に設置された兵庫県の布勢駅家に比定される小丸遺跡（龍野市教委1994）と野磨駅家に比定される落地遺跡（上郡町教委2005・2006）、西海道に設置された夷守駅家に比定される福岡県の内橋坪見遺跡（柏原町教委2019）、そして『延喜式』には記載がないものの、『常陸國風土記』に記載された藻島駅家に比定される茨城県の長者山遺跡（日立市教委2017）の事例をみていく。

布勢駅家に比定される小丸遺跡は兵庫県たつの市に所在する。遺跡の範囲は古代山陽道に中央を貫かれる東西300m、南北150mの不正楕円形で、中央には駅館院と呼ばれる築地塀で囲まれた一辺約80mの方形の区画がある。区画内にはほぼ真北方向でつくられた瓦葺の建物7棟が規則的に並び、特に中心的な建物は双室形式と呼ばれる広い室内空間をもつ特殊な建物である。また建物は同位置で掘立柱式から礎石式への造り替えも行われている。出土した瓦には丹が付着したものが認められ、『日本後紀』に記載される「瓦葺粉壁」の姿を伝えている。小丸遺跡の周辺東側では掘立柱建物や井戸など生活に密着した遺構・遺物が確認され、駅家の機能を支えるための施設や、駅家で働く人々（駅子）が居住した空間と推定されている。なお、井戸跡から出土した墨書き土器に「駅」「布勢井連家」等の文字、さらには「布勢駅」の文字のある木簡が出土したことから、遺跡が7世紀後半から11世紀前半頃にかけて機能した駅家であることが確実視されている。

野磨駅家に比定される落地遺跡は兵庫県上郡町に所在する。遺跡では2時期の駅館院が、300m離れた地点で発見されている。7世紀後半～8世紀前半頃の年代観が考えられるI期遺構は、古代山陽道に面する駅館院と周囲の掘立柱建物で、駅館院は柵列と門で区画された中に掘立柱建物群が規則的につくられている。建物は掘立柱式であるものの、門は八脚門である。8世紀後半～11世紀後半頃の年代観が考えられるII期は、北東に300m離れた場所に位置し、駅館院は東西68m、南北94mにわ

1. 原遺跡第1次調査（第7地点）

たって築地塀で区画される。建物はすべて瓦葺である。また、大型の中央建物は布勢駅家と同様に双室形式の可能性がある。さらに白く塗られた壁土や赤色塗料が付着した瓦が出土している。区内に建物群を計画的に配置するという駅館院の存在はI期から確認でき、II期になってから瓦葺建物に変化することが判明している。

夷守駅家に比定される内橋坪見遺跡は福岡県糟屋郡粕屋町に所在する。発見された古代の官衙遺構は、推定駅路に隣接して存在する。7世紀末～8世紀前半にかけての遺構は大型掘立柱建物群と、建物を囲むようにつくられた柵、そして敷地を大きく区画する区画溝がある。この時期の遺構は、遺跡の東側を通過すると考えられている駅路の軸線と同様の軸線でつくられている。これに対し8世紀中頃になると、真北方向の軸線で築地塀や礎石建物がつくられる。しかしながら、8世紀末以降は瓦が大量に廃棄され、明確な建物がみられなくなることから、官衙的な機能の縮小、あるいは中心的な施設の移転の可能性が考えられている。

常陸国から陸奥国へと向かう「海道」に設置された藻島駅家に比定される長者山遺跡は、茨城県日立市に所在する。長者山遺跡はこれまでの調査によって、7世紀後半から10世紀中葉にかけて営まれたと考えられており、『常陸國風土記』にその名がみえる藻島駅家に関連すると考えられる遺構群は、8世紀中葉から9世紀中葉頃の時期の遺構群と考えられている。駅家に関連するとみられる遺構は、道路の東側に東西134～165m、南北110～116mの不整台形状の区画内に存在し、区画内では掘立柱建物が計画的に配置され、同位置での建て替えが行われたことも確認されている。

上記の4遺跡の成果からは以下の共通・相違点がみられる。まず多くが共通する点としては①すべてが駅路、及び推定駅路に隣接している、②施設を取り囲む築地・溝・柵といった外郭施設を有する、③文書行政を行うための文房具がある、④駅家を管理するための建物群（正倉・厨・馬房など）が存在する、⑤施設の維持・管理を担う人々の集落などが付近に存在する、⑥真北方向、あるいはそれに近い主軸で建物群が形成される時期がある、などが挙げられる。本遺跡ではこのうち、2020年時点では①以外は可能性があるものも含めるとすべて認められている。一方で⑧瓦葺の建物がある、⑨駅路の入り口に門がある、⑩馬に関連する資料（馬具や馬歛など）がある、⑪施設名を記した出土文字資料がある、という点については必ずしも一致しない。特に④については大宰府から畿内へ向かう山陽道の駅家では外御使節の往来があることから壯麗であったことが『日本後紀』などに記されているが、それ以外の駅路では必ずしも求められていないようであり、長者山遺跡は本遺跡での瓦出土量の稀少さはこれを裏付けるものとしてとらえられる。なお、本遺跡では⑫については発見事例がある。このほか駅家を維持する財源となる駅田の存在も考慮に入れねばならないが、管見に触れた限りでは上記4遺跡、及び本遺跡では未発見である。

以上、地名と駅路ルート、そして取り上げた事例は少ないが駅家の可能性が高い遺跡との検討から、本遺跡で確認されている遺構を玉前駅家と関連付けることに大きな支障はないと思われる。

【玉前刻について】

次に多賀城跡外郭西面で確認された9世紀代の遺構である南北大溝SD1526から出土した木簡に記された玉前刻についてみていく。はじめに玉前刻の名が記された木簡の釈文を以下に記す。なお、木簡には3種類の文章・文字が記されているが、ここでは玉前刻に関連したもののみを記す。

『口度口見』安積团解　□口番□口事

畢番度玉前刻遷本土安積團会津郡番度（以下、異筆とみられるところから省略）

1. 原遺跡第1次調査（第7地点）

これは安積団が発給する解の習書とみられるもので、安積団に属する会津郡の兵士が多賀城での上番勤務が終了したことから、「玉前割」を通して帰還することを申請したものである。この木簡の発見により、少なくとも陸奥国内には下野国との国境に設けられた白河割、常陸国との国境に設けられた菊多割以外にも割が存在していたことが明らかとなった（多賀城研 2013）。

この木簡の持つ意味はほかにもある。古代の閥創の設置について記した『合集解』職員令「大国」条では、閥は「検判之閥」として通行者を取り締まるために設置するとしているのに対し、割は「斬權之所」として防御施設のひとつとして設置することが記されている。しかしながら、本木簡の記載からは「玉前割」を経ることについて申請するものであり、割では許可を受けていない人については軍団の兵士といえども通行を認めない、という閥と同様の措置が取られていたことをうかがわせる。このような閥と割の機能が規定どおり分化されていない状況について館野和己氏は、『出雲國風土記』にみえる閥と割が混用されていることを踏まえ、閥と割の両者は同様の目的のもとに設置されていた可能性を指摘している（館野 1998）。なお、玉前割は木簡の年代から9世紀代までは機能していたとみられるが、廢止の時期は不明である。同様に設置の時期についても明らかに示す史料は無いが、閥・割がともに国境の地に設けられていた点に注目すると、前述した養老2年（718）に陸奥国から石城国・石背国が分離された際の国境が阿武隈川であるので、陸奥国側の国境の地であり、東山道と「海道」が合流・分岐する交通要衝地を防備し、また人や物資の移動を検閲する目的で設置された可能性も考えられている（今泉 2005）。明確な刻跡の遺跡はこれまで確認されていないために構成などは不明であるが、本遺跡でこれまでの調査で出土した円面鏡の個体数が比較的多いことを勘案すると、駅家に併置されていた可能性も十分考えられる。

【小結】

これまで地域に残る字名や古代史料の検討から岩沼市南部域である玉崎地区に駅家や割が設置されたとみられてきたが、本遺跡が立地する自然地形からは調査地付近に駅路が通過することが想定され、また本調査地で発見された掘立柱建物の柱拠方の規模や、円面鏡をはじめとした遺物からは官衙的な要素が強いことが明らかとなった。各地で発見されつつある駅家遺跡との比較では、建物の配置や構造の点では必ずしも一致するわけではないが、調査事例を積み重ねることで西日本とは異なる東日本の駅家や割の姿が見えてくるものと思われる。

【註】

- 令和元年7月13・14日に奈良文化財研究所において開催されたシンポジウムの閉会後に玉田 労英氏、尾野 善裕氏、神野 恵氏に本資料を実見していただき機会を得た。本指摘は後日、神野氏よりいただいた意見である。なお、神野氏にはこのほか、生産地の候補や類例について数多くご教示いただいた。
- 平成31年3月に鈴木敏則氏の案内により湖西市出土品収蔵庫にて実見させていただいた。さらに後藤 健一氏にも実見していただき、湖西窑製品である可能性が低いことをご教示いただいた。
- 令和元年5月に行われた日本考古学会講演会終了後、酒井 清治氏、渡辺 博人氏、利部 修氏に本資料を実見していただき機会があり、渡辺氏より美濃須衛窑出土品の可能性を指摘された。その後、渡辺氏より改めて窯洞窑製品と胎土、及び焼灰による自然釉の色調について強烈類似性が認められることをご教示いただいている。
- 尾野 善裕氏によるご教示。
- 歴史史料を用いたこの分野研究は非常に多岐にわたるため、ここで個別資料の掲示は行わないが、近年の成果を多角的にまとめたものには『日本古代の交通・交流・情報1～3』（館野・出田編 2016）がある。

f. 総括

- 原遺跡は宮城県中央部南寄りの岩沼市南長谷字原・中原・上原・北上・角方地内に所在する。遺跡は南側を東流する阿武隈川によって形成された自然堤防上に立地している。
- 今回の発掘調査は農村地域復興再生基盤整備事業を原因とする事前調査として実施した。調査区は遺跡内を南北方向に縱断する排水路予定地であり、発掘調査面積は515 m²である。
- 確認した遺構は掘立柱建物跡3棟、堅穴建物跡25棟、木材堆1列、溝跡13条、土坑、柱穴多数である。
- 出土した遺物は縄文時代の土器、弥生時代の土器・石製品、古墳時代中期から平安時代にかけての土師器・須恵器である。このうち主なものは6世紀末葉から9世紀前半にかけての土師器・須恵器である。
- 出土した遺物には在地産の土器と遠隔地から搬入されたものがある。他地域から搬入された土器のうち、SI23から出土した須恵器円面鏡は美濃須衛窯群の製品と考えられるものである。また猿投窯群の製品であるフラスコ形長頸瓶や、東日本では希少な蒸気孔に栓を取付けた土師器壺なども出土している。
- 発見された遺構のうち、SB02・SB03掘立柱建物跡の柱穴掘方は1辺が1mを超える方形であることから官衙的な建物と考えられ、須恵器円面鏡とあわせて律令国家が成立に関与した施設の存在が考えられる。
- 遺跡が所在する地域は、古代においては東山道と、茨城県から福島県・宮城県南部の太平洋側に設置された「海道」の合流・分岐地であることから、発見された官衙関連の遺構・遺物は『延喜式』に記載される玉前駅家、あるいは多賀城跡から出土した木簡によって存在が明らかとなった玉前割に関わるものとみられる。
- 古代交通の重要な拠点施設である駅家に関する遺跡の発見は国内でもいまだに数少なく、調査によって発見された遺構・遺物は律令国家が構築した交通体系の実態を考える上で、極めて重要な成果である。

1. 原遺跡第1次調査（第7地点）

1. 原遺跡第1次調査（第7地点）

【引用・参考文献】

愛知県史編さん委員会 2015『愛知県史 別編 畜業I 古代 猿投塚』

生田和安 2003「城柵官衙遺跡における陶瓦の様相 -多賀城を中心として-」『古代の陶瓦をめぐる諸問題 -地方における文書行政をめぐって-』奈良文化財研究所

今泉隆雄 2005「古代国家と郡山遺跡」『宮城県仙台市郡山遺跡発掘調査報告書 -総括編(1)-』仙台市文化財調査報告書第283集

岩沼市 1992『岩沼市土地分類調査(細部調査)報告書・現況調査編』

岩沼市教育委員会 2005a『長徳寺前遺跡』岩沼市文化財調査報告書第5集

岩沼市教育委員会 2005b『鶴ヶ崎城跡 第4地点』岩沼市文化財調査報告書第6集

岩沼市教育委員会 2007『朝日古墳群』岩沼市文化財調査報告書第7集

岩沼市教育委員会 2009『猪飼城跡内遺跡』岩沼市文化財調査報告書第8集

岩沼市教育委員会 2010『丸山遺跡』岩沼市文化財調査報告書第9集

岩沼市教育委員会 2011『西須賀原遺跡』岩沼市文化財調査報告書第10集

岩沼市教育委員会 2012『上根崎遺跡』岩沼市文化財調査報告書第11集

岩沼市教育委員会 2016a『東日本大震災復興関連埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』岩沼市文化財調査報告書第14集

岩沼市教育委員会 2016b『東日本大震災復興関連埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』岩沼市文化財調査報告書第15集

岩沼市教育委員会 2016c『高大瀬遺跡』岩沼市文化財調査報告書第16集

岩沼市教育委員会 2017a『貞山遺跡』岩沼市文化財調査報告書第17集

岩沼市教育委員会 2017b『東日本大震災復興関連埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』岩沼市文化財調査報告書第18集

岩沼市教育委員会 2018 a『原遺跡第2次調査概要報告書』岩沼市文化財調査報告書第19集

岩沼市教育委員会 2018 b『下野原遺跡』岩沼市文化財調査報告書第20集

岩沼市教育委員会 2018 a『原遺跡第3次調査概要報告書』岩沼市文化財調査報告書第21集

岩沼市教育委員会 2018 b『市内調査報告書』岩沼市文化財調査報告書第22集

岩沼市教育委員会 2019 c『熊野遺跡第1・2次調査報告書』岩沼市文化財調査報告書第23集

岩沼市教育委員会 2020a『原遺跡第4次調査概要報告書』岩沼市文化財調査報告書第24集

岩沼市教育委員会 2020 b『市内調査報告書2』岩沼市文化財調査報告書第25集

岩沼市教育委員会 2021『原遺跡第5次調査概要報告書』岩沼市文化財調査報告書第26集

岩沼市史編纂委員会 2015『岩沼市史』第4巻 資料編I 考古

岩沼市史編纂委員会 2018『岩沼市史』第1巻 通史編I 原始・古代・中世

近江俊秀 2006『古代国家と道路 考古学からの検証』青木書店

近江俊秀 2012『道が語る日本の古代史』朝日新聞出版

近江俊秀 2013『古代道路の謎 奈良時代的巨大国家プロジェクト』祥伝社

近江俊秀 2014『日本古代の道路 -道路は社会をどう変えたのか-』角川選書

近江俊秀 2016『古代日本の情報戦略』朝日新聞出版

各務原市教育委員会 1984『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』各務原市資料調査報告書第4号

角田市教育委員会 1997『住社遺跡』角田市文化財調査報告書第19集

柏原町教育委員会 2019『内柿坪遺跡1次・2次』柏原町文化財調査報告書第44集

上郡町教育委員会 2005『落地遺跡(八反坪地区)』上郡町文化財調査報告3

上郡町教育委員会 2006『古代山陽道野瀬駅跡』上郡町文化財調査報告4

岸本道昭 2006『山陽道駅跡』日本の遺跡 11 同成社

北野博司 2006『硯を研ぐ』『陶磁器の社会史』柏書房

木下良 2009『事典 日本古代の道と駅』吉川弘文館

木本雅晴 2008『遺跡からみた古代の駅』日本史リブレット 69 山川出版

郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団 2002『荒井畠遺跡(II区) -第14次発掘調査報告書-』郡山南拠点土地画整理事業関連

畜野裕彦 2015『3-10原遺跡』岩沼市史 第4巻 資料編I 考古』

色麻町教育委員会 1993『日の出山窯跡群』色麻町文化財調査報告書第1集

志間泰治 1958『宮城県角田町住社発見の堅穴住居跡とその考察』

白鳥良一 2015『特論1 岩沼市内の東山道と玉前駅・割(櫻)』『岩沼市史』第4巻 資料編I 考古』

白鳥良一 2018『第八章 東山道・東海道駅跡と岩沼』『岩沼市史』第1巻 通史編I 原始・古代・中世』

開根章義 2014『古代陸奥国における陶窯の受容と展開 -城柵官衙遺跡を中心として-』季刊『古代文化』第66巻第3号 古代学協会

仙台市教育委員会 1995『下飯田遺跡』仙台市文化財調査報告書第191集

仙台市教育委員会 2004『郡山遺跡24』仙台市文化財調査報告書第269集

多賀城跡調査研究所 1980『伊治城跡III』多賀城関連調査報告書第5冊

多賀城跡調査研究所 1983『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1984 多賀城跡』

多賀城跡調査研究所 1982『第4章 遺物 3 碑』『多賀城跡 政府跡』

多賀城跡調査研究所 1992『東山遺跡IV -賀美町街跡推定地-』多賀城関連遺跡探査報告書第17冊

多賀城跡調査研究所 2013『多賀城跡木彌II』宮城県多賀城跡調査研究所資料III

武部健一 2015『道路の日本 古代道路から高速道路』 中公新書

龍野市教育委員会 1994『布勢駅家II』龍野市文化財調査報告11

館野和巳 1998『開津道路における交通検察』『日本古代の交通と社会』 塙書房

館野和巳・出田和久編 2016『日本古代の交通・交流・情報』1~3 吉川弘文館

田中広明 2004『七世紀の陶窯と東国の地方官衙』『歴史論評』2004年11月号 歴史科学協議会

田中広明 2007『古代の官衙や集落と陶窯』『研究紀要』第22号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

辻 秀人編 2007『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』 東北学院大学文学部

東北福祉大学吉井ゼミナール 2011『鶴ヶ崎城跡(岩沼要害)』第10次発掘調査報告書

永田英明 2004『古代駆馬制度の研究』吉川弘文館

永田英明 2015『古代東北の内陸水運 -最上川・阿武隈川流域を中心に-』『日本古代の運河と水上交通』八木書店

永田英明 2018『第八章 三 玉前駅・玉前駅と阿武隈川』『岩沼市史』第1巻 通史編I 原始・古代・中世』

中村太一 2020『羽卵における駅路体系とその変遷』『日本古代の都城と交通』八木書店

奈良文化財研究所 2007『平城京出土陶磧集成II -平城京・寺院-』奈良文化財研究所史料第80冊

奈良文化財研究所 2009『平城京出土陶磧集成I -平城宮跡-』奈良文化財研究所史料第77冊

日立市教育委員会 2017『東海道常陸路及び長者官邸遺跡』日立市文化財調査報告第108集

藤岡謙二郎編 1978『古代日本の交通路 I~H』大明出版社

宮城県教育委員会 1981『東山遺跡』『東北自動車道遺跡調査報告書V』宮城県文化財調査報告書第81集

宮城県教育委員会 1987『観沢・大沢窯跡ほか』宮城県文化財調査報告書第116集

宮城県教育委員会 1994『郷瀬遺跡』宮城県文化財調査報告書第134集

宮城県教育委員会 1993『北原遺跡』宮城県文化財調査報告書第159集

宮城県教育委員会 1996『玉山遺跡IV』宮城県文化財調査報告書第171集

宮城県教育委員会 1997『玉山遺跡V』宮城県文化財調査報告書第174集

宮城県教育委員会 2018『玉山遺跡VI』宮城県文化財調査報告書第246集

村田晃一 1994『土器からみた官衙の終末 -東北地方の場合-』『古官衙の終末をめぐる諸問題 第1分冊問題提起・各地方の概要』 東日本埋蔵文化財研究会

村田晃一 2007『V. 宮城県中部から南部』『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』 東北学院大学文学部

矢本町教育委員会 2001『赤井遺跡』矢本町文化財調査報告書第15集

利府町教育委員会 1988『八幡B遺跡』利府町文化財調査報告書第4集

写真図版1



1 第1次調査空撮（南西から）



2 第1次調査空撮（北西から）

写真図版2



1 北側調査区空撮（西から）



2 南側調査区空撮（北西から）

写真図版3



1 北側調査区全景（南東から）



2 SB01（北東から）



3 SB01 P2（西から）



4 SI01（南から）



5 SI01 遺物出土状況（南から）

写真図版4



1 SI02（南から）



2 SI03（南から）



3 SI03 カマ下脚（南東から）



4 SI06（南から）



5 SI07（南から）

写真図版5



1 SI08 (南から)



2 SI08 カマド (南から)



3 SI09 (東から)



4 SI09 新カマド埋道部 (東から)



5 SX01・SI04 (南東から)



6 SD03 (西から)



7 北側調査区全景 (北から)



8 北側調査区作業風景 (南西から)



1 南側調査区全景 (北から)



2 SB03 (北西から)



3 SB02 P4・SB03 P2 (西から)



4 SB03 P4 (東から)

写真図版6

写真図版 7



1 SI12 (東から)



2 SI12 遺物出土状況 (南から)



3 SI15 (南西から)



4 SI17 + I8 遺物出土状況 (南から)



5 SI17 遺物出土状況 (東から)



6 SI20 (南から)

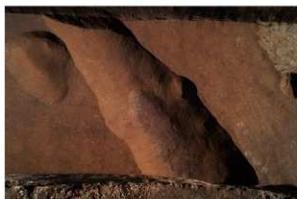


7 SI22 + 23 (南西から)



8 SI23 須恵器円面鏡出土状況 (北から)

写真図版 8



1 SD10 (西から)



2 SD12 + SK38 土層断面 (西から)



3 SD12 遺物出土状況 (西から)



4 SD12 + I3 (北西から)



5 SD13 土層断面 (南西から)

写真図版 9



1 土師器・高坏 (第 11 図 1)



2 土師器・高坏 (第 11 図 2)



3 土師器・壺 (第 11 図 3)



4 土師器・壺 (第 13 図 4)



5 土師器・壺 (第 13 図 5)



6 土師器・壺 (第 13 図 6)



7 土師器・壺 (第 15 図 1)



8 土師器・壺 (第 17 図 2)



1 土製品・土玉 (第 17 図 4)



2 土製品・土玉 (第 17 図 5)



3 土師器・壺 (第 19 図 3)



4 土師器・壺 (第 20 図 1)



5 土師器・壺の蒸気孔 (第 20 図 1)



6 土師器・壺 (第 22 図 5)



8 須恵器・長颈瓶 (第 22 図 6)



9 土師器・壺 (第 24 図 1)

写真図版 10

写真図版 11



1 土師器・壺（第24図5）



2 土師器・壺（第26図2）



3 土師器・壺（第26図5）



4 土師器・壺（第44図1）



5 土師器・壺（第44図3）



6 土師器・壺（第44図4）



7 須恵器・壺（第46図3）



8 土師器・高壺（第48図2）

写真図版 12



1 土師器・壺（第48図5）



2 土師器・壺（第48図6）



3 土師器・壺（第48図7）



4 須恵器・高台壺（第51図1）



5 土師器・壺（第54図1）



6 土師器・壺（第54図2）



7 土師器・壺（第54図4）



8 土師器・壺（第54図6）

写真図版 13



1 土器器・瓶 (第 54 図 7)



2 須恵器・罐 (第 56 図 2)



3 須恵器・円面鏡 (第 60 図 1)



4 円面鏡縁部の様子 (第 60 図 1)



5 円面鏡縁部の内側に残る当具痕 (第 60 図 1)



6 円面鏡の脚部 (第 60 図 1)



7 土器器・高坏 (第 60 図 2)



8 土器器・壺 (第 33 図 3)

写真図版 14



1 土器器・坏 (第 34 図 1)



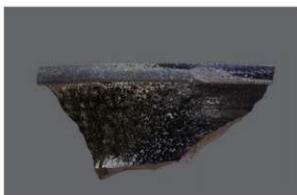
2 須恵器・鉢 (第 34 図 10)



3 土器器・高坏 (第 35 図 3)



4 須恵器・高台坏 (第 35 図 5)



5 須恵器・壺 (第 35 図 11)



6 須恵器・鉢 (第 36 図 12)



7 須恵器・壺 (第 36 図 14)



8 石製品・石泡丁 (第 36 図 16)

写真図版 15



1 土師器・高坏 (第 40 図 1)



2 土師器・高坏 (第 42 図 1)



3 須恵器・坏 (第 66 図 1)



4 土師器・坏 (第 66 図 3)



5 須恵器・壺 (第 66 図 8)



1 赤土器・器台? (第 68 図 3)



2 土製品・紡錘草 (第 68 図 4)



3 土師器・高台坏 (第 69 図 4)



4 須恵器・坏 (第 69 図 9)



5 須恵器・円面鏡 (第 69 図 13)



6 土師器・坏 (第 70 図 3)



7 土師器・壺 (第 71 図 14)



8 須恵器・フラスコ形瓶 (第 72 図 22)

2. 棚遺跡（第3次調査）

2. 棚遺跡

a. 遺跡の位置と環境

棚遺跡はJR岩沼駅の南南西約3.1kmに位置する。自然地形としては、阿武隈川左岸で形成された自然堤防上に広がる。遺跡内では平成22・23年に市史編纂事業に伴う調査が行われ、溝跡、土坑、柱穴などの遺構のほか、繩文土器、土師器、須恵器、土製品などの遺物が発見されている（斎野2015d）。



b. 調査の経過

棚遺跡での調査は、平成28年11月22日から12月9日にかけて実施した。当初は新たに排水路が敷設される範囲内にトレレンチを長さ5m、幅2mのトレレンチを7箇所設定し、重機を用いて表土の掘削を行った。その結果、1～3トレレンチで柱穴を主体とする遺構が多数発見されたこと、さらに平成22・23年に実施した調査成果を踏まえ、3トレレンチの北側を40mほど拡張して調査を行うこととした。これらの表土掘削後、人力によって遺構確認面であるにぶい黄褐色シルト層上面での遺構精査と掘り下げを行った。また作業状況に合わせ遺構セクション図の作成や平面実測、写真撮影を行い、そして各トレレンチの位置を測量した後に埋戻しを行っている。

c. 調査成果

調査では1・2・3トレレンチで掘立柱建物跡11棟、溝跡8条、性格不明遺構2基、土坑5基、柱穴の構造を検出し、土師器、須恵器、近世陶磁器、土製品などの遺物が出土している。なお、今回の調査区は幅が2mと極めて狭く、掘立柱建物跡については全体像を把握したものはない。このため、掘立柱建物跡についてはあくまで可能性の提示に留まることを予めお断りする。

・掘立柱建物跡

【SB01】(第83図)

2トレレンチに存在する東西1間以上、南北1間以上の南北棟と考えられる。柱穴は3口検出し、2口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長1.3m以上で、梁行は約1.1m以上である。建物の主軸は南列で計測すると24°東へ傾く。柱穴の掘方の形状は梢円形で、柱痕跡の直径は9cmの円形である。

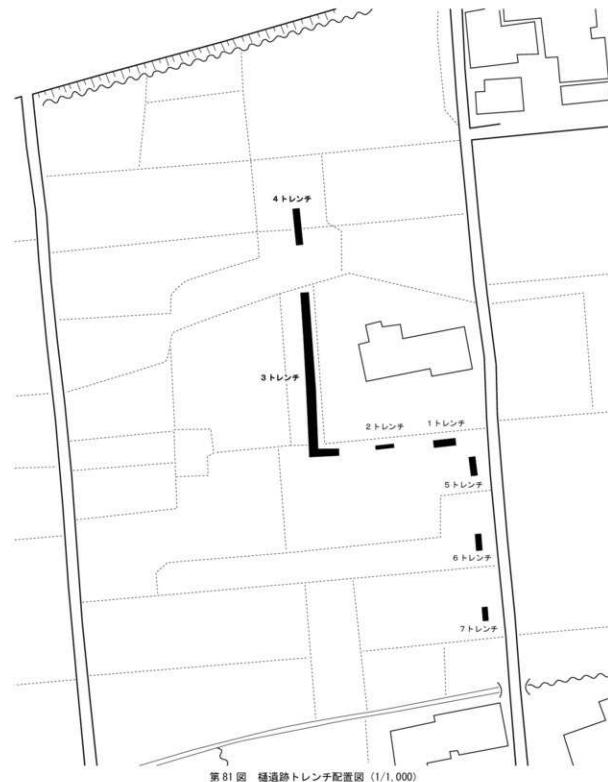
【SB02】(第83図)

2トレレンチに存在する東西1間以上、南北2間の東西棟と考えられる。柱穴は4口検出し、2口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長1.6m以上で、梁行は総長1.8mで、各柱間は0.9mである。建物の主軸は西列で計測すると75°西へ傾く。柱穴の掘方の形状は梢円形及び方形で、柱痕跡の直径は9cmの円形である。

【SB03】(第84図)

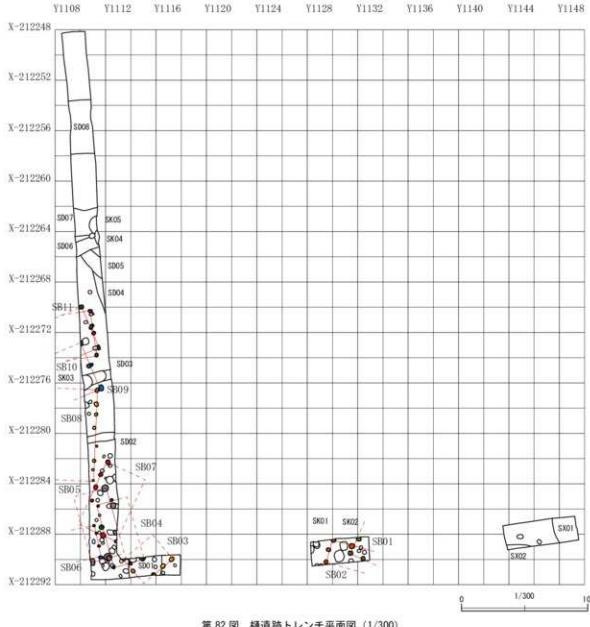
3トレレンチ南東部に存在する東西3間以上、南北2間以上の東西棟と考えられる。SD01と重複し、

2. 棚遺跡（第3次調査）



第81図 棚遺跡トレレンチ配置図 (1/1,000)

2. 棚遺跡（第3次調査）



これより新しい。柱穴は 5 口検出し、2 口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が推定総長 3.0 m で各柱間は 1.0 m、梁行は推定総長 2.4 m で各柱間は 1.2 m である。建物の主軸は西列で計測すると 51° 東へ傾く。柱穴の掘方の形状は梢円形で、柱痕跡の直径は 12 cm の円形である。

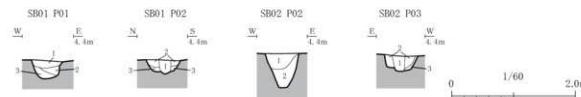
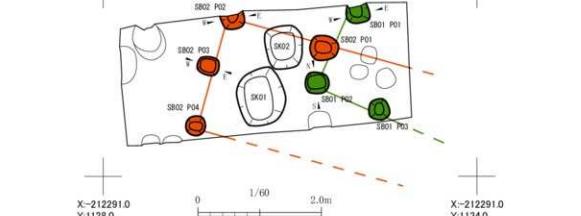
【SB04】(第 84 図)

3 ドレンジ南部に存在する東西 2 間、南北 3 間の南北棟と考えられる。柱穴は 6 口検出し、3 口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 5.1 m で各柱間は推定 1.7 m、梁行は総長 2.5 m で確認した各柱間は 1.2・1.3 m である。建物の主軸は南列で計測すると 15° 西へ傾く。柱穴の掘方の形状は梢円形で、柱痕跡の直径は 9～15 cm の円形である。

【SB05】(第 84・85 図)

3 ドレンジ南部に存在する東西 2 間、南北 3 間の南北棟と考えられる。柱穴は 5 口検出し、2 口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が推定総長 5.4 m で確認した各柱間は 1.6・2.0 m、梁行は推定総長 2.8 m で確認した柱間は 1.3 m である。建物の主軸は南列で計測すると 16° 西へ傾く。柱穴の

2. 棚遺跡（第3次調査）



第 83 図 SB01・SB02

SB01 土層注記

P01 土層注記			備考
層 No.	土色	土質	
1	暗褐色	(10YR3/3) シルト	褐色シルト粒を多量含む。
2	黒褐色	(10YR2/2) シルト	にぶい 黄褐色シルト粒を少量含む。
3	暗褐色	(10YR3/2) シルト	褐色シルト中ブロックを微量含む。

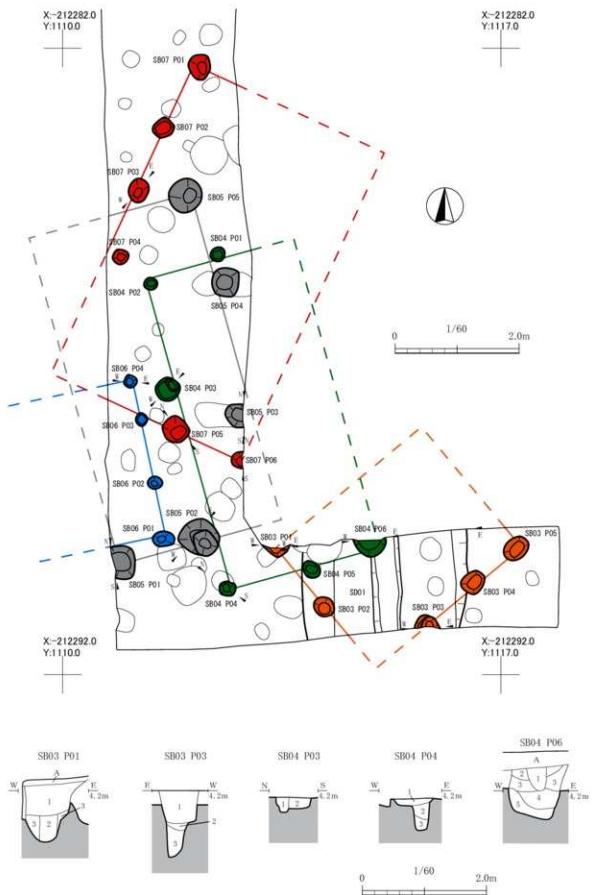
P02 土層注記			備考
層 No.	土色	土質	
1	暗褐色	(10YR2/3) シルト	にぶい 黄褐色シルト小ブロックをやや多く含む。
2	黒褐色	(10YR2/2) シルト	暗褐色シルト小ブロックをやや多く、にぶい 黄褐色シルト粒を少量含む。
3	黒褐色	(10YR2/2) シルト	褐色シルト小ブロックを少量含む。

SB02 土層注記

P03 土層注記			備考
層 No.	土色	土質	
1	暗褐色	(10YR3/3) シルト	にぶい 黄褐色シルト粒を多量含む。
2	暗褐色	(10YR3/3) シルト	にぶい 黄褐色シルト粒を少量含む。
3	黒褐色	(10YR2/2) シルト	にぶい 黄褐色シルト粒・褐色シルト小ブロックを微量含む。

P04 土層注記			備考
層 No.	土色	土質	
1	暗褐色	(10YR3/3) シルト	褐色シルト小ブロックをやや多く含む。
2	暗褐色	(10YR3/3) シルト	にぶい 黄褐色シルト粒を少量含む。
3	黒褐色	(10YR2/2) シルト	にぶい 黄褐色シルト粒・褐色シルト小ブロックを微量含む。

2. 植造跡（第3次調査）



第 84 図 SB03 ~ 07



第 85 図 SB05 ~ 07 土層断面図

SB03 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3) シルト	褐色シルト中ブロックを多量、礫土粒を微量含む。
2	黒褐色	(10YR2/2) シルト	褐色シルト小ブロックを少量含む。
3	黒褐色	(10YR2/2) シルト	褐色シルト中ブロックをやや多く含む。

P03 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2) シルト	にぶい、黄褐色シルト粒を少量含む。
2	黒褐色	(10YR2/3) シルト	褐色シルト小ブロックをやや多く含む。
3	黒褐色	(10YR2/3) シルト	褐色シルト小ブロックを少量含む。

SB04 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2) シルト	褐色シルト小ブロックをやや多く含む。
2	黒褐色	(10YR2/3) シルト	暗褐色シルト中ブロックを多量、褐色シルト小ブロックをやや多く含む。

P04 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3) シルト	褐色・暗褐色シルト小ブロックを少量含む。
2	黒褐色	(10YR2/3) シルト	褐色シルト小ブロックをやや多く含む。
3	褐色	(10YR4/4) シルト	黒褐色シルト中ブロックを多量含む。

P06 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3) シルト	にぶい、黄褐色シルト小ブロックを多量含む。
2	にぶい 黄褐色	(10YR4/3) シルト	黒褐色シルト粒をやや多く含む。
3	黒褐色	(10YR3/1) シルト	暗褐色シルト小ブロックを極めて多量、炭化物を微量含む。
4	黒褐色	(10YR2/2) シルト	褐色シルト小ブロックを含めて多量含む。
5	黒褐色	(10YR2/2) シルト	褐色シルト小ブロックをやや多く、礫土粒をごく微量含む。

SB05 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2) シルト	褐色シルト小ブロックを少量含む。
2	暗褐色	(10YR3/3) シルト	にぶい、暗褐色シルト中ブロックをやや多く含む。
3	黒褐色	(10YR2/3) シルト	にぶい、黄褐色・褐色シルト小ブロックを少量含む。
4	黒褐色	(10YR2/3) シルト	褐色シルト小ブロックを多量含む。

P02 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/3) シルト	にぶい、黄褐色砂質シルト小ブロックを少量含む。
2	黒褐色	(10YR2/2) シルト	褐色シルト中ブロックをやや多く含む。
3	黒褐色	(10YR2/3) シルト	褐色シルト小ブロックを多量含む。

P03 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3) シルト	黒褐色シルト小ブロックを極めて多量含む。
2	黒褐色	(10YR2/3) シルト	暗褐色シルト小ブロックを少量、褐色シルト粒を微量含む。
3	黒褐色	(10YR2/2) シルト	褐色シルト小ブロックをやや多く含む。

2. 植造跡（第3次調査）

2. 桁遺跡（第3次調査）

SB06 土層注記

P04 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2) シルト	灰白色シルト中ブロックを微量含む。
2	黒褐色	(10YR2/3) シルト	褐色シルト小ブロックをやや多く含む。

SB07 土層注記

P05 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	褐色灰色	(10YR4/1) シルト	にぶい褐色シルト小ブロックを多量、褐色シルト小ブロックを少量含む。
2	黒褐色	(10YR2/2) シルト	褐色シルト粒を少額含む。
3	黒褐色	(10YR2/3) シルト	褐色シルト小ブロックをやや多く含む。
4	にぶい褐色	(10YR4/3) 砂質シルト	黒褐色シルト小ブロックを少量含む。

P06 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2) シルト	褐色シルト粒を微量含む。
2	黒褐色	(10YR3/1) シルト	にぶい褐色シルト中ブロックをやや多く含む。
3	暗褐色	(10YR3/3) シルト	黒褐色シルト小ブロックを多量含む。

掘方の形状は梢円形で、柱痕跡の直径は9～20cmの円形である。

【SB06】(第84・85図)

3トレンチ南西部に存在する南北3間の南北棟と考えられる。柱穴は4口検出し、2口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長2.6mで柱間は0.6～1.0m、梁行は調査区外に広がると考えられ不明である。建物の主軸は東列で計測すると16°西へ傾く。柱穴の掘方の形状は梢円形及び円形で、柱痕跡の直径は9cmの円形である。

【SB07】(第84・85図)

3トレンチ南部に存在する東西2間以上、南北3間以上の南北棟と考えられる。柱穴は6口検出し、3口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が推定総長5.4mで各柱間は1.1m、梁行は推定総長3.3mで確認した柱間は1.2mである。建物の主軸は南列で計測すると25°西へ傾く。柱穴の掘方の形状は梢円形で、柱痕跡の直径は12～15cmの円形である。

【SB08】(第86図)

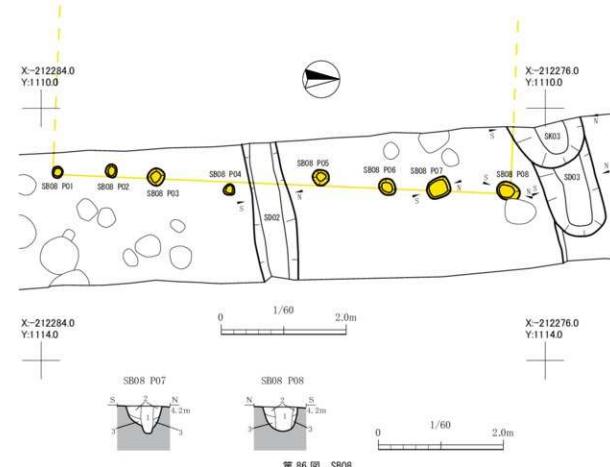
3トレンチ中央部南寄りに存在する南北7間の南北棟と考えられる。SB09と重複し、これより古い。柱穴は8口検出し、3口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長7.3mで柱間は0.8～1.3m、梁行は調査区外に広がると考えられ不明である。建物の主軸は東列で計測すると2°東へ傾く。柱穴の掘方の形状は梢円形及び長方形で、柱痕跡の直径は6～9cmの円形である。

【SB09】(第87図)

3トレンチ中央部に存在する東西棟と考えられる。SB08と重複し、これより新しい。柱穴は3口検出し、2口で柱痕跡を確認した。平面規模は、桁行は調査区外に広がると考えられ不明であるが、梁行は総長4.0mで各柱間は2.0mである。建物の主軸は東列で計測すると24°東へ傾く。柱穴の掘方の形状は不正方形で、柱痕跡の直径は12～15cmの円形である。

【SB10】(第87図)

3トレンチ中央部に存在する東西棟と考えられる。柱穴は3口検出し、2口で柱痕跡を確認した。平面規模は、桁行は調査区外に広がると考えられ不明であるが、梁行は総長3.6mで各柱間は1.8m



SB08 土層注記

P07 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2) シルト	褐色シルト小ブロックを微量含む。
2	黒褐色	(10YR2/3) シルト	褐色シルト中ブロックをやや多く含む。
3	黒褐色	(10YR3/1) シルト	褐色シルト大ブロックをやや多く含む。

P08 土層注記

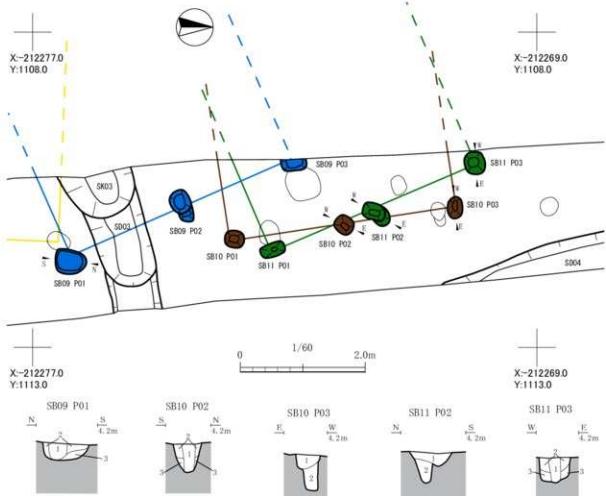
層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2) シルト	にぶい褐色シルト粒をやや多く含む。
2	黒褐色	(10YR2/3) シルト	暗褐色シルト小ブロックを少額含む。
3	黒褐色	(10YR3/1) シルト	褐色砂質シルト大ブロックを極めて多量含む。

である。建物の主軸は東列で計測すると81°東へ傾く。柱穴の掘方の形状は梢円形及び方形で、柱痕跡の直径は9～15cmの円形である。

【SB11】(第87図)

3トレンチ中央部に存在する東西棟と考えられる。柱穴は3口検出し、2口で柱痕跡を確認した。平面規模は、桁行は調査区外に広がると考えられ不明であるが、梁行は総長3.6mで各柱間は1.8mである。建物の主軸は東列で計測すると67°東へ傾く。柱穴の掘方の形状は長方形で、柱痕跡の直

2. 植遺跡（第3次調査）



第87図 SB09～11

SB09 土層注記

P01 土層注記			
層%	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2) シルト	褐色シルト小ブロックを微量含む。
2	暗褐色	(10YR3/3) シルト	黒褐色シルト中ブロックを極めて多量含む。
3	にぶい黄褐色	(10YR4/3) 砂質シルト	黒褐色シルト小ブロックをやや多く含む。

SB10 土層注記

P02 土層注記			
層%	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2) シルト	褐色シルト粒を少量含む。
2	黒褐色	(10YR3/1) シルト	暗褐色シルト中ブロックを少許含む。
3	黒褐色	(10YR2/3) シルト	褐色シルト粒をやや多く含む。

P03 土層注記

層%	土色	土質	備考
1	にぶい黄褐色	(10YR4/3) シルト	暗褐色シルト小ブロックをやや多く含む。
2	黒褐色	(10YR3/1) シルト	暗褐色シルト中ブロックをやや多く含む。

SB11 土層注記

P02 土層注記			
層%	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2) シルト	にぶい黄褐色シルト小ブロックをやや多く含む。
2	暗褐色	(10YR3/3) シルト	黒褐色シルト粒をやや多く含む。
3	黒褐色	(10YR2/3) シルト	にぶい黄褐色シルト粒を少量含む。

表 8 植遺跡掘立柱建物跡属性表

建物名	間数	棟方向	横行 総長 (m)	柱間寸法 (m)	測定 総柱 (m)	柱間寸法 (m)	測定 総柱 (m)	方向 柱間 (m)	柱間 総長 (m)	平面形	備考
SB01	1×1以上	南北か 東西か	1.3 以上	1.3	西側 以上	1.1 以上	1.1	南側	9~41 42	楕円形	
SB02	1以上×2	東西か	1.6 以上	1.6	北側	1.8 0.9, 0.9	0.9, 0.9	西側	9~50 50	楕円形	
SB03	2×3以上	東西か	2.0 以上	1.0, 1.0	南側	1.2 以上	1.2	西側	12~30 30	楕円形	SD01より新
SB04	2×3	南北	5.1 (5.4)	1.7, 3.3, 4 1.6, 2.0,	西側	2.5 1.5, (1.3)	1.3, 1.2	南側	9~15 15~70	楕円形	
SB05	2×3か	南北	—	—	東側	2.8	—	東側	9~20 20~70	楕円形	
SB06	~×3	南北か	2.6 以上	0.6, 0.1, 0	東側	—	—	—	9~25 25~35	楕円形 長方形	
SB07	3×5か	南北 (5.4)	— L, L, L, L, L	— 1, 1, 1, 1, 1	西側	3.3 —, 1.2	—, 1.2	南側	12~15 12~38	楕円形 長方形	
SB08	~×7か	南北	7.3 —	1.1, 1.1, 0.6 —, —	東側	— —	—	N-2-E 東側	6~9 9~40	楕円形 長方形	柱列の可能性あり。 SD09より旧。
SB09	2×~	東西か	—	—	—	—	—	—	—	不整形	SB09より新。
SB10	2×~	東西か	—	—	—	—	—	東側	12~15 15~35	楕円形 方型	
SB11	2×~	東西か	—	—	—	—	—	東側	12~15 15~38	楕円形 長方形	

径は 12 ~ 15 cm の円形である。

・溝跡

【SD01】(第88図)

3 レンチ南東部に存在する。調査区北壁から南壁にかけて直線的にのびる溝跡であり、同一箇所で造り替えが行われている。北・南とも調査区外へ展開するため全長は不明であるが、総長約 1.6m に渡って検出している。主軸方位は真北方向である。検出面での規模は SD01a が上幅 2.7m、下幅 1.9m、確認面よりの深さは 80cm を測る。断面形状は箱形を呈する。堆積土は 8 層に分層でき、下層の 9 ~ 13 層は自然堆積であるが、1・2・8 層は人為的理上である。SD01b は北壁の土層断面でみると上幅 0.9m、下幅 0.2m、確認面よりの深さは 95cm を測る。断面形状は U 字形を呈する。堆積土は 5 層に分層でき、すべて人為的理上である。遺物は非クロコ成形の甕が出土しているが、小片のため図示できなかった。

【SD02】(第82・88図)

3 レンチ南側に存在する。調査区西壁から東壁にかけて直線的にのびる溝跡である。調査区外へ展開するため全長は不明であるが、総長約 2.2m に渡って検出している。主軸方位は 80° 東へ傾く。検出面での規模は上幅 0.7m、下幅 0.4 m、確認面よりの深さは 40cm を測る。断面形状は逆台形を呈する。堆積土は 2 層に分層でき、全て自然堆積である。遺物は出土していない。

【SD03】(第82・88図)

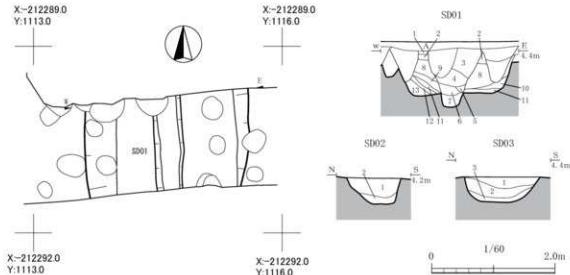
3 レンチ中央部南寄りに存在する。SK03 と重複し、これより古い。調査区西壁から東壁にかけて直線的にのびる溝跡である。調査区外へ展開するため全長は不明であるが、総長約 1.5m に渡って検出している。主軸方位は 78° 東へ傾く。検出面での規模は上幅 0.9m、下幅 0.4 m、確認面よりの深さは 40cm を測る。断面形状は U 字形を呈する。堆積土は 3 層に分層でき、全て人為的理土である。遺物は出土していない。

【SD04】(第89図)

3 レンチ中央部南寄りに存在する。SD05・06 と重複し、これより古い。調査区外へ展開するた

2. 植遺跡（第3次調査）

2. 極遺跡（第3次調査）



第88図 SD01～03

SD01 土層注記

層%	土色	土質	備考
1	にじむ黄褐色 (10YR4/3)	シルト	黒褐色シルト小ブロックを多量含む。
2	黒色 (10YR2/1)	シルト	褐色シルト中ブロックを少量含む。
3	にじむ黄褐色 (10YR4/3)	シルト	暗褐色シルト小ブロックをやや多く含む。
4	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	にじむ黄褐色シルト大ブロックを多量、黒褐色シルト小ブロックを少量含む。
5	褐灰色 (10YR4/1)	粘土	にじむ黄褐色シルト小ブロックをやや多く含む。
6	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	褐色シルト小ブロックを少量含む。
7	灰色 (10Y4/1)	シルト	褐色シルト中ブロックを少量含む。
8	黒褐色 (10YR3/4)	シルト	灰褐色シルト中ブロックを少量含む。
9	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	褐色シルト中ブロックをやや多く含む。
10	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	褐色シルト小ブロックを少量含む。
11	にじむ黄褐色 (10YR5/4)	砂質シルト	黒褐色シルト中ブロックを多量含む。
12	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	褐色シルト粒を少量含む。
13	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	事大的黑色粘土塊を多量含む。

SD02 土層注記

層%	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	褐色シルト粒を少量含む。
2	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	褐色シルト小ブロックをやや多く含む。

SD03 土層注記

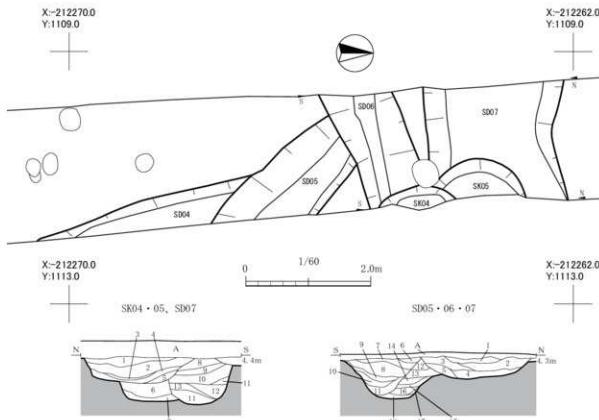
層%	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	暗褐色シルト小ブロックをやや多く含む。
2	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	暗褐色シルト小ブロックを少量、炭化物を微量含む。
3	にじむ黄褐色 (10YR4/3)	シルト	黒褐色シルト小ブロックをやや多く、幾土粒をごく微量含む。

全長は不明であるが、総長約3.6mに渡って検出している。主軸方位は17° 西へ傾く。東側の立ち上がりが調査区内では検出されていないため上幅・下幅の規模は不明であるが、確認面よりの深さは30cmを測る。断面形状はU字形を呈するものと思われる。堆積土は2層に分層でき、全て自然堆積である。遺物は出土していない。

【SD05】(第89図)

トレンチ中央部南寄りに存在する。SD04・06と重複し、SD06より古く、SD04より新しい。調査区外へ展開するため全長は不明であるが、総長約2.3mに渡って検出している。主軸方位は48° 西へ傾く。検出面での規模は上幅1.2m、下幅0.6m、確認面よりの深さは60cmを測る。断面形状はU字形を呈する。堆積土は5層に分層でき、全て人為的埋土である。遺物は出土していない。

2. 極遺跡（第3次調査）



第89図 SK04・05, SD05～07

【SD06】(第89図)

3 トレンチ中央部南寄りに存在する。SD04・05, SK04と重複し、SK04より古く、SD04・05より新しい。調査区外へ展開するため全長は不明であるが、総長約2.1mに渡って検出している。主軸方位は67° 東へ傾く。検出面での規模は上幅1.1m、下幅0.3m、確認面よりの深さは60cmを測る。断面形状はU字形を呈する。堆積土は5層に分層でき、下層の12・13層は自然堆積であるが、上層の9～11層は人為的埋土である。遺物は出土していない。

【SD07】(第89図)

3 トレンチ中央部南寄りに存在する。SK05と重複し、これより新しい。調査区外へ展開するため全長は不明であるが、総長約1.9mに渡って検出している。主軸方位は85° 東へ傾く。検出面での規模は上幅2.7m、下幅1.6m、確認面よりの深さは35cmを測る。断面形状は浅い箱形を呈する。堆積土は5層に分層でき、すべて人為的埋土である。遺物は第90図1の須恵器鉢が出土している。また堆積土中より須恵器甕と非クロコ成形の土器類も出土しているが、小片のため図示できなかった。

【SD08】(第91図)

3 トレンチ北部に存在する。調査区西壁から東壁にかけて直線的にのびる溝跡であり、同一箇所で造り替が行われている。東西両側とも調査区外へ展開するため全長は不明であるが、総長約2.1mに渡って検出している。主軸方位は83° 東へ傾く。検出面での規模は新段階のSD10aが上幅2.7m、下幅0.7m、確認面よりの深さは110cmを測る。断面形状は薬研状を呈する。堆積土は8層に分層でき、1・2層が人為的埋土で、それ以下が自然堆積である。古段階のSD10bは北側部分がSD10aと重複しているため規模は不明である。東壁の土層断面でみると確認面よりの深さは65cmを測る。確認できた堆積土は8層あり、すべて自然堆積である。遺物は第90図2の肥前地方で生産された染付器角

2. 植遺跡（第3次調査）

SD07・SK04, 05 土層注記

層番	土色	土質	遺構	備考
1	黒褐色	(10YR2/2) シルト	SD07	塊状物を多量含む。
2	褐色	(10YR4/1) シルト	SD07	塊状物を多量含む。酸化鉄が層全体に散見する。
3	黒褐色	(10YR2/2) 粘質シルト	SD07	灰白色粘土の薄層をやや多く含む。
4	黒褐色	(10YR3/1) シルト	SD07	こぶし状褐色シルト小ブロックをやや多く含む。
5	褐色	(10YR2/2) シルト	SD07	こぼれ、黄褐色シルト小ブロックをやや多く含む。
6	褐色	(10YR5/1) シルト	SD04	黄褐色シルト小ブロックを多量含む。
7	こぶし状褐色	(10YR5/3) シルト	SD04	黄褐色シルト小ブロックを多量含む。
8	褐色	(10YR4/1) シルト	SD04	黄褐色シルト小ブロックを多量含む。
9	褐色	(10YR4/1) 粘土	SD04	黄褐色シルト小ブロックを多量含む。
10	黒褐色	(10YR2/3) シルト	SD04	灰白色粘土の薄層を微量含む。
11	黒色	(10YR2/1) シルト	SD04	褐色シルト大ブロックをやや多く含む。
12	黒褐色	(10YR2/3) シルト	SD04	こぶし状褐色シルト小ブロックを多量含む。最下面に褐色粗粒砂堆積。
13	黒褐色	(10YR2/2) シルト	SD05	褐色シルト小ブロックを微量含む。
14	黒色	(10YR2/1) 粘質シルト	SD05	褐色シルト中ブロックをやや多く含む。

SD05, 06, 07 土層注記

層番	土色	土質	遺構	備考
1	暗褐色	(10YR3/3) シルト	SD07	炭化物を少量含む。
2	暗褐色	(10YR3/3) シルト	SD07	炭化物・礫石を微量含む。
3	黒褐色	(10YR3/1) シルト	SD07	褐色シルト小ブロックをやや多く含む。
4	褐色	(10YR4/1) シルト	SD07	黄褐色シルト大ブロックを少量含む。
5	褐色	(10YR4/1) 粘質シルト	SD07	こぶし状褐色シルト小ブロックをやや多く含む。
6	暗褐色	(10YR3/3) シルト	SD06	こぶし状褐色シルト小ブロックを少量含む。
7	こぶし状褐色	(10YR5/3) シルト	SD06	黒褐色粘土大ブロックを多量、炭化物を少量含む。
8	黒褐色	(10YR2/2) シルト	SD06	こぶし状褐色シルト粘土を微量含む。
9	黒褐色	(10YR3/2) シルト	SD06	こぶし状褐色シルト小ブロックを少量含む。
10	黒褐色	(10YR3/1) シルト	SD06	こぶし状褐色シルト小ブロック・炭化物を微量含む。
11	黒褐色	(10YR2/2) シルト	SD06	褐色シルト中ブロックをやや多く含む。
12	黒褐色	(10YR2/2) 粘質シルト	SD05	こぶし状褐色シルト粘土を微量含む。
13	黒褐色	(10YR2/2) シルト	SD05	黄色粘質シルト大ブロックをやや多く含む。
14	暗褐色	(10YR2/3) シルト	SD05	褐色シルト中ブロックを多量含む。
15	黒褐色	(10YR3/2) シルト	SD05	褐色シルト中ブロックを少量含む。
16	黒褐色	(10YR2/3) シルト	SD05	褐色シルト大ブロックを極めて多量含む。
17	褐色	(10YR5/1) 粘土	SD05	褐色シルト小ブロックを多量含む。
18	褐色	(10YR5/1) 粘土	SD05	褐色シルト小ブロックを多量含む。



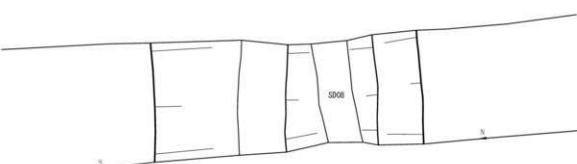
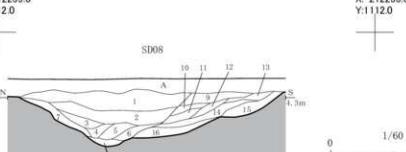
第 90 図 清跡出土遺物

遺跡出土遺物観察表

番号	遺物名・層位	種別	器種	産地	特徴	法量 (cm)	写真番号
						口径	
1	SD07 頸部器	鉢	在地	内外面クロナダグ、9世紀前後。	—	(4.1)	
2	SD08 染付器	角皿	病院	内面に牡丹文。高台付に砂付蓋。	(11.6)	(5.9)	3.2

皿が出土している。このほか鉄軸が施された捕鉤も出土しているが、小片のため図示できなかった。

2. 植遺跡（第3次調査）

X-212259.0
Y:1108.0X-212253.0
Y:1108.0X-212259.0
Y:1112.0

第 91 図 SD08

SD08 土層注記

層番	土色	土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3) シルト	灰黃褐色シルト大ブロックをやや多く含む。
2	灰褐色	(10YR4/2) シルト	黒褐色シルト大ブロックを微量含む。
3	灰褐色	(10YR4/2) シルト	オリーブ黒色粘土大ブロックをやや多く含む。
4	オリーブ黒色	(5Y3/2) 粘土	灰黃褐色シルト中ブロックを少量含む。
5	灰褐色	(10YR4/2) シルト	オリーブ黒色粘土大ブロックをやや多く含む。
6	灰褐色	(5Y5/3) シルト	灰黃褐色シルト中ブロックを少量含む。
7	暗褐色	(10YR3/3) シルト	オリーブ黒色粘土大ブロックを多量含む。
8	暗褐色	(5Y7/4) シルト	褐色粗粒砂を微量含む。
9	褐色	(10YR3/1) 粘土	こぶし状褐色シルト中ブロックをやや多く含む。
10	灰褐色	(10YR4/2) シルト	黒褐色シルト中ブロックを多量含む。
11	褐色	(10YR4/1) シルト	灰黃褐色シルト中ブロックを極めて多量含む。
12	暗褐色	(10YR3/3) シルト	灰黃褐色シルト中ブロックを微量含む。
13	暗褐色	(10YR3/3) シルト	こぶし状褐色シルト中ブロックを少量含む。
14	褐色	(10YR5/1) シルト	灰白色粘土中ブロックを多量含む。
15	褐色	(10YR4/1) シルト	灰黃褐色シルト中ブロックを少量含む。
16	黒褐色	(10YR2/3) 粘土	灰白色粘土の薄層が層上位に集積する。

表 9 植遺跡土壤属性表

遺構名	横長さ (m)	断面形	上幅 (m)	下幅 (m)	深さ (m)	方向	堆積土	出土遺物	備考	平面図	断面図
SD01	1.6	直形	2.7	1.9	0.8	真北	自然→人為				
SD02	2.2	逆台形	0.7	0.4	0.4	N-80-E	自然				
SD03	1.5	U字	0.9	0.4	0.4	N-78-E	人為		S003より上。		
SD04	3.6	U字	—	—	0.3	N-17-W	自然		S004より上。		
SD05	2.5	U字	1.2	0.6	0.6	N-48-W	人為		S004より上、SD06より上。		
SD06	2.1	U字	1.1	0.3	0.6	N-67-E	自然→人為		S004より上、S004より上。		
SD07	1.9	直形	2.7	1.6	0.3	N-85-E	人為	須恵器鉢	S005より上。		
SD08	2.1	要筋	4.2	0.7	1.1	N-83-E	自然→人為	染付角皿			

2. 植造跡（第3次調査）

・土坑

【SK01】（第92図）

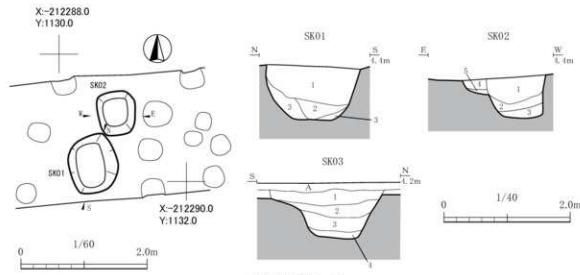
2トレンチに存在する。平面形状は楕円形であり、規模は長軸0.9m、短軸0.8mを測る。確認面からの深さは約90cmであり、断面形状はU字形を呈する。このうち1層内からは火葬骨が少量出土している。堆積土は3層に分層でき、全て人為的埋土である。

【SK02】（第92図）

2トレンチに存在する。平面形状は方形であり、規模は長軸0.7m、短軸0.6mを測る。確認面からの深さは約70cmであり、断面形状は箱形を呈する。堆積土は3層に分層でき、全て自然堆積である。遺物は堆積土中より鉢形が出土しているが、小片のため図示できなかった。

【SK03】（第92図）

3トレンチ中央部南寄りに存在する。SD03と重複し、これより新しい。調査区西側へさらに広がるため、形状・規模は不明であるが、短軸は1.1mで確認面からの深さは約80cmであり、断面形状は箱形を呈する。堆積土は4層に分層でき、全て自然堆積である。



第92図 SK01～03

SK01 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2)	シルト 壄化物・火葬骨片を多量含む。
2	黒褐色	(10YR2/3)	褐色シルト小ブロックをやや多く含む。
3	黒褐色	(10YR2/3)	褐色シルト中ブロックを多量含む。

SK02 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3)	シルト にぶい黄褐色シルト大ブロックを多量含む。
2	黒褐色	(10YR2/2)	シルト にぶい黄褐色シルト小ブロックを少量含む。
3	黒褐色	(10YR2/2)	褐色シルト小ブロックを少量含む。
4	黒褐色	(10YR2/2)	褐色シルト大ブロックをやや多く含む。

SK03 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3)	シルト にぶい黄褐色シルト小ブロックをやや多く含む。
2	黒褐色	(10YR2/1)	シルト にぶい黄褐色シルト小ブロック・褐色シルト粒を少量含む。
3	黒褐色	(10YR2/2)	褐色シルト粒を少量、暗褐色シルト小ブロックを微量含む。
4	黒褐色	(10YR2/2)	褐色シルト小ブロックをやや多く含む。

2. 植造跡（第3次調査）

【SK04】（第89図）

3トレンチ中央部南寄りに存在する。SK05、SD07と重複し、SK05より新しく、SD07より古い。調査区東側へさらに広がるため、形状・規模は不明であるが、確認面からの深さは約70cmであり、断面形状はU字形を呈する。堆積土は7層に分層でき、全て自然堆積である。

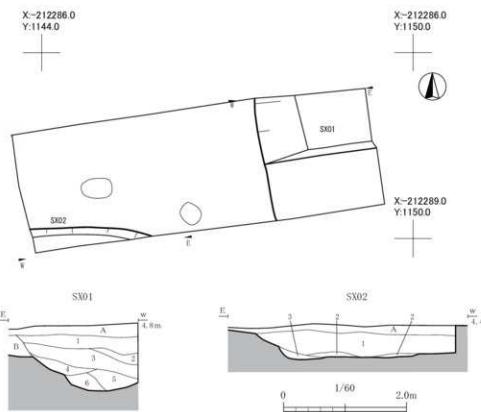
【SK05】（第89図）

3トレンチ中央部南寄りに存在する。SK04、SD07と重複し、両者より古い。調査区東側へさらに広がるため、形状・規模は不明である。断面形状は箱形を呈する。確認できた限りで堆積土は2層に分層でき、全て自然堆積である。

・性格不明遺構

【SX01】（第93図）

1トレンチ東側で南北方向に存在する。調査区東側へさらに広がるため、全体の形状・規模について



第93図 SX01・02

SX01 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	シルト 黒褐色シルト粒をやや多く含む。
2	黒褐色	(10YR2/2)	シルト 壈化物・礫土粒・にぶい黄褐色シルト小ブロックを少量含む。
3	暗褐色	(10YR3/3)	シルト 壈化物を含む。
4	黒褐色	(10YR2/3)	シルト 煙土粒をごく微量含む。
5	褐色	(10YR4/1)	粘質シルト 灰白色粘質シルト中ブロックを多量含む。
6	黒色	(10YR2/1)	粘土 灰白色粘質シルト小ブロックが上位に集積する。

SX02 土層注記

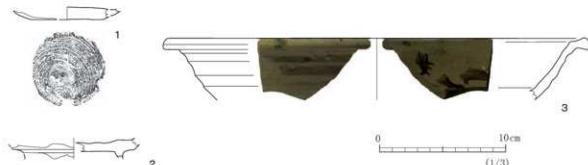
層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3)	シルト にぶい黄褐色シルト小ブロックを少量含む。
2	黒褐色	(10YR2/2)	シルト 暗褐色シルト小ブロックをやや多く含む。
3	黒褐色	(10YR2/3)	シルト にぶい黄褐色シルト粒をやや多く含む。

2. 横遺跡（第3次調査）

では不明であるが、確認面からの深さは90cmを測る。確認できた限りで堆積土は6層に分層でき、全て自然堆積である。なお、本遺構は、底面東側が緩やかに立ち上がるような状況を呈することから構の可能性も考えられる。遺物は第94図1の須恵器壺が出土している。

【SX02】(第93回)

1トレンチ南西部で東西方向に存在する。調査区の西、及び南側へさらに広がるため、全体の形状・規模については不明であるが、確認面からの深さは40cmを測る。確認できた限りで堆積土は3層に分層でき、全て自然堆積である。遺物は第94図2の須恵器高台壺、3の瀬戸美濃産の鉄絵鉢が出土している。



第94図 性格不明遺構出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴		法量(cm) 口径 底径 器高	写真番号
					外底面は副輪系切妻内腹、内外面ロクロナダ。 外底面は「X」字型の縁脚。9世紀代。	外底面は回転カーブ切りの後、高台貼り付け。 外底面ロクロナダ。8世紀中葉。		
1	SX01	須恵器	壺	在地	—	(5.7)	(1.0)	
2	SX02	須恵器	高台壺	在地	—	—	(1.7)	
3	SX02	陶器	鉄絵鉢	瀬戸美濃	外外面灰釉施釉。内面に鉢底。胎土は精良。	(34.0)	— (4.9)	

表10 遺構跡土坑・性格不明遺構属性表

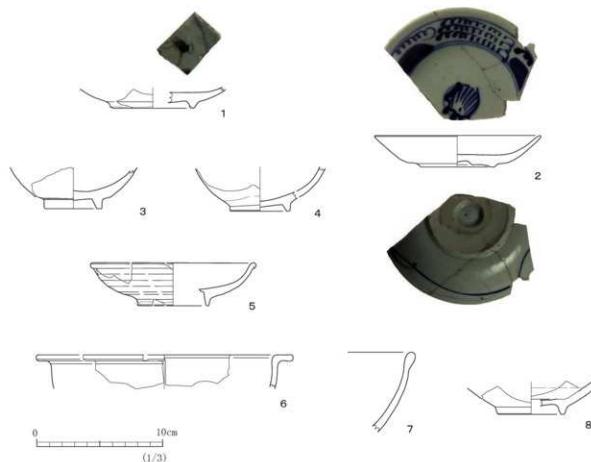
遺構名	平面形	前面形	埋深(m)	深さ(m)	堆積土	出土遺物	参考	平面図	前面図
SX01	不明	不明	—	0.9	自然	須恵器			
SX02	不明	皿形か	—	0.4	自然	須恵器高台壺、瀬戸美濃鉄絵鉢			
SK01	楕円形	U字	0.9×0.8	0.9	人為	火薬骨			
SK02	方形	椭形	0.7×0.6	0.7	自然	なし			
SK03	楕円形か	椭形	—×1.1	0.8	自然	なし	SD03上り新。		
SK04	楕円形か	U字	—	0.7	自然	なし	SK05上り新、SD07上りH.		
SK05	楕円形か	椭形	—	—	自然	なし	SK04、SD07よりH.		

・柱穴

2トレンチと3トレンチ南東部から中央部にかけて、柱穴が多数確認されている。これらの中には柱痕跡をとどめているものも見受けられたが、調査範囲が限られることから建物などの復元には至っていない。大部分のピットは長軸0.3~0.6m、短軸は0.2~0.4mの範囲に収まるものであり、形状は楕円形が多く、ほかに丸角方形、円形、長方形などみられる。

なお、図示可能な遺物は得られなかつたが、4口の柱穴からは器種不明の土師器、大堀相馬焼碗、鉄滓、羽口が出土している。

2. 横遺跡（第3次調査）

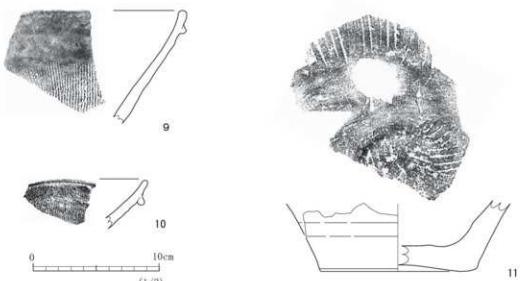


第95図 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴		法量(cm) 口径 底径 器高	写真番号
					内外面透明釉。須恵器淡紺色。文様不明。	内外面に手描きで蠶蔓文。蛇の目様形高台、19世紀中葉～末葉。		
1	3Tr・掘削時	染付磁器	皿	肥前	—	(6.8)	(1.7)	
2	3Tr・掘削時	染付磁器	皿	瀬戸美濃	内外面に手描きで蠶蔓文。蛇の目様形高台、19世紀中葉～末葉。	13.2	5.8	2.5
3	3Tr・掘削時	陶器	碗	大堀相馬	内外面に明オーバーブラックの灰釉。内底面に角状凹凸2ヶ所。高台削り出し。18世紀後葉。	—	4.6	(3.3)
4	3Tr・掘削時	陶器	碗	小野相馬	内外面に明青灰色の灰釉。内底面に針状凹凸1ヶ所。高台削り出し。19世紀初頭～前葉。	—	4.9	(3.5)
5	3Tr・掘削時	陶器	皿	大堀相馬	内外面に灰白色の灰釉。内底面に角状凹凸2ヶ所。口縁部は折り返して玉縁状に形成。高台削り出し。18世紀末葉～19世紀初頭。	13.2	5.5	3.4
6	3Tr・掘削時	陶器	鉢	大堀相馬	内外面に灰白色の灰釉。時期不明。	(20.5)	—	(2.7)
7	1Tr・掘削時	陶器	鉢	小野相馬	内外面に灰白色の灰釉。内底面に角状凹凸2ヶ所。口縁部は折り返して玉縁状に形成。18世紀後葉。	—	—	(6.4)
8	3Tr・掘削時	陶器	瓶	大堀相馬	外面上に灰白色の灰釉。内面は無釉で、一部に木口状工具による成形跡がみられる。高台は削り出しであるが、高台内に灰釉を施す。蓋付は無釉だが、剥離痕が残る。18世紀末葉～19世紀初頭。	—	(2.6)	(5.4)

2. 横造跡（第3次調査）



第96図 遺構外出土遺物観察2

遺構外出土遺物観察表2

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm)			写真番号
						口径	底径	器高	
9	3Tr・掘削時	陶器	擂鉢	在地	輪目6条1単位。内外面に赤褐色の鉄輪。口縁部の外側に1条の隆帯貼付。胎土は灰褐色。	-	-	(9.0)	
10	3Tr・掘削時	陶器	擂鉢	在地	輪目5条1単位。内外面に赤褐色の鉄輪。口縁部の外側に1条の隆帯貼付。胎土は灰色。	-	-	(3.9)	
11	3Tr・掘削時	陶器	擂鉢	在地	輪目5条1単位。内外面に赤褐色の鉄輪を施釉するが、内面は剥離が顕著。底部外側には凹輪目切痕。	-	(12.6)	(5.6)	

・その他の遺物（第95・96図）

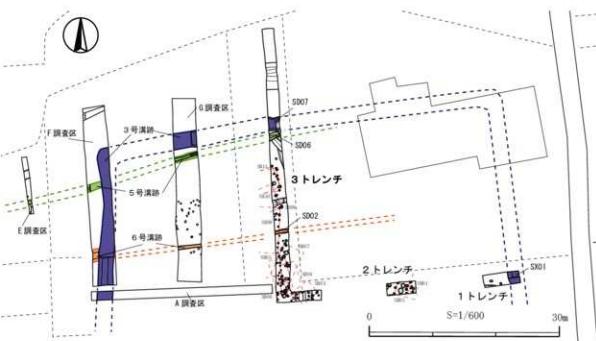
遺構精査や表土掘削時において、少量の遺物が出土している。

第95・96図はトレーナー表土掘削時の出土遺物である。第95図1・2は染付磁器である。2は蛇の目凹形高台であり、19世紀中葉から末葉とみられる。第95図3～8はいずれも施釉陶器であり、相馬地方で生産されたものである。第96図9～11は在地で生産されたとみられる擂鉢である。9は輪目6条1単位、10・11は5条1単位である。

d.まとめ

今回の調査では、可能性の指摘にとどめたものを含めているものの、据立柱建物跡11棟、溝跡8条をはじめとする遺構と、古代・近世の遺物が発見されている。しかしながら、幅約2.5mと調査面積が限られていることから、個々の構造の全容解明については不明な点が多い。このため、ここでは平成22・23年に市史編纂事業に伴って実施した調査成果と併せて遺跡内の状況について検討していく。

市史編纂事業に伴う調査では、A～G区の7つの調査区で調査を実施しているが、このうちA・E・F・G区の4箇所では今回の調査成果と関係する溝跡が発見されている（第97図）。特に市史編纂事業に伴う調査で最も大きな発見となった3号溝跡については、位置関係から今回の調査で確認されたSD07が同一遺構であると考えられる。そしてこれらとほぼ直交するSX01を一連の遺構と考えると、一边が約65mの方形に区画された姿が浮かび上がる。2トレンチや3トレンチ、さらには市史編纂事業に伴う調査のG調査区で発見された多数の小型柱穴群は、この方形容画の内部でつくられた建物を構成する柱穴と考えられ、その規模や形態的特徴から中世期につくられた方形居館の姿を類推できる。ただし、溝幅も2～3mほどと大規模なものではなく、溝の付近では土壠や柵列は確認されていないことから防護機能は高いとは言えない。また規模も約半町程度であることを踏まえると、ここに居住していた者は小規模な在地勢力、あるいは長谷古館跡とは指呼の距離であることを加味すれば長谷氏に従属した家臣の可能性が考えられる。



第97図 遺構跡合図 (1/600)

2. 棚遺跡（第3次調査）



1 3 トレンチ掘削風景（北から）



2 4 トレンチ掘削風景（東から）



3 2 トレンチ造構確認状況（東から）



4 2 トレンチ完掘状況（西から）



5 3 トレンチ完掘状況（南から）



6 1 トレンチ SX01 完掘状況（南から）



7 3 トレンチ南東部完掘状況（西から）



8 3 トレンチ北側完掘状況（北から）



9 3 トレンチ SD01 完掘状況（南から）



10 3 トレンチ SD06 南北セクション（東から）



11 3 トレンチ SD08 完掘状況（南西から）

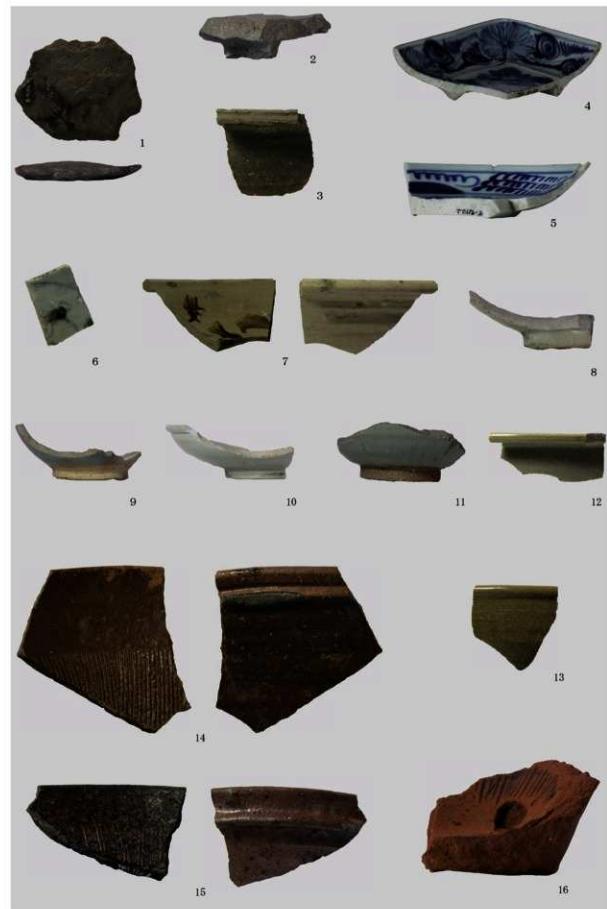


12 1 トレンチ SX02 遺物出土状況（北から）



13 3 トレンチ SD08 遺物出土状況（南から）

2. 棚遺跡（第3次調査）



14 棚遺跡遺物写真図

3. 南玉崎遺跡（第3次調査）

a. 遺跡の位置と環境

南玉崎遺跡はJR岩沼駅の南西約3.5kmに位置する。自然地形としては、阿武隈川左岸で形成された自然堤防上に広がる。遺跡内ではこれまで個人住宅建築や市道拡幅工事に伴う小規模な調査が行われ、遺構は確認されていないが土師器甕、須恵器甕などが発見されている（斎野2015c）。



第98図 南玉崎遺跡位置図

b. 調査の経過

南玉崎遺跡での調査は、平成28年10月11日・

12日に実施した。新たに排水路が敷設される範囲内にトレーニングを4箇所設定し、重機を用いて表土の掘削を行った。その後、人力によって自然堆積層上面の遺構精査、土層確認のための壁面の精査を実施した。遺構精査終了後に各トレーニングにおいて全景撮影を行い、あわせて平面図、土層断面図を作成した。そしてトレーニングの位置を測量した後に埋戻しを行っている。

c. 調査成果

【1 トレーニング】

1 トレーニング当初、東西10m、南北3mの30m²の規模で設定したが、掘削時に東寄りで自然堆積層とは異なる土層が確認できることから、北側に東西2m、南北3mの6m²を拡張した。現地表面より30cmまで重機を用いて掘削し、その後人力で底面及び南壁面を精査し、遺構の検出に努めた結果、土坑1基、溝状遺構12条、柱穴7口を確認した。

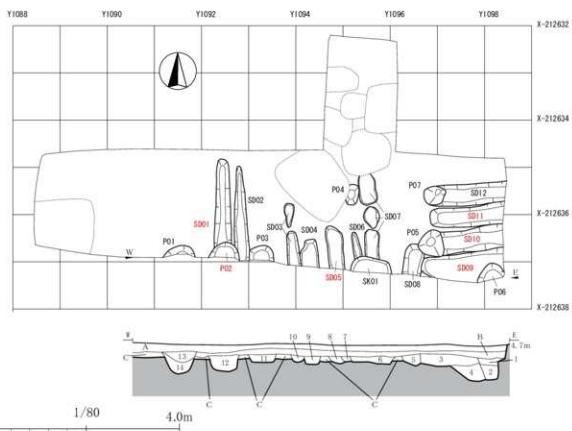
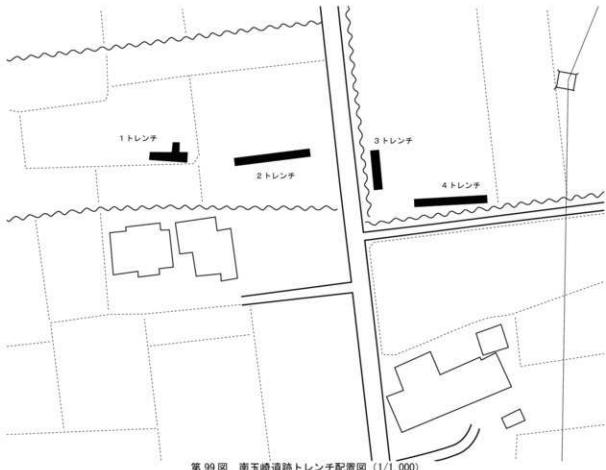
・土坑

南壁際東寄りでSK01を確認した。調査区南側へさらに広がるため全体の規模は不明であるが確認できた範囲から一辺が90cmほどの方形と考えられる。確認面からの深さは7cmである。遺物は出土していない。

・溝状遺構

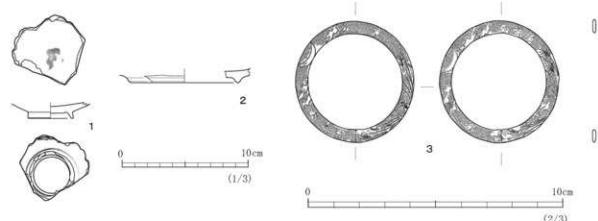
調査区中央付近から東側で12条を確認した。このうち東部で確認した4条は東西方向であり、そのほかは南北方向である。覆土は黒褐色、あるいは灰黄褐色のシルトで、覆土には炭化物が散見できるものが多い。南北方向の溝状遺構は、長さ60~200cm、幅25~30cmで、確認面からの深さは10cm前後であり、主軸方位は2°ほど西へ傾く。東西方向の溝状遺構は、長さ155~175cm、幅45cmで、確認面からの深さは16~22cmであり、主軸方位は88°ほど東へ傾く。なお、南北方向のSD08と東西方向のSD09が重複しており、そこでは東西方向が新しい。遺物はSD01から第101回の切込焼の可能性がある染付磁器の碗、SD09から2の瀬戸美濃産の青磁盤、3の金属製品の環が出土している。このほかSD01からは大堀相馬焼の碗、SD09から产地不明の白磁端反皿と石製品の砥石、SD10から大堀相馬焼の碗、SD11から在产地の捕鉢が出土しているが、いずれも小片のため図示できなかった。

3. 南玉崎遺跡（第3次調査）



1 トレンチ南壁土層注記

層名	土色	土質	備考
I 暗褐色	(10YR3/3)	シルト	水田耕作土。灰黄褐色シルト中プロックをやや多く含む。
II 灰黃褐色	(10YR4/2)	シルト	水田底土。酸化鉄を集積する。にぶい黄褐色シルト小プロックを多量含む。
III にぶい黄褐色	(10YR4/3)	シルト	灰黄褐色シルト・小プロックをやや多く、炭化物を少量含む。
1 黒褐色	(10YR3/1)	シルト	炭化物を多量、鐵子粒を少量含む。
2 黒褐色	(10YR3/1)	シルト	炭化物をやや多く、褐色シルト中プロックを少量含む。
3 黒褐色	(10YR3/2)	シルト	炭化物を多量、炭化物をやや多く含む。
4 黒褐色	(10YR3/1)	シルト	褐色シルト大プロックを多量、炭化物をやや多く含む。
5 黒褐色	(10YR2/2)	シルト	炭化物をやや多く、にぶい黄褐色シルト小プロックを少量含む。
6 黒褐色	(10YR2/2)	シルト	褐色シルト小プロック・炭化物をやや多く、鐵子粒を少く微量含む。
7 黒褐色	(10YR2/2)	シルト	にぶい黄褐色シルト小プロックを少量含む。
8 黒褐色	(10YR2/2)	シルト	炭化物をやや多く、にぶい黄褐色シルト小プロックを少量含む。
9 黒褐色	(10YR2/2)	シルト	炭化物をやや多く、にぶい黄褐色シルト小プロックを少量含む。
10 灰黃褐色	(10YR4/2)	シルト	炭化物をやや多く、炭化物をごく微量含む。
11 灰黃褐色	(10YR4/2)	シルト	炭化物をやや多く、炭化物をごく微量含む。
12 黒褐色	(10YR2/2)	シルト	炭化物をやや多く、にぶい黄褐色シルト小プロックを少量含む。
13 灰黃褐色	(10YR4/2)	シルト	酸化鉄をやや多く、炭化物をごく微量含む。
14 にぶい黄褐色	(10YR4/3)	シルト	灰黄褐色シルト中プロックを極めて多量含む。



出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量 (cm)	写真番号
1 SD01	染付磁器	碗	切込み	内面に不明文。胎土はやや粗雑。19世紀代。	-	(1.2)	
2 SD09	青磁	瓶	漁戸式	内外面にクロム青緑。19世紀末～20世紀前葉。	(8.6)	(1.1)	
番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量 (cm)	写真番号
3 SD09	金属製品	環			表裏とも月・雲・星・薄を陽刻。文様以外は魚ヶ子地。重量7.17g。	4.79 3.81 0.15	

柱穴

7口が確認されているが、調査面積が限られているために建物の復元はできない。いずれの柱穴も構造造構よりは新しい。大半の柱穴は遺構外へと展開するため規格・形状とも不明な点はあるが、P05-P07を参考すると長軸50～55cm、短軸45～55cmの不整形で、深さは12～33cmほどである。すべての柱穴で遺物の出土はなかった。

・その他の出土遺物

表土掘削時、構造精査時に唐津焼碗、大堀馬焼碗、軟質陶器の熔块、産地・時期とも不明の白磁碗が出土しているが、いずれも小片のため図示できなかった。

3. 南玉崎遺跡（第3次調査）

3. 南玉崎遺跡（第3次調査）

【2トレンチ】

2トレンチは東西20m、南北2mの40m²の規模で設定した。現地表面より35cmまで重機を用いて掘削し、その後人力で底面及び南壁を精査し、遺構の有無を判断した。堆積土は現代水田耕作土であるI・II層と自然堆積土であるにぶい黄褐色シルト（III層）が確認され、概ね水平堆積である。遺構・遺物は発見されていない。

【3トレンチ】

3トレンチは東西2m、南北10mの20m²の規模で設定した。現地表面より40cmまで重機を用いて掘削し、その後人力で底面及び西壁を精査し、遺構の有無を判断した。堆積土は現代水田耕作土であるI・II層と自然堆積土であるにぶい黄褐色シルト（III層）が確認され、概ね水平堆積である。遺構・遺物は発見されていない。

【4トレンチ】

4トレンチは東西20m、南北2mの40m²の規模で設定した。現地表面より55cmまで重機を用いて掘削し、その後人力で底面及び南壁を精査し、遺構の有無を判断した。堆積土は現代水田耕作土であるI・II層と自然堆積土であるにぶい黄褐色シルト（III層）が確認され、概ね水平堆積である。遺構・遺物は発見されていない。

d.まとめ

今回の南玉崎遺跡の調査では、1トレンチから溝状遺構を中心とした遺構が発見されている。溝状遺構は東西方向と南北方向に主軸を持つものであるが、これらは直交関係にある。このような溝状遺構については畑作に伴う耕作痕跡と考えられているが、これに従うと一部で重複関係がみられることがから南北方向から東西方向に耕作方向を変更したとみられる。これらの溝状遺構の年代は、出土遺物の年代観から19世紀末以降と考えられる。

一方で2～4トレンチについては、自然堤防を形成するにぶい黄褐色シルト層の上面で遺構精査を行ったものの、遺構・遺物は一切確認できなかった。このため遺跡の中心は、今回の調査地よりも南側に広がるものと考えられる。

3. 南玉崎遺跡（第3次調査）



1 1トレンチ全景(東から)



2 1トレンチ SD09～12(北から)



3 1トレンチ全景(北から)



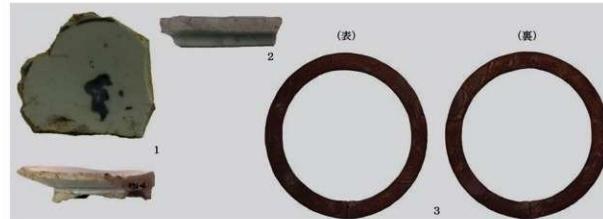
4 2トレンチ完掘状況(東から)



5 3トレンチ完掘状況(南から)



6 4トレンチ完掘状況(北東から)



7 南玉崎遺跡出土遺物写真

4. 長谷古館跡（第3・4次調査）

4. 長谷古館跡（第3・4次調査）

a. 調査の位置と環境

長谷古館跡はJR岩沼駅の南西約2.6kmに位置する。自然地形としては、岩沼西部丘陵から派生する低位丘陵東端から裾部にかけて広がる。遺跡内ではこれまで土砂採取や店舗建設などに伴う確認調査が実施されているが、遺構の発見は無い。しかしながら、過去には丘陵上から中世陶器が表採されている。

『仙台領古城書上』によると、長谷古館の城主は亘理氏の臣家である長谷紀伊守景重であるとされ、

城郭の規模は東西24間（約43m）、南北22間（約40m）とされる。城跡はかつて常磐線の線路嵩上げなどの工事によって土砂採取が行われており、現在の様子から旧状を復することは困難となつてゐる（吉井 2015・2018）。



第102図 長谷古館跡位置図

b. 調査の経過

長谷古館跡での調査は、圃場整備事業の工事計画により2箇年に渡って行われた。平成28年度の第3次調査は遺跡の南側、翌29年度の第4次調査は遺跡の北側で実施している。

第3次調査は、平成28年12月24日から断続的に行い、平成29年1月19日まで実施した。当初は新たに排水路が敷設される範囲内にトレーンチを設定したが、設定範囲のすべてが堆積土の状況から壠状の遺構内であることが1・3トレーンチの結果により明らかとなつたため、壠状の遺構の範囲を把握することを目的として補助的に4～6トレーンチを設定して全容把握に努めることにした。しかしながら、降雪後の融雪によって調査地全体がたびたび水没し、さらには極めて脆弱な地盤であるためにトレーンチ壁面が崩落するなど、極めて劣悪な調査環境であったことから4～6トレーンチについては表土掘削などを行ったものの、詳細調査を断念した。そこでボーリング棒を用いた壠状遺構の南脇ラインの把握をすることに変更し、壠状遺構推定ラインとトレーンチの位置を測量した後に埋戻しを行つてゐる。

第4次調査は、平成29年10月11・25・26日に実施した。新たにバイブルайнが敷設される範囲内にトレーンチを4箇所設定し、重機を用いて表土の掘削を行つた。その後、人力によって自然堆積層上面の遺構精査、土層確認のための壁面の精査を実施した。遺構精査終了後に各トレーンチにおいて全景撮影を行い、あわせて土層断面図を作成した。そしてトレーンチの位置を測量した後に埋戻しを行つてゐる。

c. 調査成果

【第3次調査】

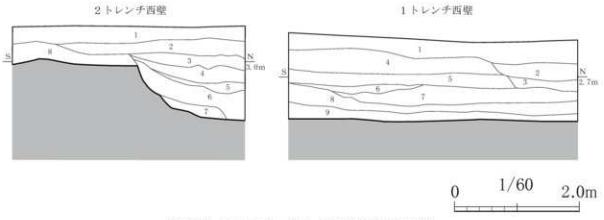
前述したように第3次調査では、計6箇所のトレーンチを設定したもの、4～6トレーンチについては調査を断念している。また3トレーンチについても壠状遺構内であるために確認できた土層はすべて

4. 長谷古館跡（第3・4次調査）



第103図 長谷古館跡トレーンチ配置図 (1/1,000)

4. 長谷古館跡（第3・4次調査）



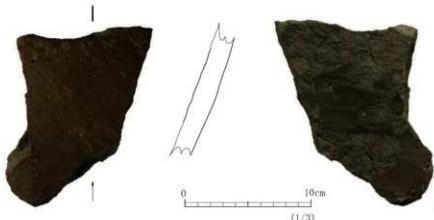
第104図 1トレンチ・2トレンチ土層断面図（1/60）

1トレンチ西壁土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/1) 黏質シルト	植物遺体・酸化鉄を多量含む。
2	黒褐色	(10YR2/2) 黏質シルト	植物遺体・酸化鉄をやや多く含む。
3	黒褐色	(10YR3/1) 黏質シルト	酸化鉄をやや多く含む。
4	黒褐色	(7.5YR3/1) 黏質シルト	酸化鉄を少量含む。
5	黒褐色	(7.5YR3/1) シルト	植物遺体・酸化鉄を少量含む。
6	黒褐色	(7.5YR3/1) 黏質シルト	植物遺体・酸化鉄を少量含む。
7	黒褐色	(10YR2/1) 黏質シルト	酸化鉄をやや多く含む。中世陶器出土。

2トレンチ西壁土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/1) 黏質シルト	植物遺体・酸化鉄を多量含む。
2	黒褐色	(10YR2/2) 黏質シルト	植物遺体・酸化鉄をやや多く含む。
3	黒褐色	(7.5YR3/1) 黏土	酸化鉄を少量含む。
4	黒褐色	(10YR3/1) シルト	酸化鉄を微量含む。
5	黒褐色	(7.5YR3/1) シルト	植物遺体・酸化鉄を少量含む。
6	黒褐色	(7.5YR3/1) 黏質シルト	褐色シルト粒を微量含む。
7	黒褐色	(10YR2/1) シルト	植物遺体・酸化鉄を微量含む。
8	黒褐色	(10YR3/1) 黏土	酸化鉄をやや多く含む。



第105図 長谷古館跡出土遺物

出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm)	写真番号
						口径	
1	堀跡・底面	中世陶器	甌	常滑	内面ヨコナダ。外側ナダ・ハラナダ。内外面とも剥離が著しく。	-	-

4. 長谷古館跡（第3・4次調査）

遺構内の堆積土である。よってここでは1・3トレンチの成果について述べていく。

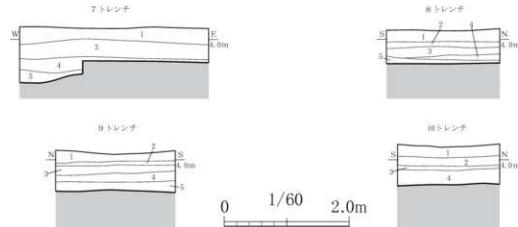
はじめに堀状遺構の南側の立ち上がりが確認できた2トレンチを見ていく。2トレンチでは現地表より0.5m下で検出された黒褐色粘土層上面で精査を実施したところ、トレンチ北側で東西方向に幅1.5～1.7mにわたり黒褐色シルトが堆積していることを確認した。この遺構ラインは、現在の丘陵裾部から約17mの位置にあり、その方向は丘陵裾部のラインに平行していた。堀状構造は、壁面での土層観察の結果、1.0mの深さを測る。2トレンチ内で確認した遺構覆土は5層に分層でき、すべて自然堆積である。なお、底面からの立ち上がりの斜度は45°であり、底面海拔は2.1m前後を測る。

2トレンチ北側に接続した1トレンチでは、現代水田耕作土である1層と、以前の排水路の堆積土である2・3層を除くすべての堆積土が堀状遺構覆土である。堀状遺構内の堆積土はすべて自然堆積であり、また水平堆積である。また調査範囲内で検出した底面は平坦であり、底面海拔は2.0m前後を測る。遺物は底面から第105図1に図示した常滑焼甌が出土したほか、堆積土中より漸戸美焼焼瓶の瓶頸と鉢形皿が出土しているが、小片のために図示はできなかった。

ボーリング棒を用いた堀状構造の調査は、4トレンチの西側から20mごとに丘陵裾部と直交する軸線を設定して実施した。堀状構造の立ち上がりの判断は、2トレンチで確認された地山である黒色粘土の有無を基準とした。その結果、堀状構造の南肩ラインは2トレンチと同様に概ね丘陵裾部から約17mの箇所であることが判明し、丘陵裾部のラインと並行していることが推定された。

【第4次調査】

第4次調査では、遺跡の南側で行った第3次調査の結果を受け、城館跡の周囲を巡る堀跡の確認に留意した。パイプライン敷設予定範囲に4箇所のトレンチを設定し、重機で表土を掘削したところ、現水田耕作土下に小礫と砂粒を含む褐色粘土層、さらには下層に褐色粘土ブロックを含む黒褐色土層が確認できた。粘土ブロックを含む層は人為堆積の可能性があるが、今回の調査範囲では堀跡埋土と認定することはできなかった。さらに下層は現表土下約50cmで未分解植物遺存体を含む泥炭層となった。



第106図 北側トレンチ土層断面図（1/60）

北側トレンチ土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	褐色	(2.5Y4/1) 黏土	水田耕作土。
2	黒褐色	(2.5Y3/1) 黏質シルト	酸化鉄をやや多く含む。
3	褐色	(10YR4/1) 黏土	小礫・砂粒を少量含む。
4	黒褐色	(2.5Y3/1) 黏土	褐色粘土小ブロックを多量含む。
5	黒色	(2.5Y3/1) 黑炭	未分解の植物遺存体を少量含む。層中に灰白色粘土の薄層が堆積。

4. 長谷古館跡（第3・4次調査）

遺物は発見されていない。

d. まとめ

第3次調査では、部分的な確認に留まつたものの、城館の防御施設としての機能が想定される堀状構造が現在の丘陵裾部からの幅が17m以上に及んで存在していることが明らかとなったことは非常に大きな成果と言える。遺構は深さ1.0mを測り、底面はほぼ平坦である。堀状構造内の底面からは常滑焼の甕が出土し、堆積土中からは瀬戸美濃焼の瓶類と鉄筋皿が出土しており、廃城の時期についても伝承で伝えられる天正18年(1590)を否定するものではない。後世の改変が著しい本城館であるが、今後周辺での開発に際しては発見した堀状構造に留意しながら調査を行うことで、全体像を復元していくことが期待される。



1 2 トレンチ全景 (南から)



2 1 トレンチ 堀跡底面の遺物出土状況 (南から)



3 南側の堀跡推定ライン (南東から)

5. 台遺跡（第2次調査）

a. 遺跡の位置と環境

台遺跡はJR岩沼駅の南西約2.4kmに位置する。自然地形としては、岩沼西部丘陵から派生する緩斜面から裾部にかけて広がる。遺跡内ではこれまで平成23年に市史編纂事業に伴う調査が実施されており、時期不明の小穴と縄文土器・弥生土器・古墳時代前期・平安時代の土器・須恵器・石器などが発見されている（斎野2015e・岩教委2020）。



第107図 台遺跡位置図

b. 調査の経過

台遺跡での調査は、平成29年10月11日と25日に実施した。新たに排水路が敷設される範囲内にトレンチを4箇所設定し、重機を用いて表土の掘削を行った。その後、人力によって自然堆積層上面の遺構精査・土層確認のための壁面の精査を実施した。遺構精査終了後に各トレンチにおいて全景撮影を行い、あわせて土層断面図を作成した。そしてトレンチの位置を測量した後に埋戻しを行っている。

c. 調査成果

【1 トレンチ】

1 トレンチは東西2m、南北3mの6m²の規模で設定した。現地表面より50cmまで重機を用いて掘削し、その後人力で底面及び西壁を精査し、遺構の有無を判断した。堆積土は現代水田耕作土である1層、現代盛土である3層と自然堆積土である4層が確認され、3層の埋立てにより4層上部の一部では影響を受けているものの、4層は概ね水平堆積であると思われる。遺構は発見されていない。遺物は残土中より145頁真写の成形不明の土師器甕が出土しているが、小片のため図示できなかつた。

【2 トレンチ】

2 トレンチは東西3m、南北2mの6m²の規模で設定した。現地表面より80cmまで重機を用いて掘削し、その後人力で底面及び南壁を精査し、遺構の有無を判断した。堆積土は現代水田耕作土である1・2層と自然堆積土である4・5層が確認され、概ね水平堆積である。遺構・遺物は発見されていない。

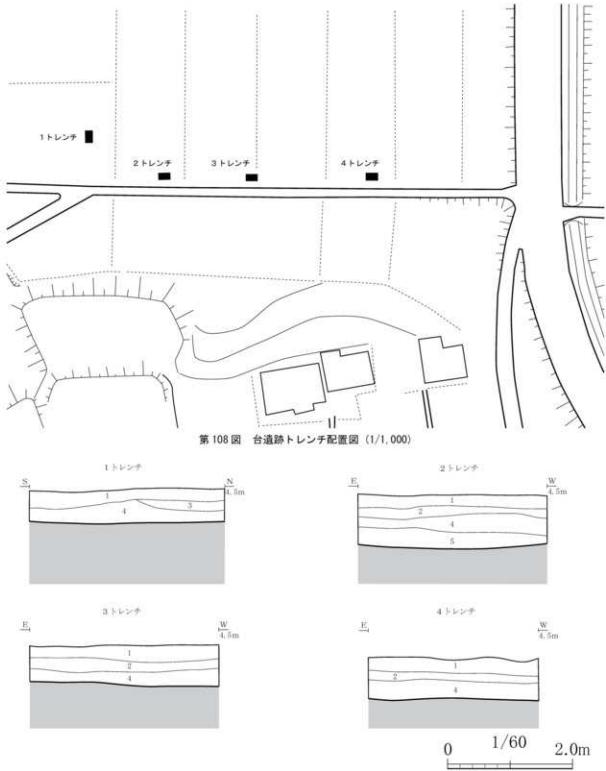
【3 トレンチ】

3 トレンチは東西3m、南北2mの6m²の規模で設定した。現地表面より65cmまで重機を用いて掘削し、その後人力で底面及び南壁を精査し、遺構の有無を判断した。堆積土は現代水田耕作土である1・2層と自然堆積土である4層が確認され、概ね水平堆積である。遺構・遺物は発見されていない。

【4 トレンチ】

4 トレンチは東西3m、南北2mの6m²の規模で設定した。現地表面より65cmまで重機を用いて掘削し、その後人力で底面及び南壁を精査し、遺構の有無を判断した。堆積土は現代水田耕作土である1・2層と自然堆積土である4層が確認され、概ね水平堆積である。遺構・遺物は発見されていない。

5. 台遺跡（第2次調査）



第109図 台遺跡断面図(1/60)

トレンチ土層注記

層番号	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR3/1)	粘質シルト	水田耕作土。
2	灰色 (10V5/1)	粘質シルト	酸化鉄を多量含む。
3	黒褐色 (10YR2/2)	粘質シルト	暗灰褐色粗砂を多量含む。客土。
4	黒色 (2.5Y2/1)	粘質シルト	分解が進んだ植物遺体をやや多く含む。
5	黒色 (2.5Y2/1)	泥炭	未分解の植物遺体を極めて多量含む。

d.まとめ

今回の台遺跡の調査では、遺構・遺物は発見されなかった。また低位丘陵を形成する褐色粘質シルトも未確認であり、湿地状の堆積のみが確認されたことから、遺跡は調査地点までは広がらないことが明らかとなった。



1. 3トレンチ墨削風景（北西から）



2. 1トレンチ土層断面（東から）



3. 2トレンチ土層断面（北から）



4. 3トレンチ土層断面（北から）



5. 4トレンチ土層断面（北から）



6. 調査地遠景（北東から）



7. 台遺跡出土遺物

6. 煙堤上貝塚（第1次調査）

6. 煙堤上貝塚（第1次調査）

a. 遺跡の位置と環境

煙堤上貝塚はJR岩沼駅の南西約2.0kmに位置する。自然地形としては、岩沼西部丘陵から東へ張り出す標高12~24mほどの低位丘陵の尾根端部から東側の低地にかけて広がる。遺跡内ではこれまで発掘調査は未実施であるが、南斜面と東斜面の一部でシジミを主体とした貝層が分布し、これまで遺跡内で発見された土器から縄文時代前期前葉頃に貝塚が形成されたと考えられている（斎野2015b）。なお、遺跡が位置する低位丘陵の南、及び北側斜面には12基からなる煙堤上横穴墓群が存在している。



第110図 煙堤上貝塚位置図

b. 調査の経過

煙堤上貝塚での調査は、平成29年10月11日から18日にかけて断続的に実施した。新たに排水路が敷設される範囲内にトレンチを10箇所設定し、重機を用いて表土の掘削を行った。その後、人力によって自然堆積層上面の遺構精査、土層確認のための壁面の精査を実施した。遺構精査終了後に各トレンチにおいて全景撮影を行い、あわせて土層断面図を作成した。そしてトレンチの位置を測量した後に埋戻しを行っている。なお、2トレンチについては湧水が激しく、調査時に壁面が崩落するなど危険性が高まることから、精査などは実施していない。

c. 調査成果

【1トレンチ】

1トレンチは東西2m、南北4mの8m²の規模で設定した。現地表面より165cmまで重機を用いて掘削し、その後人力で底面及び西壁を精査し、遺構の有無を判断した。堆積土は現代水田耕作土である1層、現代盛土である3層と自然堆積土である4・6・7層が確認され、4層以下は概ね水平堆積である。遺構・遺物は発見されていない。

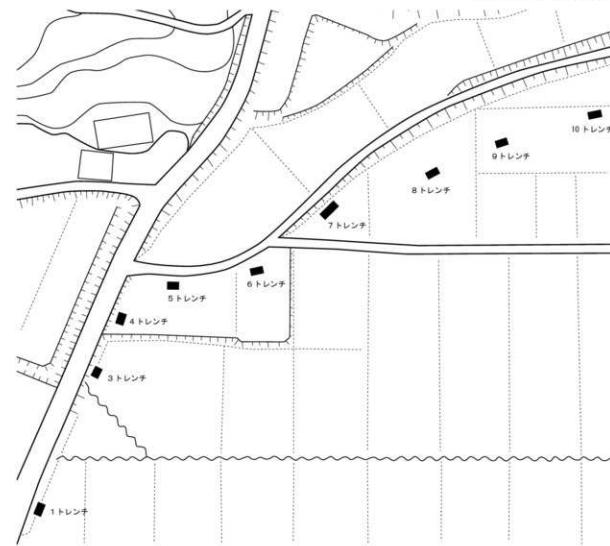
【3トレンチ】

3トレンチは東西2m、南北3mの6m²の規模で設定した。現地表面より60cmまで重機を用いて掘削し、その後人力で底面及び北壁を精査し、遺構の有無を判断した。堆積土は現代水田耕作土である2層、自然堆積土である4・6層が確認され、4・6層は概ね水平堆積である。遺構・遺物は発見されていない。

【4トレンチ】

4トレンチは東西2m、南北3mの6m²の規模で設定した。トレンチを設定した箇所は周辺の水田面より150cmほど高くなっていたが、重機を用いて掘削した結果、現代盛土によって高まりが形成されていることが判明した。その後人力で底面及び南壁を精査し、遺構の有無を判断した。自然堆積土は掘削した限りでは4層のみが認められ、水平堆積と思われる。遺構・遺物は発見されていない。

6. 煙堤上貝塚（第1次調査）



第111図 煙堤上貝塚トレンチ配置図(1/1,000)

【5トレンチ】

5トレンチは東西3m、南北2mの6m²の規模で設定した。トレンチを設定した箇所は4・6トレンチと同様に周辺の水田面より150cmほど高くなっていたが、これらは現代盛土であることが判明した。その後人力で底面及び南壁を精査し、遺構の有無を判断した。自然堆積土は掘削した限りでは4・6~8層が確認され、すべてが水平堆積と思われる。遺構・遺物は発見されていない。

【6トレンチ】

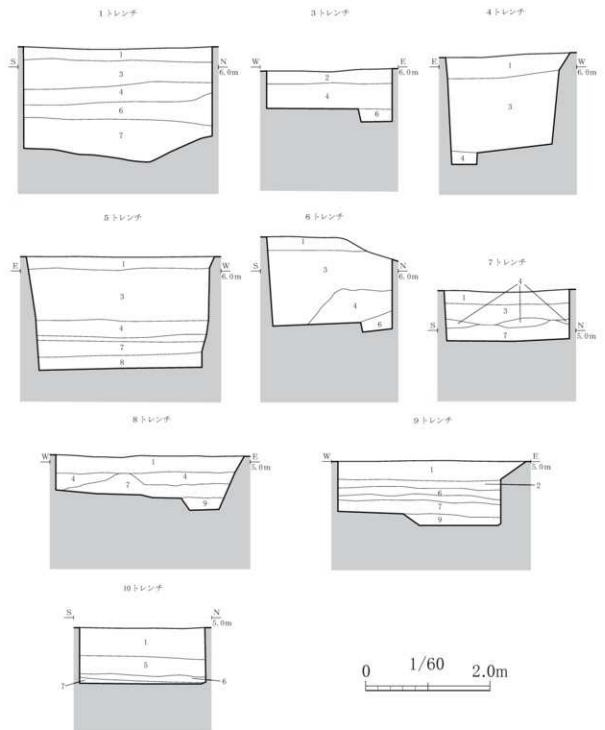
6トレンチは東西4m、南北2mの8m²の規模で設定した。トレンチを設定した箇所は4・5トレンチと同様に周辺の水田面より150cmほど高くなっていたが、これらは現代盛土であることが判明した。その後人力で底面及び西壁を精査し、遺構の有無を判断した。自然堆積土は掘削した限りでは4・6層が確認され、いずれも南側に向かって傾斜していることが確認された。遺構・遺物は発見されていない。

【7トレンチ】

7トレンチは東西5m、南北2mの10m²の規模で設定した。現地表面より80cmまで重機を用いて掘削し、その後人力で底面及び西壁を精査し、遺構の有無を判断した。堆積土は現代水田耕作土である1層、現代盛土である3層と自然堆積土である4・7層が確認され、3層の埋立てに伴う影響に

6. 煙堤上貝塚（第1次調査）

6. 煙堤上貝塚（第1次調査）



第112図 煙堤上貝塚土層断面図 (1/60)

トレンチ土層注記

層番号	土色	土質	備考
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	現代耕作操作土。
2	黒褐色 (10YR2/2)	粘質シルト	現代耕作操作土。
3	灰オグーブ色 (5Y5/2)	山砂	現代客土。山砂主体。
4	灰黄色 (10YR4/2)	粘土	旧水田耕作土。砂利を少許含む。
5	黒褐色 (2, 5Y3/1)	粘質シルト	砂利をや多く含む。下部に灰白色火山灰を含む。
6	黒褐色 (7, 5Y3/1)	粘質シルト	植物遺体・酸化鉄を少許含む。
7	黒褐色 (2, 5Y3/2)	粘土	砂利を少許含む。
8	黒褐色 (10YR2/1)	粘土	酸化鉄を多量含む。
9	黒褐色 (10YR3/1)	泥炭	未分解の植物遺体を多量含む。

より4層は部分的な確認であるものの、4・7層は概ね水平堆積である。構造は発見されていない。遺物は掘削時にクロ成形で内面黒色処理をされている写真12-4・5の土師器壺、また4層より写真12-6～9の土師器甕が出土しているが、いずれも磨滅が激しく、また小片のため図示できなかつた。

【8トレンチ】

8トレンチは東西3m、南北2mの6m²の規模で設定した。現地表面より65cmまで重機を用いて掘削し、その後人力で底面及び北壁を精査し、構造の有無を判断した。堆積土は現代水田耕作土である1層と自然堆積土である4・7・9層が確認され、4層は西側へ向かってやや傾斜するものの、7・9層は概ね水平堆積である。構造は発見されていない。遺物は7層より写真12-1の縄文土器が出土しているが、小片のため図示できなかつた。

【9トレンチ】

9トレンチは東西3m、南北2mの6m²の規模で設定した。現地表面より85cmまで重機を用いて掘削し、その後人力で底面及び北壁を精査し、構造の有無を判断した。堆積土は現代水田耕作土である1・2層と自然堆積土である6・7・9層が確認され、概ね水平堆積である。構造・遺物は発見されていない。

【10トレンチ】

10トレンチは東西3m、南北2mの6m²の規模で設定した。現地表面より90cmまで重機を用いて掘削し、その後人力で底面及び西壁を精査し、構造の有無を判断した。堆積土は現代水田耕作土である1層と自然堆積土である5～7層が確認され、概ね水平堆積である。構造は発見されていない。遺物は7層上面より写真12-2・3の須恵器甕、10の土師器甕、11の土師器壺、12の器種不明土器器が出土しているが、磨滅が激しく、また小片のため図示できなかつた。

d. まとめ

今回の煙堤上貝塚の調査では、1～3・8～10トレンチでは水田耕作土下70～80cmで、未分解植物遺存体を含む泥炭層が検出された。この泥炭層の上部には西方の丘陵地より供給されたとみられる砂利を含む7層が広く分布しており、その後に10トレンチでは灰白色火山灰（10世紀初頭の十和田火山噴出物）がみられるなど、低地部における地形変遷過程の一端を明らかにすることができた。

6. 煙堤上貝塚（第1次調査）



1 調査地遠景（南東から）



2 1トレンチ全景（南東から）



3 2トレンチ全景（南東から）



4 3トレンチ全景（南東から）



5 4トレンチ全景（南東から）



6 5トレンチ全景（南東から）



7 6トレンチ全景（西から）



8 7トレンチ全景（南から）



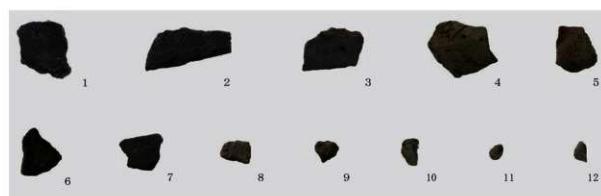
9 8トレンチ全景（南から）



10 9トレンチ全景（南西から）



11 10トレンチ全景（南から）



12 煙堤上貝塚出土遺物

6. 煙堤上貝塚（第1次調査）

第IV章 岩沼北部地区的調査

1. 熊野遺跡（第3次調査）

a. 遺跡の位置と環境

熊野遺跡はJR岩沼駅の北西約1.8kmに位置する。自然地形としては、岩沼西部丘陵から東へ張り出す標高17m前後の低位丘陵頂部から裾部にかけて広がる。遺跡の北西部には、平成17年に蔵骨器を伴う板碑が発見された中ノ原遺跡が存在する。なお、遺跡内ではこれまで自動車整備工場建設に伴う調査が平成25・27年に実施されており、古墳時代前期や奈良・平安時代の堅穴建物跡、中世の方形堅穴建物跡などの遺構が確認されている。また遺物は繩文土器、弥生土器、古墳時代前期や奈良・平安時代の土師器などのほか、龍泉窯系の青磁が出土している（岩沼市教委2019、川又2015）。



第113図 熊野遺跡位置図

b. 調査の経過

熊野遺跡での調査は、平成29年1月5日から6日にかけて実施した。調査では、当初一辺が60cmほどの小トレンチを30箇所設定し、人力により掘削を行った。その結果、低位丘陵を形成するⅢ層の分布が確認できた箇所と、湿地状の堆積が確認できた箇所に分かれたことから、1～3トレンチを新たに設定した。各トレンチの表土掘削は全て重機を使用し、その後、人力によって自然堆積層上面の遺構精査、土層確認のための壁面の精査を行い、遺構精査終了後に各トレンチにおいて全景撮影と土層断面図を作成した。そしてトレンチの位置を測量した後に埋戻しを行っている。

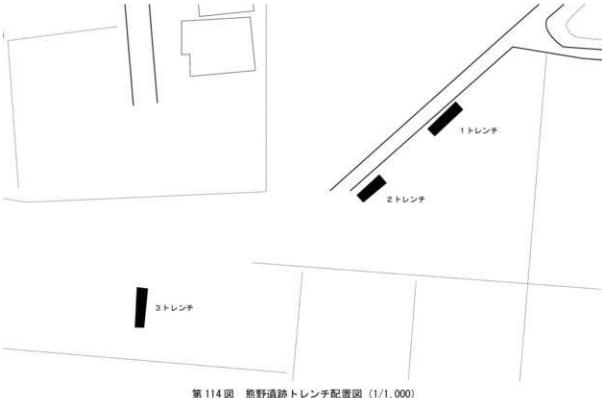
c. 調査成果

【1トレンチ】

1トレンチは東西2m、南北10mの20m²の規模で設定した。現地表面より30cmまで重機を用いて掘削し、その後人力で底面及び北壁を精査し、遺構の有無を判断した。堆積土は基本層I～Ⅲ層が確認され、概ね水平堆積であると思われる。遺構は発見されていない。遺物は精査時に非ロクロ成形の土師器甕が出土しているが、小片のため図示できなかった。

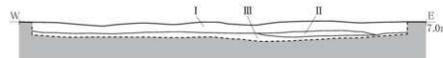
【2トレンチ】

2トレンチは東西2m、南北8mの16m²の規模で設定した。現地表面より30cmまで重機を用いて掘削し、その後人力で底面及び北壁を精査し、遺構の有無を判断した。堆積土は基本層I～Ⅲ層が確認され、中央部の一部にⅠ層が入り込むが、基本的には水平堆積であると思われる。遺構は発見されていない。遺物は精査時に第114図に図示した砥石が出土している。また残土中から非ロクロ成形の土師器甕が出土しているが、小片のため図示できなかった。

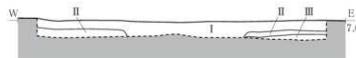


第114図 熊野遺跡トレンチ配置図 (1/1,000)

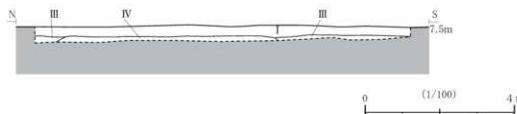
1トレンチ北壁セクション



2トレンチ北壁セクション



3トレンチ北壁セクション

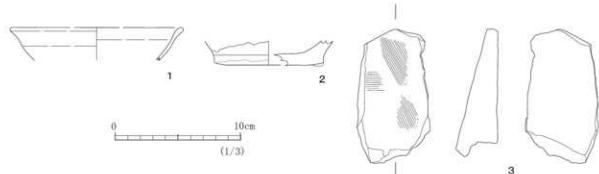


第115図 熊野遺跡土層断面図 (1/100)

トレンチ土層注記

層番号	土色	土質	備考
I	黒褐色 (10YR2/3)	粘質土	水田耕作土。
II	黒褐色 (10YR3/1)	粘質シルト	しまりやや弱い。植物遺体をやや多く、鵞灰色粘土ブロックを少量含む。
III	暗褐色 (10YR3/3)	粘質土	しまりやや弱い。植物遺体をやや多く、砂礫を少量含む。
IV	灰オリーブ色 (5S5/2)	粘質土	グライ層。植物遺体をごく少量含む。

1. 熊野遺跡（第3次調査）



第116図 熊野遺跡出土遺物

出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm)			写真番号
						口径	底径	器高	
1	3Tr・精査	須恵器	环	在地	内外面ロクロナギ。9世紀前半。	14.0	—	(2.6)	
2	3Tr・精査	施釉陶器	瓶子	廻戸	外面に緑灰色の灰釉。底部外面にリング状の付着物。13世紀後半。	—	(8.8)	(2.0)	
番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm)	幅	厚さ	写真番号
3	2Tr・精査	石製品	砥石	安山岩。1面使用。重量255g。		(10.2)	(5.8)	(3.2)	

【3トレンチ】

3トレンチは東西2m、南北10mの20m²の規模で設定した。現地表面より30cmまで重機を用いて掘削し、その後人力で底面及び北壁を精査し、遺構の有無を判断した。堆積土は基本層Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ層が確認され、北寄りの一部にⅣ層が入り込むが、基本的には水平堆積であると思われる。トレンチの中央に現代水田の暗渠があるのみで、遺構は発見されていない。遺物はⅢ・Ⅳ層上面の精査時に第116図に図示した1の須恵器環と2の古瀬戸瓶子が出土している。

d.まとめ

今回の熊野遺跡の調査では、調査範囲が限定的であり遺構は発見されなかったが、古代、中世の遺物が少量ながら発見されたことは、主として丘陵上に展開している遺跡が低地周辺まで広がりを持つことを示すものと思われる。今後は丘陵上での遺跡の構成を把握とともに、ムラの生産域と推定される低地部についても注視していく必要がある。

1. 熊野遺跡（第3次調査）



1 調査地点近景（北東から）



2 表土掘削風景（南から）



3 1トレンチ全景（南西から）



4 2トレンチ全景（南西から）



5 3トレンチ全景（南から）



6 作業風景（南から）



7 熊野遺跡出土遺物写真

2. 杉の内遺跡（第4次調査）

2. 杉の内遺跡（第4次調査）

a. 遺跡の位置と環境

杉の内遺跡はJR岩沼駅の北西約2.2kmに位置する。自然地形としては、岩沼西部丘陵から東へ張り出す標高16mほどの中長岡丘陵中央付近西寄りの頂部から南側斜面、及び裾部にかけて広がる。遺跡の西側には、平成4年に宮城県教育委員会によって調査が行われた北原遺跡が隣接し、北側には平成22・23年に市史編纂事業に伴う調査が実施された上小渕遺跡が存在する。なお、遺跡内では昭和



第117図 杉の内遺跡位置図

26年に国学院大学によって、また平成22・23年には市史編纂事業に伴う調査が実施されており、古墳時代前期と奈良・平安時代の竪穴建物跡や、弥生土器、古墳時代や奈良時代の土器類、平安時代の須恵器が出土している（太田2015a）。

b. 調査の経過

杉の内遺跡での調査は、平成28年12月13日から16日にかけて実施した。調査では、当初トレンチを11箇所設定したが、1～5トレンチでは泥炭層が認められたことから湿地であることが判明した。一方でローム質土が確認された6～11トレンチについては全体的な構造確認を行うために繋げて表土掘削を実施し、このトレンチを6トレンチと呼称することとした。各トレンチの表土掘削は全て重機を使用し、その後、人力によって自然堆積層上面の構造精査、土層確認のための壁面の精査を行い、構造精査終了後に各トレンチにおいて全景撮影と土層断面図を作成した。そしてトレンチの位置を測量した後に埋戻しを行っている。

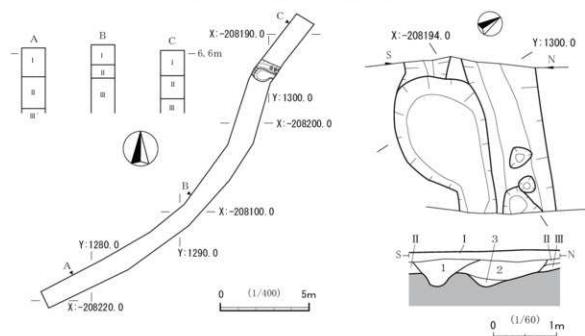
c. 調査成果

【6トレンチ】

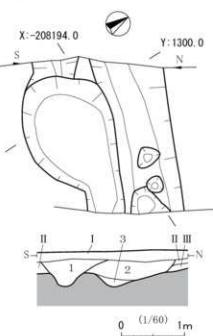
6トレンチは東西2m、南北54mの108m²の規模で設定した。現地表面より20cmまで重機を用いて掘削し、その後人力で底面及び壁面を精査し、構造の有無を判断した。堆積土は基本層I・II・III・III'層が確認されているが、長岡丘陵を形成するローム質土であるIII層を基準としてみた場合には調査区中央付近が最も高く、北側にかけてはやや緩やかに、そして南側にかけてはやや急激に傾斜していた。遺構は調査区北側で溝跡が確認されている。このSD01は土層の観察から新田2時期の変遷を考えられるものであり、北側から南側へ造り替えられた可能性がある。古段階の北側溝は上幅120cm、下幅45cmで、掘り込み面からの深さは42cmを測る。遺構内の堆積土からは第121図に示した染付磁器、近世陶器が出土している。新段階の南側溝は不定形をなしているが上幅60～80cm、下幅10～42cmで、掘り込み面からの深さは45cmを測る。堆積土からは細片のために図示できなかったが須恵器甕、白磁の入子蓋、大堀相馬焼の碗・瓶、器種不明の瓦質土器、近代瓦も出土している。



第118図 杉の内遺跡トレンチ配置図 (1/1,200)



第119図 6トレンチ配置図 (1/400)

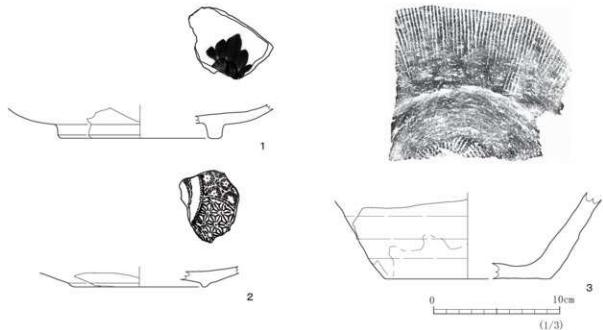


第120図 SD01溝跡

トレンチ土層注記

層番号	土色	土質	備考
I	黒色 (G10YR2/1)	粘質シルト	水田耕作土。
II	暗褐色 (G10YR5/3)	粘質シルト	しまりや深い。I層との境界には酸化鉄が集積。砂利を少量含む。
III	にじい・黄褐色 (G10YR5/4)	ローム質土	しまりやや深い。上位に暗褐色粘質シルトブロックを少數含む。
III'	灰オカーブ色 (G5/4.2)	粘質シルト	しまりやや深い。グラウヒ化したローム灘移植層。
I	オリーブ褐色 (G10YR3/3)	シルト	しまりやや深い。黒褐色粘土中ブロックを多量含む。底面には粗砂が薄く堆積。
2	にじい・黄褐色 (G10YR5/3)	粘質シルト	しまりやや深い。ローム質土小ブロックを少數含む。
3	オリーブ黒色 (G5Y2/1)	粘質シルト	しまりやや深い。小礫・砂利を多量。グラウヒ化したローム質土をやや多く含む。

2. 杉の内遺跡（第4次調査）



第121図 SD01出土遺物

出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm)			写真番号
						口径	底径	器高	
1	SD01	染付磁器	大皿	不明	内面に草花文。胎土は灰色で緻密。内面に胎土目跡。19世紀代。	-	13.2	(1, 2)	
2	SD01	染付磁器	皿	瀬戸美濃	型紙模。19世紀末以降。	-	(10.9)	(1, 6)	
3	SD01	陶器	擂鉢	在地	輪目3条1単位。内外面に赤褐色の鉄輪を施釉するが、内面は磨滅が顕著。底部外面上には回転糸切痕。時期不明。	-	(13.0)	(6, 8)	

d.まとめ

杉の内遺跡では調査の結果、南東方向に派生する小尾根の存在が明らかとなり、その北側裾部において耕地整理以前に機能していたと考えられる溝跡が確認されている。



1 調査地近景（南から）



2 遺構確認状況（北から）



3 遺構確認状況（北東から）



4 SD01（東から）



2. 杉の内遺跡（第4次調査）

3. 上小湊遺跡（第2次調査）

3. 上小湊遺跡（第2次調査）

a. 遺跡の位置と環境

上小湊遺跡はJR岩沼駅の北西約2.2kmに位置する。自然地形としては、岩沼西部丘陵から東へ張り出す標高20mほどの長岡丘陵中央付近西寄りの頂部から北側斜面、及び裾部にかけて広がる。遺跡の西側には、平成4年に宮城県教育委員会によって調査が行われた北原遺跡が隣接し、南側には昭和26年に国学院大学によって調査が行われた杉の内遺跡が存在する。なお、遺跡内ではこれまで市史編纂事業に伴う調査が平成22年に実施されており、遺構は未発見であるものの、遺物は弥生土器、古墳時代の土師器、平安時代の須恵器が出土している（太田2015b）。



第122図 上小湊遺跡位置図

b. 調査の経過

上小湊遺跡での調査は、平成28年12月16日から22日にかけて実施した。調査では、東側で隣接する長塚北遺跡での調査成果から対象地内でも遺構・遺物が極めて希薄である可能性が考慮されたことから、まず一辺が60cmほどの正方形の小トレンチを55箇所に設定し、人力で掘り下げを実施した。その結果、対象地の大部分では泥炭層が確認されたのみであり、遺構・遺物は認められなかつたが、一部で遺物が出土した地点を中心にして重機による表土掘削を実施した。その後、人力によって自然堆積層上面の遺構精査、土層確認のための壁面の精査を行い、遺構精査終了後に各トレンチにおいて全景撮影と土層断面図を作成した。そしてトレンチの位置を測量した後に埋戻しを行っている。

c. 調査成果

【1トレンチ】

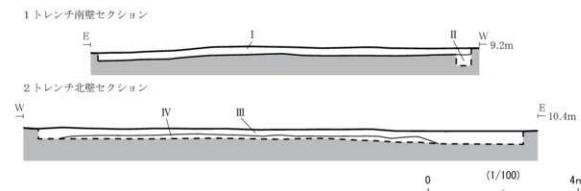
1トレンチは東西10m、南北2mの20m²の規模で設定した。現地表面より20cmまで重機を用いて掘削し、その後人力で底面及び南壁を精査し、遺構の有無を判断した。堆積土は基本層Ⅰ・Ⅱ層が確認され、概ね水平堆積であると思われる。遺構は発見されていない。遺物は水田耕作土中から土師器甕、近世以降の金属製品が出土しているが、小片のため図示できなかつた。

【2トレンチ】

2トレンチは東西15m、南北2mの30m²の規模で設定した。現地表面より25cmまで重機を用いて掘削し、その後人力で底面及び北壁を精査し、遺構の有無を判断した。堆積土は基本層Ⅲ・Ⅳ層が確認され、概ね水平堆積である。遺構は発見されていないが、Ⅳ層精査時に第125図に図示した須恵器甕が出土したほか、細片のために図示できなかつたが非クロロ成形の土師器甕、瀬戸美濃産の染付磁器皿、大堀相馬焼の瓶、小野相馬焼の碗も出土している。



第123図 上小湊遺跡トレンチ配置図 (1/2,000)



第124図 土層断面図 (1/100)

トレンチ土層注記

層No.	土色	土質	備考
I	暗褐色	(10YR3/3) 粘質シルト	水田耕作土。
II	黒色	(10YR2/1) 泥炭	しまり極めて弱い。未分解の植物遺体をやや多く含む。
III	暗褐色	(10YR3/3) シルト	耕作土。
IV	暗褐色	(10YR3/3) シルト	しまりやや弱い。にぶい黄褐色シルト中ブロックを少數含む。

3. 上小測遺跡（第2次調査）



第125図 上小測遺跡出土遺物

出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種類	器種	产地	特徴	法量(cm)		写真番号
						口径	底径	
1	2Tr・精查	須恵器	甕	在地	内面クロコナデ。外面は木口状工具による成形の後にロクロナギ。	-	13.2	(1.2)

d.まとめ

今回の調査は小規模であったが、古代の土器が出土していることから、低地をのぞむ丘陵上から裾部にかけて該期の集落が展開している可能性が考慮できるようになった。また今回の調査では調査面積が限られているために把握はできなかったが、小トレンチの一部では灰白色火山灰の粒が層中に散見してみられる箇所もあることから、今後調査を行う際には中世期の水田が存在する可能性も留意する必要がある。



1 表土掘削風景（南西から）



2 1トレンチ全景（東から）



3 2トレンチ全景（北東から）



4 上小測遺跡出土遺物

4. 長塚北遺跡（第1次調査）

a. 遺跡の位置と環境

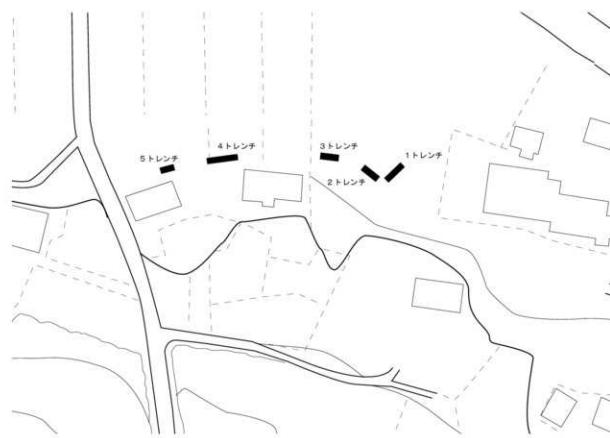
長塚北遺跡はJR岩沼駅の北西約2.0kmに位置する。自然地形としては、岩沼西部丘陵から東へ張り出する標高18mほどの長岡丘陵中央付近の頂部から北側斜面、及び裾部にかけて広がる。遺跡の南側頂上部には、昭和26年に国学院大学によって調査が行われた長塚古墳が隣接しているほか、遺跡内には平安時代に尾張國より津島天王の分靈を勧請したと伝わる八雲神社が存在する。なお、遺跡内ではこれまで縄文土器、古墳時代や奈良・平安時代の土師器が採集されている（白鳥2015c）。



第126図 長塚北遺跡位置図

b. 調査の経過

長塚北遺跡での調査は、平成28年12月10日から14日にかけて実施した。新たに排水路が敷設される範囲内にトレンチを5箇所設定し、重機を用いて表土の掘削を行った。その後、人力によって自然堆積層上面の遺構精査、土層確認のための壁面の精査を実施した。遺構精査終了後に各トレンチにおいて全景撮影を行い、あわせて土層断面図を作成した。そしてトレンチの位置を測量した後に埋戻しを行っている。



第127図 長塚北遺跡トレンチ配置図 (1/1,200)

4. 長塚北遺跡（第1次調査）

c. 調査成果

【1トレンチ】

1トレンチは東西2m、南北8mの16m²の規模で設定した。現地表面より36cmまで重機を用いて掘削し、その後人力で底面及び東壁を精査し、遺構の有無を判断した。堆積土は基本層I・II層が確認され、概ね水平堆積である。なお、遺構・遺物は発見されていない。

【2トレンチ】

2トレンチは東西6m、南北2mの12m²の規模で設定した。現地表面より30cmまで重機を用いて掘削し、その後人力で底面及び南壁を精査し、遺構の有無を判断した。堆積土は基本層I・II層が確認され、概ね水平堆積である。なお、遺構・遺物は発見されていない。

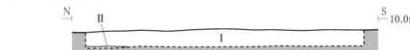
【3トレンチ】

3トレンチは東西6m、南北2mの12m²の規模で設定した。現地表面より24cmまで重機を用いて掘削し、その後人力で底面及び南壁を精査し、遺構の有無を判断した。堆積土は基本層I・II層が確認され、概ね水平堆積である。なお、遺構・遺物は発見されていない。

【4トレンチ】

4トレンチは東西10m、南北2mの20m²の規模で設定した。現地表面より20cmまで重機を用いて掘削し、その後人力で底面及び南壁を精査し、遺構の有無を判断した。堆積土は基本層I・III層が確認されているが、長岡丘陵を構成するローム質土は確認されていない。なお、遺構・遺物は発見されていない。

1トレンチ東壁セクション



2トレンチ南壁セクション



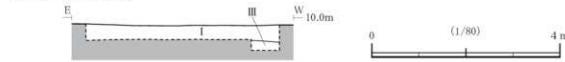
3トレンチ南壁セクション



4トレンチ南壁セクション



5トレンチ南壁セクション



トレンチ土層注記

層名	土色	土質	備考
I	暗褐色 (10YR3/3)	粘質シルト	水田耕作土。
II	褐色 (10YR4/4)	ローム質土	しまりやや強い。上位には暗褐色粘質シルト小ブロックを少數含む。
III	黒色 (10YR2/1)	泥炭	しまり極めて弱い。未分解の植物遺体をやや多く含む。

【5トレンチ】

5トレンチは東西4m、南北2mの8m²の規模で設定した。現地表面より24cmまで重機を用いて掘削し、その後人力で底面及び南壁を精査し、遺構の有無を判断した。堆積土は基本層I・III層が確認されているが、4トレンチ同様に長岡丘陵を構成するローム質土は確認されていない。なお、遺構・遺物は発見されていない。

d.まとめ

1～3トレンチでは長岡丘陵を構成するローム質土（II層）は確認されているが、西側に位置する4・5トレンチではローム質土、漸移層は確認できず、丘陵裾部の直下に湿地が広がることが明らかとなった。



1 1トレンチ全景 (南から)



2 2トレンチ全景 (東から)



3 3トレンチ全景 (東から)



4 4トレンチ全景 (東から)

第128図 土層断面図

5. 上根崎遺跡（第3次調査）

5. 上根崎遺跡（第3次調査）

a. 遺跡の位置と環境

上根崎遺跡はJR岩沼駅の北西約1.5kmに位置する。自然地形としては、岩沼西部丘陵から東へ張り出す標高20mほどの長岡丘陵東端部頂部から南北斜面、及び東側裾部にかけて広がる。遺跡の西南部には、平成15年に調査が行われた長徳寺前遺跡が、また西側中央部には新明塚古墳が存在する。なお、遺跡内ではこれまで県道改良事業に伴う調査が平成23年に実施されており、屋敷地を区画する構、地下室（ムロ）状の土坑、掘立柱建物や壙の可能性がある柱穴などの遺構が確認されている。また遺物は縄文土器、弥生土器、平安時代の土師器のほか、中世陶器が出土している（岩沼市教委2012、白鳥2015b）。



第129図 上根崎遺跡位置図

b. 調査の経過

上根崎遺跡での調査は、平成29年10月2日から3日にかけて実施した。新たに排水路が敷設される範囲内にトレンチを10箇所設定し、重機を用いて表土の掘削を行った。その後、人力によって自然堆積層上面の遺構精査、土層確認のための壁面の精査を実施した。遺構精査終了後に各トレンチにおいて全景撮影を行い、あわせて土層断面図を作成した。そしてトレントの位置を測量した後に埋戻しを行っている。

c. 調査成果

【1トレント】

1トレントは東西4m、南北2mの8mに設定した。現地表面より80cmまで重機を用いて掘削し、その後人力で底面及び北壁を精査し、遺構の有無を判断した。堆積土は基本層I・II・IV・V層が確認され、概ね水平堆積である。なお、遺構・遺物は発見されていない。

【2トレント】

2トレントは東西4m、南北2mの8mに設定した。現地表面より60cmまで重機を用いて掘削し、その後人力で底面及び北壁を精査し、遺構の有無を判断した。堆積土は基本層I・II・IV・V層が確認され、I・II・V層が概ね水平堆積であるのに対し、IV層は部分的な検出であった。なお、遺構・遺物は発見されていない。

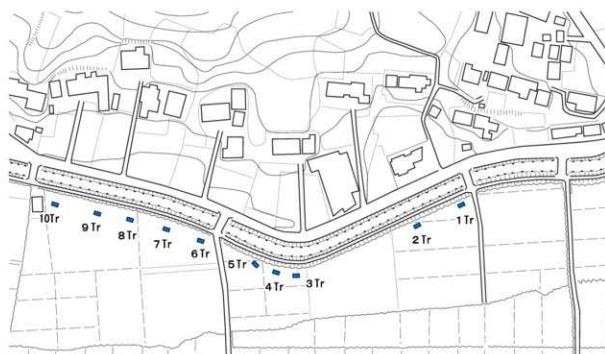
【3トレント】

3トレントは東西4m、南北2mの8mに設定した。現地表面より60cmまで重機を用いて掘削し、その後人力で底面及び北壁を精査し、遺構の有無を判断した。堆積土は基本層I・II・IV・V層が確認され概ね水平堆積である。なお、遺構・遺物は発見されていない。

【4トレント】

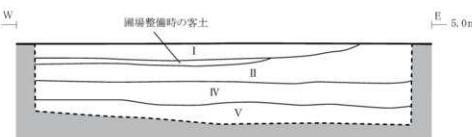
4トレントは東西4m、南北2mの8mに設定した。現地表面より80cmまで重機を用いて掘削し、

5. 上根崎遺跡（第3次調査）

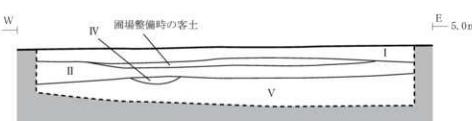


第130図 上根崎遺跡トレント配図図 (1/1,500)

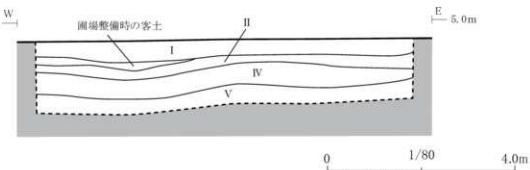
1 トレント北壁セクション



2 トレント北壁セクション

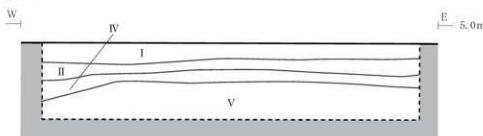


3 トレント北壁セクション

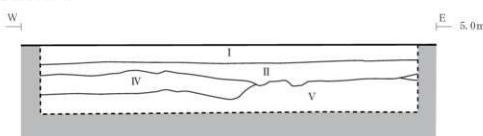


第131図 1～3トレント土層断面図

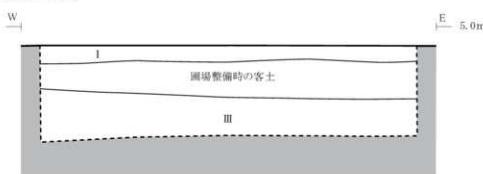
4 トレンチ北壁セクション



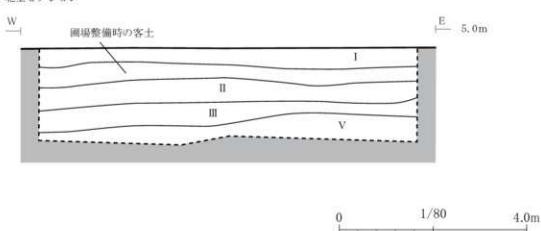
5 トレンチ北壁セクション



7 トレンチ北壁セクション

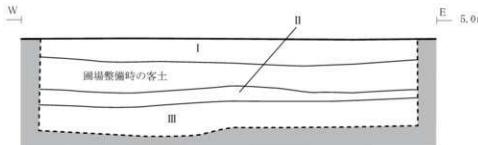


8 トレンチ北壁セクション

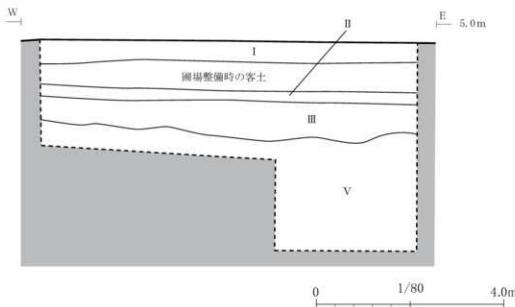


第132図 4~8 トレンチ土層断面図

9 トレンチ北壁セクション



10 トレンチ北壁セクション



第133図 9・10 トレンチ土層断面図

トレンチ土層注記

層No.	土色	土質	備考
I	灰黄褐色 (10YR5/2)	粘土	しまりなし。現代水田耕作土。
II	褐灰色 (10B4/1)	粘土	しまりなし。耕地整理以前の水田耕作土。
III	黒褐色 (2,5Y3/1)	粘土	しまりなし。黑色泥炭が不規則に入り込む。Ⅲ層とIV・V層の層境界は不整合。
IV	黑褐色 (2,5Y3/1)	泥炭質粘土	しまりなし。10世紀前半に陥没した灰白色火山灰・小・ブロックを含む。
V	黒色 (2,5Y2/1)	泥炭	しまりなし。層中に未分解の植物茎・根を多量含む。

その後人力で底面及び北壁を精査し、遺構の有無を判断した。堆積土は基本層I・II・IV・V層が確認され、I・IIが概ね水平堆積であるのに対し、IV・V層は西側へ傾斜していることが確認された。なお、遺構・遺物は発見されていない。

【5 トレンチ】

5 トレンチは東西4m、南北2mの8m²に設定した。現地表面より70cmまで重機を用いて掘削し、その後人力で底面及び北壁を精査し、遺構の有無を判断した。堆積土は基本層I・II・IV・V層が確認され、I・II・V層が概ね水平堆積であるのに対し、IV層は部分的な検出であった。なお、遺構・遺物は発見されていない。

5. 上根崎遺跡（第3次調査）

【6 トレンチ】

6 トレンチは東西4 m、南北2 mの8 m²に設定した。現地表面より40 cmまで重機を用いて掘削したが、I層以下は擾乱が著しく、土層図の作成等は行っていない。なお、遺構・遺物は発見されていない。

【7 トレンチ】

7 トレンチは東西4 m、南北2 mの8 m²に設定した。現地表面より90 cmまで重機を用いて掘削し、その後人力で底面及び北壁を精査し、遺構の有無を判断した。堆積土は基本層Ⅰ・Ⅲ層が確認されたが、Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ層は見られない。I層の直下には厚さ40 cmの盛土層が存在し、この下で確認されたⅢ層では下位に存在する泥炭層が不規則に入り込む。このⅢ層の乱れについては、時期不明の地震動に伴う液状化現象などの痕跡と考えられる。なお、遺構・遺物は発見されていない。

【8 トレンチ】

8 トレンチは東西4 m、南北2 mの8 m²に設定した。現地表面より100 cmまで重機を用いて掘削し、その後人力で底面及び北壁を精査し、遺構の有無を判断した。堆積土は基本層Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ層が確認されたが、V層は見られない。I層の直下には厚さ20 cmの盛土層が存在し、この下で確認されたⅡ層は概ね水平堆積である。Ⅲ層では下位に存在する泥炭層が不規則に入り込み、Ⅳ層との層面はやや整合性を呈する。またⅣ層上面では西側への傾斜がみられる。なお、遺構・遺物は発見されていない。

【9 トレンチ】

9 トレンチは東西4 m、南北2 mの8 m²に設定した。現地表面より100 cmまで重機を用いて掘削し、その後人力で底面及び北壁を精査し、遺構の有無を判断した。堆積土は基本層Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ層が確認された。I層の直下には厚さ40 cmの盛土層が存在し、II層は概ね水平堆積である。この下で確認されたⅢ層では下位に存在する泥炭層が不規則に入り込む。Ⅲ層は厚く堆積しており、Ⅳ・V層は見られない。なお、遺構・遺物は発見されていない。

【10 トレンチ】

10 トレンチは東西4 m、南北2 mの8 m²に設定した。現地表面より110 cmまで重機を用いて掘削し、その後人力で底面及び北壁を精査し、遺構の有無を判断した。堆積土は基本層Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・V層が確認された。I層の直下には厚さ30 cmの盛土層が存在し、II層は概ね水平堆積である。この下で確認されたⅢ層は東側へ緩やかに傾斜し、下位に存在する泥炭層が不規則に入り込む。なお、遺構・遺物は発見されていない。調査終了後にV層の厚みを把握すること目的としてトレンチ内東側を現地表面から220 cmまで掘り下げたが、下層の確認はできなかった。

d.まとめ

今回の上根崎遺跡の調査では、遺構・遺物は発見されなかつた。また長岡丘陵を形成するローム質土も未確認であり、湿地状の堆積のみが確認されたことから、遺跡は調査地点までは広がらないことが明らかとなった。一方で、7～10 トレンチではⅢ層中に下位にある泥炭層が不規則に入り込んでいることが確認されたが、これらは地震動に伴う液状化現象の痕跡である可能性が考慮される。今回の調査範囲ではこの痕跡の形成時期は把握できなかつたが、今後付近で調査を行う際には災害痕跡が発見される可能性があることを留意しなければならない。

5. 上根崎遺跡（第3次調査）



1-1 トレンチ全景（南東から）



1-2 トレンチ全景（南西から）



1-3 トレンチ全景（南西から）



1-4 トレンチ全景（南東から）



1-5 トレンチ全景（南東から）



1-6 トレンチ全景（南西から）



1-7 トレンチ作業風景（南東から）



1-8 トレンチ全景（南東から）

6. 長塚遺跡（第3次調査）

6. 長塚遺跡（第3次調査）

a. 遺跡の位置と環境

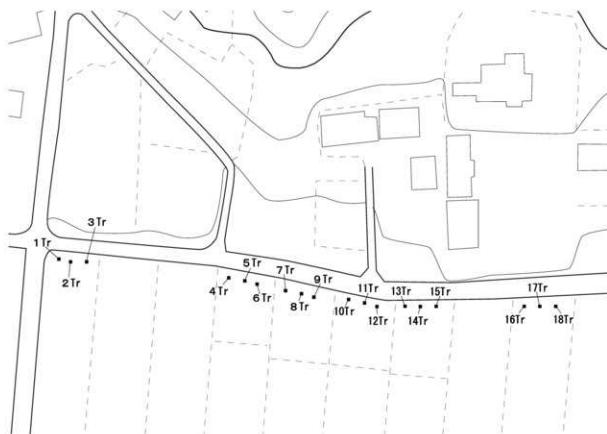
長塚遺跡はJR岩沼駅の北西約1.8kmに位置する。自然地形としては、岩沼西部丘陵から東へ張り出す標高18mほどの長岡丘陵中央付近の頂部から南側斜面、及び裾部にかけて広がる。遺跡の北側頂上部には、昭和26年に国学院大学によって調査が行われた長塚古墳が存在しており、遺跡内ではこれまで丘陵頂部付近を中心として繩文土器、弥生土器、土師器が採集されている（白鳥2015d）。



第134図 長塚遺跡位置図

b. 調査の経過

長塚遺跡での調査は、平成28年12月14日から16日にかけて実施した。調査では、隣接した杉の内遺跡での調査成果から対象地内でも遺構・遺物が極めて希薄である可能性が考慮されたことから、一辺が60cmほどの正方形の小トレンチを18箇所に設定し、人力で掘り下げを実施した。調査の成果については後述するが、調査範囲では遺構・遺物が存在しない可能性が極めて高いことが確認されたことから重機での掘削は行わず、各小トレンチの土層柱状図作成や写真撮影、小トレンチの位置を測量した後に埋戻しを行っている。



第135図 長塚遺跡トレンチ配置図 (1/1,200)

c. 調査成果

各小トレンチは深さ50cmを目標として掘削を行った。確認できた基本的な堆積層は、現地表面から10cmまでが現代水田耕作土である暗褐色粘質シルト、その下には厚さ10~40cmほどで褐色粘土ブロックをごく少量含む黒褐色粘土、そして最下部には未分解の植物遺体を多量含む黒色泥炭である。しかしながら、13~16トレンチでは泥炭層がみられず、また現代水田耕作土下の堆積土層も異なっていた。なお、遺構・遺物は発見されていない。

d. まとめ

調査では全域で湿地状の堆積層が広がることが確認されたが、堆積土層の状況から13~16トレンチの間では泥炭層が確認できなかったことから、北側の丘陵部裾付近から続く浜状の地形が埋没している可能性が考えられる。

報告書抄録

【引用・参考文献】

- 岩沼市教育委員会 2012 「上相崎道路」 岩沼市文化財調査報告書第11集
- 岩沼市教育委員会 2019 「熊野道路第1・2次調査報告書」 岩沼市文化財調査報告書第23集
- 岩沼市教育委員会 2020 「市内道路発掘調査報告書2」 岩沼市文化財調査報告書第25集
- 岩沼市史編纂委員会 2015 『岩沼市史』第4巻資料編I考古 岩沼市史編纂委員会
- 岩沼市史編纂委員会 2018 『岩沼市史』第1巻通史編I原始・古代・中世 岩沼市史編纂委員会
- 太田昭夫 2015a 「2-2 杉の内道路」 『岩沼市史』第4巻資料編I考古 岩沼市史編纂委員会
- 太田昭夫 2015b 「2-12 小上側道路」 『岩沼市史』第4巻資料編I考古 岩沼市史編纂委員会
- 川又隆央 2014 「2-5 熊野道路」 『岩沼市史』第4巻資料編I考古 岩沼市史編纂委員会
- 川又隆央 2018 「第12章第1節3 道路からみた岩沼市域の中世のムラと社会」 『岩沼市史』第1巻通史編I原始・古代・中世 岩沼市史編纂委員会

ふりがな	はらいせきだいらいらじょうさほか						
書名	原道跡第1次調査ほか						
著書名	岩沼西部・北部地区園場整備に伴う埋蔵文化財調査報告書						
巻次							
シリーズ名	岩沼市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第26集						
編集者名	川又隆央・武田裕光						
編集機関	岩沼市教育委員会						
所 在 地	〒989-2480 宮城県岩沼市浜丁目6-20 TEL(0223)-22-1111						
発行年月日	西暦 2021年3月31日						
所収道路	所在地	コード 市町村、遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
原道跡	岩沼市南長字子上	42111 15053	38.05.06	140.51.08	2016.10.14 ~2017.07.26	515 m ²	
櫛道跡	岩沼市南長字子上	42111 15064	38.05.15	140.50.46	2016.11.22 ~12.09	170 m ²	岩沼西部地区 園場整備
南玉崎道路	岩沼市南長字子上崎	42111 15049	38.05.03	140.50.46	2016.10.11 ~10.12	142 m ²	
長谷古道跡	岩沼市南長字子上蛭ヶ京	42111 15020	38.05.32	140.50.42	2016.12.14 ~2017.01.19	150 m ²	
古道跡	岩沼市南長字子田中	42111 15066	38.05.52	140.50.35	2017.10.11 ~10.18	24 m ²	
烟堤上貝塚	岩沼市南長字子田中	42111 15026	38.06.02	140.50.32	2017.10.11 ~10.18	62 m ²	
熊野道跡	岩沼市三色字子梅	42111 15015	38.07.14	140.50.51	2017.01.05 ~01.06	51 m ²	
杉の内道路	岩沼市三色字子松	42111 15006	38.07.28	140.50.53	2016.12.13 ~12.26	190 m ²	
上横道道路	岩沼市法螺字八幡	42111 15068	38.07.40	140.50.49	2016.12.16 ~12.22	73 m ²	
長坂北道跡	岩沼市長岡字八橋	42111 15048	38.07.37	140.51.09	2018.10.29 ~11.14	72 m ²	
上横道道路	岩沼市長岡字西當富	42111 15030	38.07.28	140.51.06	2018.10.02 ~10.03	80 m ²	
長坂道跡	岩沼市三色字子松	42111 15067	38.07.22	140.51.19	2016.12.14 ~12.16	6 m ²	
所収道路	種別	主な時代	主な遺物	主な遺物	特記事項		
原道跡	官衙開闢施設 集落跡	古墳・古代	獨立柱建物跡 堅穴建物跡 木構大溝跡	土師器 須恵器	獨立柱建物跡・堅穴建物跡を多 数発見。また須恵器陶製品とみ られる須恵器皿面鏡が出土		
櫛道跡	集落跡	古代・中世・近世	獨立柱建物跡	近世陶磁器	壇に埋込まれた廃敷地を確認		
南玉崎道路	散布地	縄文・弥生	溝跡	近世陶磁器			
長谷古道跡	城郭跡	中世・近世	溝跡	中世陶器	城郭南側の溝跡を確認		
古道跡	散布地	縄文・弥生	なし	なし			
烟堤上貝塚	貝塚・集落跡	縄文・古墳・古代	なし	縄文土器 土師器			
熊野道跡	集落跡	古墳・古代	なし	土師器			
杉の内道路	集落跡	弥生・古墳・古代	溝跡	近世陶磁器			
上横道道路	集落跡	弥生・古墳・古代	なし	須恵器			
長坂北道跡	散布地	縄文	なし	なし			
上横道道路	集落跡・散布地	縄文・弥生・古代・中世	なし	なし			
長坂道跡	散布地	縄文・古墳	なし	なし			
今回の調査は、岩沼市西地区・6重塚跡、岩沼市北地区・6重塚跡を対象として実施した。いざれの調査も排水路整備に伴うものから、調査区の幅約12mである。原則的には、古墳時代末から奈良・平安時代の土器が多く出土し、1回あたり1m×1mの範囲で発掘を行った。出土した遺物の多くは、古墳時代後葉期から产生されたとされる須恵器や印加陶器が組合せており、質的な複数性が強い。地理的特徴からは古道(山道)、及び常磐街道から北上する宮城道連絡線が遺跡周辺を通過するところが想定されるところ、「鎌倉式」に記載される五輪駅家、あるいは名取駅跡から出土した小箱に記された王室刻に開闢するにみられ、国内でも藤原詔刺例が少く、交通に関する記載が存在する可能性が高い。櫛道跡では一辺約60cmほどの壠に囲まれた屋敷地を確認した。長谷古道跡では櫛道の南側に幅17 mの壠が存在していることが確認された。							

要約

岩沼市文化財調査報告書第 26 集

原遺跡第 1 次調査ほか

—岩沼西部・北部地区開墾整備に伴う埋蔵文化財調査報告書—

令和 3 年 3 月

発行 岩沼市教育委員会

岩沼市桜 1 丁目 6 番 20 号

生涯学習課 TEL0223(22)1111 内線 573

印刷 株式会社 国井印刷

岩沼市藤浪 1 丁目 4 番 35 号

TEL0223(22) 2221